

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次）ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

【設置の趣旨・目的等】

1. 本学部において設定する「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」の3つのドメインについて、設定の考え方が不明確であるため、以下の点を踏まえて、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。（是正事項） p.6

・「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.3～4の「（3）本学における必要性」において、「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」ドメインを教員の研究テーマとして例示している。しかしながら、例えば「ビジネス・文化」ドメインについて、ビジネスと文化のつながりが説明されておらず、これらが一つのドメインとして設定する考え方が判然としない。

2. 審査意見1のとおり、本学部設置の趣旨・目的に掲げる3つのドメイン設定の妥当性が判然としないため、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できない。このため、審査意見1の対応を踏まえ、適切な3つのドメイン設定に基づき、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが適切に設定されていることを、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項） p.18

3. 本学部のアドミッション・ポリシーについて、以下の点を踏まえて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づく教育内容に照らし、適切なアドミッション・ポリシーが設定されていることを、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。
（是正事項） p.24

・ディプロマ・ポリシーにおいて「データサイエンス・AI」の活用に関する素養を掲げ、カリキュラム・ポリシーにおいて「データサイエンス・AI」について基礎から応用まで修得するための教育課程を編成する計画であることから、受け入れる学生には一定程度の数学的素養が求められると見受けられる。しかしながら、知識・技能に関するAP1では「高等学校までに修得すべき基礎的な学力を身につけている」としているのみで、具体的な素養が示されていないため、適切なアドミッション・ポリシーが設定されているか、判断できない。

4. 「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.3の「（3）本学における必要性」において、「デジタル情報技術の活用は・・・持続可能な社会課題、とりわけ環境、自然、健康といった分野に・・・必要な様々な非言語データの種類やその測定手法自体が少なく、普及に至っていない」と説明しているが、本学部は「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」ドメインに関する社会課題の効果的な解決策を提供することを目標とすることを掲げていることから、これらの分野に必要な様々な非言語デー

タの種類やその測定手法自体が少ない状況でどのように学生に対して教育していく計画なのかを明示すること。(改善事項) p.31

【名称等】

5. 審査意見1～3のとおり、本学部設置の趣旨・目的並びにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーが判然としないことから、本学部の学部・学科名称及び学位名称の妥当性が判断できないため、関連する審査意見への対応及び以下の点を踏まえて、適切な名称が付されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(是正事項) p.33

・「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.12～13の「③学部・学科等の名称及び学位の名称」において、「人間中心社会の実現のために3つのドメインについての社会課題解決のための理論を学ぶ」学部・学科であることから、学部・学科名称は「学問領域を総称してヒューマン・データサイエンス」と冠する名称を付すと説明している。しかしながら、学位の名称は、「学士(データサイエンス)」としているため、学部・学科名称の理由を踏まえれば、適切な学位名称が付されているか、疑義がある。

・また、「設置の趣旨等を記載した書類(本文)」p.4の「(1)養成する人材像」において、「人材養成のために提供する教育・研究の方向性は、『生活・健康』『地域・環境』『ビジネス・文化』ドメインの社会課題の理解・把握、その解決におけるデータサイエンス・AIの活用が主眼となる」とし、養成する人材像が身につけるべき資質として、「社会課題発見スキル×データサイエンス・AI活用スキル×プロジェクトマネジメントスキル」と説明していることから、本学部の「人材養成の目的、研究対象分野」は、「データサイエンス」のみではないと見受けられるため、適切な学位名称が付されているか、疑義がある。

6. 本学部が授与する学位の分野を「工学関係」とすることの妥当性が判断できないため、関連する審査意見への対応及び以下の点を踏まえて、適切な学位の分野が位置付けられていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。(是正事項) p.39

・DP1において、「『生活・健康』『地域・環境』『ビジネス・文化』の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる」ことを掲げており、本学部の養成する人材像が身につけるべき資質として、「社会課題発見スキル×データサイエンス・AI活用スキル×プロジェクトマネジメントスキル」と説明していることから、本学が授与する学位において、相当程度「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」の3つのドメインに関する素養も位置づけられていると見受けられるため、学位の分野を「工学関係」とする妥当性が判然としない。

【教育課程等】

7. 審査意見2のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、教育課程全体が適切に編成されているかも判断できない。このため、関連する審査意見への対応や以下に例示する点を踏ま

えて、本学部の教育課程が適切なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系性が担保された上で、適切に編成されていることを明確かつ具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。(是正事項) p.44

・「生活・健康」ドメインに関する教育課程について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.4 に示されている研究テーマの例示によれば、「心理学」や「リハビリテーション」に関する内容を扱うドメイン設定であるように見受けられ、これらの基礎的な内容を学修する授業科目が編成されているものの、「生活・健康」としてこれらの知識を掛け合わせて社会課題を理解するための授業科目が判然とせず、CP1に基づき適切な教育課程が編成されているか、疑義がある。

・また、「健康」に関して、例えば「リハビリテーション論」では、「シラバス」において「データサイエンスを活用した評価・効果測定の方法についても学ぶ」としてリハビリテーション各領域とデータサイエンスを関連付けて学修する計画に見受けられるが、社会課題を理解する上で、ビッグデータから価値を見出すヘルスデータサイエンスに関する知識が必要であると考えられるものの、これらを扱う計画であるのか判然としない。

・加えて、例えば「地域・環境」ドメインに配置されている授業科目「ジェンダーと開発研究」や「家族生活論」は、「生活・健康」ドメインにも必要と考えられるような授業内容であるため、同ドメインとして適切な教育課程が編成されているか判然としない。

・「地域・環境」ドメインに関する教育課程について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.4 に示されている研究テーマの例示によれば、「自然環境保護」に関する内容を扱うドメイン設定であるように見受けられるが、例えば授業科目「自然環境保護論」について、授業内容が動物保護を扱う内容に留（とど）まっており、「自然環境保護」の観点が十分ではないと見受けられ、授業科目名称との関係も判然としないなど、CP1に基づき「環境」に関する教育課程が十分に編成されているか、疑義がある。

・「ビジネス・文化」ドメインに関する教育課程について、審査意見1のとおり、ビジネスと文化を同じドメインに設定する趣旨が判然としないため、「比較教育学」や「比較文化論」などの授業科目が、ビジネスに関する社会課題の解決のためにどのように関係するのか、判然としない。

・また、ビジネスに関する授業科目について、「事業戦略論」や「マーケティング概論」のように社会課題を解決するための手法に関する授業科目が編成されているものの、例えば「会計論」などのような社会課題を理解するための前提となる知識を修得する授業科目が見受けられず、CP1に基づき適切な教育課程が編成されているか、疑義がある。

・授業科目「社会調査法実践Ⅰ・Ⅱ」について、「シラバス」によれば、質的調査に関する授業計画になっていると見受けられる。しかしながら、本学部はデータサイエンスによる量的な分析スキルを身につける学部であることに鑑み、量的調査を実践できる授業内容が必要と考えられるため、適切な教育課

程が編成されているか、疑義がある。

8. 本学部の学部・学科名称、学位名称及び学位の分野に照らし、教育課程との関係性が判然としないため、以下の点を踏まえ、各名称を付すことにふさわしい教育課程が編成されていることを、具体的かつ明確に説明すること。(是正事項) p.67

・「人間中心社会の実現のため」に学ぶ学部・学科であることから、学部名称に「ヒューマン」を冠しているが、例えば関連すると思われる授業科目「ヒューマンデータ可視化法」及び「IoT とヒューマンデータ」の「シラバス」によれば、「ヒューマンデータ」を扱う授業計画には見受けられず、どのように「人間中心社会の実現」するための教育課程が編成されているのか、判然としない。

・卒業要件上、データサイエンスに関する授業科目の必修科目は 26 単位の設定であり、学生が選択するドメインによっては、それ以外の卒業要件修得単位を人文社会学系の学修によって満たすことも可能な計画であると見受けられることから、学部・学科名称及び学位名称に「データサイエンス」を冠し、学位の分野を「工学関係」としていることに照らし、ふさわしい教育課程が編成されているのか疑義がある。

9. 主要授業科目の考え方について、適切な設定がなされているのか疑義があるため、以下の点を踏まえて、明確に説明すること。(是正事項) p.72

・授業科目「ドメインとデータ解析演習 A～G」について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.24 において、当該科目は「ドメインごとに必要とされるデータ解析手法を修得することができる」科目であると説明しており、本学部の趣旨に鑑みれば、ディプロマ・ポリシーの達成にとって重要な科目であると見受けられるが、当該科目は主要授業科目に設定されておらず、1 科目を除き、基幹教員が担当しない計画である。このため、大学設置基準第 8 条において主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、適切な主要授業科目が設定されているか判然としない。

【入学者選抜】

10. 審査意見 3 のとおり、アドミッション・ポリシーの妥当性が判然としないため、選抜方法の妥当性も判断できないが、関連する審査意見への対応や以下の点を踏まえて、適切なアドミッション・ポリシーに基づいた選抜が行われることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(是正事項) p.76

・「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.36 の「(2) 入試区分ごとの募集人数と選考方法、アドミッション・ポリシーとの対応」において、例えば、「一般選抜」において、「大学入学共通テスト利用選抜」では、「数学」又は「情報」を少なくとも 1 科目は選択することを求めているが、「全学統一選抜」では、英語の他、「(国語、数学、化学、生物、情報) より 1 科目」と設定しているため、「数学」や「情報」を選択しない学生も想定できることから、本学部の教育を受けるために必要な資質・能力を適

切に評価・判定できる選抜方法が設定されているか、疑義がある。

【教育研究実施組織】

1 1. 本学全体において、大学設置基準第 10 条に定める基幹教員の半数以上は原則として教授とする規定を満たしていないため、適切に改めること。(是正事項) p.80

1 2. 「基本計画書」において、外国語学部及び人間学部において、「教職課程センター」として既設分の基幹教員数等を記載しているが、これらの組織は学位プログラムを実施する組織ではないと見受けられることから、当該組織として記載している教員数は、大学設置基準に定める基幹教員数に含めることはできないため、適切に改めること。(是正事項) p.82

1 3. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する教員を基幹教員以外の教員で補充する場合には、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。

(是正事項) p.83

1 本学部において設定する「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」の3つのドメインについて、設定の考え方が不明確であるため、以下の点を踏まえて、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて改めること。

・「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.3～4の「(3) 本学における必要性」において、「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」ドメインを教員の研究テーマとして例示している。しかしながら、例えば「ビジネス・文化」ドメインについて、ビジネスと文化のつながりが説明されておらず、これらが一つのドメインとして設定する考え方が判然としない。

(対応) 審査意見を踏まえ、ドメイン設定の再整理を行うとともに「ビジネス」領域の教育課程における位置づけを変更し、科目区分の名称、教員の研究テーマ例、ゼミナール開講テーマ、図書の整備の考え方について以下の通り対応を行った。

【対応1】本学部におけるドメイン設定の再整理

本学部におけるドメインの設定にあたっては、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.3「(3) 本学における必要性」に記載のとおり、本学の保健医療技術学部、人間学部、外国語学部、経営学部がそれぞれ研究対象としてきた課題を、ヒューマン・データサイエンス学部がデータサイエンス・AIと掛け合わせるべき対象として再整理するという考えのもと、当初の構想を行っていた。具体的には、保健医療技術学部では「生活」および「健康」に関する研究、人間学部では「心理」や「社会との関わり（地域）」に関する研究、外国語学部では「異文化理解（文化）」に関する研究、経営学部では「ビジネス」に関する実践的な研究を行ってきた。こうした6つの研究対象を基盤とし、それぞれにデータサイエンスを掛け合わせる形で、本学部のドメインを構想していた。

そして当初は、これらの研究対象を本学部が取り組むべき社会課題の領域として束ねる目的から、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の3つのドメインとして設定していた。「生活」と「健康」は、QOL向上を共通の目的とする医療・福祉・介護・心理支援等の領域を横断的に扱う枠組みとして構成し、「地域」と「環境」は、地域や環境を含む持続可能な社会づくりにおいて共通する視点を持つ課題として包括的に整理した。「ビジネス」と「文化」については、価値観の理解や組織・社会における協働の在り方などを扱う構成としていた。

このように、当初の計画では、既存学部で培われた研究資源を活かしつつ、それぞれの研究対象にデータサイエンスの視点を加えて再構成することで、教育課程の体系性と社会実装の両立を目指していた。一方で審査意見の通り、例えば「ビジネス・文化」ドメインでは、ビジネスと文化を統合して社会課題を理解するような目的で設定していたものではなく、あくまで社会課題の領域を束ねたものであったことから、ドメイン設定の考え方及び教育課程の編成の目的が不明確であった。

審査意見を踏まえ、従来の6つの研究対象を踏まえて設定していた「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の構成を見直し、3つのドメインを「ヘルスケア(Healthcare)」「地域づくり (Regional Development)」「異文化間コミュニケーション(Intercultural Communication)」と修正した。これは、本学部が目指す「人間中心社会」の実現に向けて、「個人の心身の健康、地域社会における

人々と環境との共存、人々の多様な価値観の受容」といった観点から社会課題の解決に寄与するべきという考えから、取り扱うドメイン領域を設定するものである。具体的には、「ヘルスケア」ドメインでは、一人ひとりの心と身体の健康の理解のために必要な基礎知識を扱う。また、「地域づくり」ドメインでは、地域の社会構造と自然環境を含む「持続可能な地域運営」にフォーカスし、住民参加・環境保全・経済振興を扱う。最後に「異文化間コミュニケーション」ドメインでは多様な価値観受容を扱う。以上の3ドメインの設置の考え方を明確にすることで、個人の課題から地域社会、さらには文化的な枠組みに至るまで、さまざまな視点で「人間中心社会」の実現への寄与を目指し、教育課程を編成することについて説明を行った。

なお、これらのドメイン設定の考え方の根拠として、「設置の趣旨等を記載した書類（資料）」の p.13 で示す Stanford University における研究所に加えて、OECD が提示する”Regional Development Studies”に関する書籍を【資料1】に示す。

【対応2】「ビジネス」領域の教育課程における位置づけの変更

ビジネス、とりわけ経営学に関する知識やスキルは、課題解決における実際の取り組みに加え、それを無理なく継続していくための経済的な支えや経営の視点を提供するものであり、営利企業に限らず、NPO や自治体、地域活動など多様な組織においても活用される重要な基盤である。このような背景から、「ビジネス・文化」ドメイン内に配置していたビジネスに関する教育課程を「プロジェクトマネジメント科目」内に配置し、「経営学基礎」科目という新たな科目区分を設けた。「経営学基礎」科目には、必修科目として2年次前期に新設する「経営学入門」、2年次後期以降の選択科目として「事業戦略論」「マーケティング概論」「企業会計Ⅰ」「企業会計Ⅱ」を配置した。また「プロジェクトマネジメント科目」に配置していた「DX マネジメント概論」についても「経営学基礎」科目区分の選択科目として配置した。必修科目とする「経営学入門」では、企業経営の要諦である「人・モノ・金・情報」について社会的責任という観点も踏まえて学び、学生がどのドメインの研究テーマとして選択する場合でも、解決すべき組織や現場の背景を理解し、経済的に持続可能な解決策を提案するための知識を身につけられるようにする。「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.28 の「主要授業科目の考え方」より「経営学入門」は主要授業科目であると位置づける。

「パーソナルファイナンス」については、当初は個人を対象とするファイナンス分野について学ぶことで個人を取り巻くキャッシュフローに関する課題を理解するものとして配置をしていたが、今回のドメイン設定の変更に伴い、より教養知識的な位置づけが強いことを踏まえ、「教養科目」区分に配置を変更した。

【対応3】ドメイン科目の区分名称の変更

【対応1】で再整理したドメイン設置の前提として、本学では Society 5.0 が目指す「人間中心社会」を「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会」と解釈し直している。その解釈に基づき、上記の3ドメインに関連する科目区分は、心身の健康、環境、地域社会、都市、文化理解、教育などの領域における社会課題を理解・把握するための基礎知識体系として位置づける。これらの科目区分を「ヒューマン・ドメイン科目」と定義し、「ドメイン科目」から変更した。

【対応 4】教員の研究テーマ例の再整理

上記対応 1～3 を踏まえ、それぞれのドメインにおける教員の研究テーマも再整理を行った。当初は将来的な取り組みの可能性も含めて幅広くテーマを列挙していたが、教育内容と連動する形でテーマを設定し直している。具体的には以下の通りである。

(修正前)

【生活・健康ドメイン】

嚥下機能障害の判定経験⇒機械学習による画像認識

義肢調整作業の「匠の技」⇒センサーデータの深層学習

時系列バイタルデータの取得と心理指標比較⇒時系列感性・意味波形モデルによる感性遷移の評価

【地域・環境ドメイン】

産業廃棄物不法投棄のフィールド調査⇒時空間データベースによる解析

森林管理のための森林資源の可視化⇒ドローン活用による 3D データ計測と AI 画像認識による可視化

途上国農村開発における水害・害虫発生予想⇒時空間データベースによる可視化・分析、スマート農業

特定地域における人口減少の要因分析と解決案⇒人口動態シミュレーション

【ビジネス・文化ドメイン】

商業施設の商圈・消費者行動分析⇒回遊、滞留などの人流ビッグデータの AI 分析

観光地での案内業務の AI 対応化⇒観光ガイドの Web サイトに AI チャットボットを設置、多言語案内業務化の推進

人材不足で衰退していく伝統産業の支援⇒工芸士の技術を学習した AI による出来栄え判断、品質向上の貢献

地域文化財のデジタルアーカイブ化とバーチャル観光資源としての活用⇒インターネット+VR 技術

(修正後)

【ヘルスケア】ドメイン

嚥下機能障害の判定⇒機械学習による画像認識

ウェアラブル端末を用いた時系列バイタルデータの取得と心理指標比較⇒時系列感性・意味波形モデルによる感性遷移の評価

【地域づくり】ドメイン

産業廃棄物不法投棄のフィールド調査⇒時空間データベースによる解析

特定地域における防災計画⇒防災シミュレーション

地域コミュニティのネットワーク調査⇒ソーシャルダイナミクスによるコミュニティモデル構築

特定地域における人口減少の要因分析と解決案⇒人口動態シミュレーション

【異文化間コミュニケーション】ドメイン

地域文化財のデジタルアーカイブ化とバーチャル観光資源としての活用⇒VR 技術

多言語発信メディアにおける視聴傾向の分析とコンテンツ改善提案 ⇒ アクセスログ解析・機械学習
文学・歴史・報道記事など人文社会学の分析⇒テキストマイニング・トピックモデルによる分析

【対応 5】開講ゼミナールのテーマ整理

ドメインの整理に伴い、開講予定のゼミナールについて再整理を行った。具体的には、「ビジネス・文化」ドメインで開講予定としていた「マーケティング戦略の実践」について、テーマを「社会課題とマーケティング」に変更した。また「地域づくり」ドメインでは「街と空間に基づいた人の行動解析・人流シミュレーション」のテーマでゼミナールを追加で開講し、地域づくりにおけるデータサイエンス・AI の活用に関する研究を拡充することとした。

【資料 1】OECD Regional Development Studies 書籍情報

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.3)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>2. 設置の社会的必要性</p> <p>(3) 本学における必要性</p> <p>(略)</p> <p>本学の既存の保健医療技術学部、人間学部、外国語学部、経営学部においては、それぞれの学部の学びの対象である<u>心身の健康、地域開発、環境保全、国際協力、ビジネス分野の社会課題解決</u>に必要な基礎及び専門的知識の伝授に努めてきた。そこで、新学部では、既存 4 学部の教育・研究活動で培ったドメイン知識に、データサイエンスや AI（機械学習）を応用し、社会課題解決につながる文理融合型教育を行うことが必要であると着想した。</p> <p>具体的には、新学部では Society5.0 に掲げられた「人間中心社会」の実現に向け、既存学部がこれまで取り組んできた領域を踏まえ、「<u>個々人の心身の健康、地域における人々と環境との共存、人々の多様な価値観の受容</u>」といった観点から社会課題の解決に寄与するべきと考えた。それらの領域に結び付く 3 つのドメインとして、「ヘルス</p>	<p>(p.3)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>2. 設置の社会的必要性</p> <p>(3) 本学における必要性</p> <p>(略)</p> <p>本学の既存の保健医療技術学部、人間学部、外国語学部、経営学部においては、それぞれの学部の学びの対象である「生活・健康」「地域・環境」</p> <p>「ビジネス・文化」ドメインの課題として、その解決に必要な基礎及び専門的知識の伝授に努めてきた。そこで、新学部では、既存 4 学部の教育・研究活動で培ったドメイン知識に、データサイエンスや AI（機械学習）を応用し、社会課題解決につながる文理融合型教育を行うことが必要であると着想した。</p> <p>具体的に述べると、ドメインの経験知にデータサイエンス・AI 活用を「掛け合わせる」ことで、データにもとづいた社会課題の効果的な解決策を提供することを目標とする。例えば、教員の研究テーマとしては次のような例が考えられる。</p>

<p>ケア (Healthcare)」「<u>地域づくり (Regional Development)</u>」「<u>異文化間コミュニケーション (Intercultural Communication)</u>」ドメインを設定する。具体的には、「ヘルスケア」ドメインでは、一人ひとりの心と身体 の健康の理解のために必要な基礎知識、さらに健康の維持・促進のための様々なデータ指標の活用を扱う。また「地域づくり」ドメインでは、地域の社会構造と自然環境を含む「持続可能な地域運営」にフォーカスし、住民参加・環境保全・経済振興施策を扱う。最後に「異文化間コミュニケーション」では、異なる文化背景をもつ人々の間での言語・非言語コミュニケーションや比較文化を通して、人々の多様な価値観受容を扱う。以上の3ドメインを設置することで、個人の課題から地域社会、さらには多様な文化との共生に至るまで、さまざまな視点で「人間中心社会」の実現への寄与を目指す。そのために、教育研究の方針として、ドメインの経験知にデータサイエンス・AI活用を「掛け合わせる」ことで、データにもとづいた社会課題の効果的な解決策を提供することを目標とする。</p> <p><u>これらのドメインの研究テーマについて、総合知による社会課題解決の提案を目的としたデータサイエンス・AI 活用例としては以下が考えられる。</u></p> <p>【ヘルスケア (Healthcare) ドメイン】 <u>嚥下機能障害の判定⇒機械学習による画像認識ウェアラブル端末を用いた時系列バイタルデータの取得と心理指標比較⇒時系列感性・意味波形モデルによる感性遷移の評価</u></p> <p>【地域づくり (Regional Development) ドメイン】 <u>産業廃棄物不法投棄のフィールド調査⇒時空間データベースによる解析</u></p>	<p>【生活・健康ドメイン】 嚥下機能障害の判定経験⇒機械学習による画像認識 義肢調整作業の「匠の技」⇒センサーデータの深層学習 時系列バイタルデータの取得と心理指標比較⇒時系列感性・意味波形モデルによる感性遷移の評価</p> <p>【地域・環境ドメイン】 産業廃棄物不法投棄のフィールド調査⇒時空間データベースによる解析 森林管理のための森林資源の可視化⇒ドローン活</p>
---	---

<p>特定地域における防災計画⇒防災シミュレーション</p> <p>地域コミュニティのネットワーク調査⇒ソーシャルダイナミクスによるコミュニティモデル構築</p> <p>特定地域における人口減少の要因分析と解決案⇒人口動態シミュレーション</p> <p>【異文化間コミュニケーション（Intercultural Communication）ドメイン】</p> <p>地域文化財のデジタルアーカイブ化とバーチャル観光資源としての活用⇒VR 技術</p> <p>多言語発信メディアにおける視聴傾向の分析とコンテンツ改善提案 ⇒ アクセスログ解析・機械学習</p> <p>文学・歴史・報道記事など人文社会学の分析⇒テキストマイニング・トピックモデルによる分析</p> <p>新学部においては、「社会課題発見」と「データサイエンス・AI 活用」をつなげる人材の養成を目的とするため、これらの例に見られる研究教育に取り組む必要がある。</p> <p>なお、これらのドメイン設定の妥当性を示す一例として、Stanford University における該当の研究所の Web サイトおよび OECD の Web サイトを【資料 9】にて示す。</p>	<p>用による 3D データ計測と AI 画像認識による可視化</p> <p>途上国農村開発における水害・害虫発生予想⇒時空間データベースによる可視化・分析、スマート農業</p> <p>特定地域における人口減少の要因分析と解決案⇒人口動態シミュレーション</p> <p>【ビジネス・文化ドメイン】</p> <p>商業施設の商圈・消費者行動分析⇒回遊、滞留などの人流ビッグデータの AI 分析</p> <p>観光地での案内業務の AI 対応化⇒観光ガイドの Web サイトに AI チャットボットを設置、多言語案内業務化の推進</p> <p>人材不足で衰退していく伝統産業の支援⇒工芸士の技術を学習した AI による出来栄え判断、品質向上の貢献</p> <p>地域文化財のデジタルアーカイブ化とバーチャル観光資源としての活用⇒インターネット+VR 技術</p> <p>これらの事例を実現するために、新学部においては、社会課題発見とデータサイエンス・AI 活用につなげる人材の養成を目的とする研究教育に取り組む必要がある。</p>
<p>(p.5)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(1) 養成する人材像</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>本学部において養成する人材像は、建学の精神「自立と共生」の下、「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人である。その人材養成のために提供する教育・研究の方向性は、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化</p>	<p>(p.4)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(1) 養成する人材像</p> <p>本学部において養成する人材像は、建学の精神「自立と共生」の下、「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人である。その人材養成のために提供する教育・研究の方向性は、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインの社会課題の理解・把握、そ</p>

<p>間コミュニケーション」ドメインの社会課題の理解・把握、その解決におけるデータサイエンス・AIの活用が主眼となる。また、その教育・研究の推進においては、既存4学部で連携実績のある企業、NPO、自治体や新たに連携を結ぶIT・DX企業などの協力を得る。更に、社会課題に対して様々なステークホルダーとのプロジェクトの立案やマネジメント経験を、学生に提供し、その成果をコミュニティに提案することが社会への還元として必要である。</p> <p>① 社会の課題を発見し、その課題を解決するための適切なデータサイエンス・AI活用手法が分かる</p> <p>② 社会課題解決に適切なデータを取得し、その分析が可能な能力を有す</p> <p>③ 社会課題に直面する人々やフルデータサイエンティストにより構成されるプロジェクトのマネジメントに寄与できる</p> <p>とまとめられる。これらを養成する人材が身につけるべき資質として明確にすれば、</p> <p>社会課題発見スキル × データサイエンス・AI活用スキル × プロジェクトマネジメントスキル</p> <p>の3つの<u>資質</u>にもとづき、解決策を提案できる能力を持った人材を養成することと換言できる。</p>	<p>の解決におけるデータサイエンス・AIの活用が主眼となる。また、その教育・研究の推進においては、既存4学部で連携実績のある企業、NPO、自治体や新たに連携を結ぶIT・DX企業などの協力を得る。更に、社会課題に対して様々なステークホルダーとのプロジェクトの立案やマネジメント経験を、学生に提供し、その成果をコミュニティに提案することが社会への還元として必要である。</p> <p>① 社会の課題を発見し、その課題を解決するための適切なデータサイエンス・AI活用手法が分かる</p> <p>② 社会課題解決に適切なデータを取得し、その分析が可能な能力を有す</p> <p>③ 社会課題に直面する人々やフルデータサイエンティストにより構成されるプロジェクトのマネジメントに寄与できる</p> <p>とまとめられる。これらを養成する人材が身につけるべき資質として明確にすれば、</p> <p>社会課題発見スキル × データサイエンス・AI活用スキル × プロジェクトマネジメントスキル</p> <p>の3つのスキルにもとづき、解決策を提案できる能力を持った人材を養成することと換言できる。</p>
<p>(p.10)</p> <p>②学部・学科等の特色</p> <p>1. 文理融合型教育</p> <p>第1の特色は、人文・社会科学的な視点から社会課題を理解・把握し、その解決に向けたデータの収集・処理・分析手法やAI活用法などの工学的手法を学ぶ文理融合型の教育を提供する点である。特筆すべき点は、「ヘルスケア」「地域づく</p>	<p>(p.9)</p> <p>②学部・学科等の特色</p> <p>1. 文理融合型教育</p> <p>第1の特色は、人文・社会科学的な視点から社会課題を理解・把握し、その解決に向けたデータの収集・処理・分析手法やAI活用法などの工学的手法を学ぶ文理融合型の教育を提供する点である。特筆すべき点は、「生活・健康」「地域・環</p>

<p>り」「異文化間コミュニケーション」といった多様な分野を1つの学部内で学び、社会課題に取り組めることである。したがって、入学者は文系・理系を問わず、広く社会課題の解決に情熱・興味・関心を持つ人を対象とし、卒業時には、広い視野で社会課題を理解・把握・発見する力と、データにもとづく合理的な意思決定・課題解決に貢献できる力を備えた人材を育成することを目指す。</p> <p>具体的には、1～2年次を中心に「データサイエンス科目」でデータサイエンスの基本的な手法やその応用を学び、同時に「<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>」で3つのドメイン「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の基礎知識を幅広く学ぶ。また、後述のように社会課題解決に向け3年次の「実践科目」のうち「ドメインとデータ解析演習」科目で3つのドメインにおいてデータ解析手法を活用し課題解決につなげるための知識を学ぶ。これにより文理融合を明確にカリキュラムとして提供している。</p>	<p>境」「ビジネス・文化」といった多様な分野を1つの学部内で学び、社会課題に取り組めることである。したがって、入学者は文系・理系を問わず、広く社会課題の解決に情熱・興味・関心を持つ人を対象とし、卒業時には、広い視野で社会課題を理解・把握・発見する力と、データにもとづく合理的な意思決定・課題解決に貢献できる力を備えた人材を育成することを目指す。</p> <p>具体的には、1～2年次を中心に「データサイエンス科目」でデータサイエンスの基本的な手法やその応用を学び、同時に「ドメイン科目」で3つのドメイン「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の基礎知識を幅広く学ぶ。また、後述のように社会課題解決に向け3年次の「実践科目」のうち「ドメインとデータ解析演習」科目で3つのドメインにおいてデータ解析手法を活用し課題解決につなげるための知識を学ぶ。これにより文理融合を明確にカリキュラムとして提供している。</p>
<p>(p.15)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>1. 教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）と教育課程の概要</p> <p>（略）</p> <p>CP1：本学部の養成する人材像の教育目標及びディプロマ・ポリシーのDP1「知識・理解」を達成するため、「大学特別科目」「教養科目」「キャリア・インターンシップ科目」区分で共生社会、英語、基本的な教養、キャリアデザインなどの基礎的な教養を身につける。また、「学科基礎科目」区分の「初年次演習Ⅰ」「初年次演習Ⅱ」にてアカデミックレポートの書き方やアカデミックリテラシー等の大学での学びへの基礎を整える他、「データサイエンスへのいざない」ではアートを題材にデータサイエンスを学ぶために必要となる数学やプログラミングの基礎を振り返り、大</p>	<p>(p.13)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>1. 教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）と教育課程の概要</p> <p>（略）</p> <p>CP1：本学部の養成する人材像の教育目標及びディプロマ・ポリシーのDP1「知識・理解」を達成するため、「大学特別科目」「教養科目」「キャリア・インターンシップ科目」区分で共生社会、英語、基本的な教養、キャリアデザインなどの基礎的な教養を身につける。また、「学科基礎科目」区分の「初年次演習Ⅰ」「初年次演習Ⅱ」にてアカデミックレポートの書き方やアカデミックリテラシー等の大学での学びへの基礎を整える他、「データサイエンスへのいざない」ではアートを題材にデータサイエンスを学ぶために必要となる数学やプログラミングの基礎を振り返り、大</p>

<p>学での学びに必要となる自学自習能力および学習言語能力を修得する。「<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>」区分の「<u>ヘルスケア</u>」「<u>地域づくり</u>」「<u>異文化間コミュニケーション</u>」では3つのドメインに関する社会課題を理解・把握するための基本的知識を身につける。</p> <p>(略)</p> <p>CP3：ディプロマ・ポリシーのDP3「態度・志向性」を達成するため、「プロジェクトマネジメント科目」区分の「<u>プロジェクトマネジメント</u>」にて1年次に課題解決型学習（Problem Based Learning）科目「未来体験プログラム」を配置する。この科目によって、社会課題解決に向けてICT等を活用する企業の取り組みを体験・理解することで、データサイエンス・AI活用手法の学修意欲の向上をはかる。2年次には、必修科目「プロジェクトマネジメント概論」を配置し、様々なステークホルダーにより構成されるプロジェクトを管理する手法を学ぶ。また、3年次にプロジェクト型学習（Project Based Learning）の必修科目「プロジェクトマネジメント演習」を配置する。この科目では、学生は実社会の事例の学習を通して主体的・能動的に社会課題を理解し、プロジェクトマネジメントに必要な態度・志向性を身につける。<u>また、「経営学基礎」科目では、社会課題解決の実効性やその実装の継続性を確保するために必要な経営学の基礎知識を学ぶ科目を配置する。</u></p>	<p>学での学びに必要となる自学自習能力および学習言語能力を修得する。「ドメイン科目」区分の「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」では3つのドメインに関する社会課題を理解・把握するための基本的知識を身につける。</p> <p>(略)</p> <p>CP3：ディプロマ・ポリシーのDP3「態度・志向性」を達成するため、「プロジェクトマネジメント科目」区分にて1年次に課題解決型学習（Problem Based Learning）科目「未来体験プログラム」を配置する。この科目によって、社会課題解決に向けてICT等を活用する企業の取り組みを体験・理解することで、データサイエンス・AI活用手法の学修意欲の向上をはかる。2年次には、必修科目「プロジェクトマネジメント概論」を配置し、様々なステークホルダーにより構成されるプロジェクトを管理する手法を学ぶ。また、3年次にプロジェクト型学習（Project Based Learning）の必修科目「プロジェクトマネジメント演習」を配置する。この科目では、学生は実社会の事例の学習を通して主体的・能動的に社会課題を理解し、プロジェクトマネジメントに必要な態度・志向性を身につける。</p>
<p>(p.23)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(B)「教養科目」</p> <p>(略)</p> <p>◆選択科目</p> <p>多様な視野を身につけるための基本的な教養科目</p>	<p>(p.21)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(B)「教養科目」</p> <p>(略)</p> <p>◆選択科目</p> <p>多様な視野を身につけるための基本的な教養科目</p>

<p>や社会について理解するための教養科目として、 「日本国憲法」「法学」「哲学」「ジェンダー論」 「経済学」「フィットネス科学」「フィットネス科学演習Ⅰ」「フィットネス科学演習Ⅱ」「ジェンダード・イノベーションと地域社会」「<u>パーソナルファイナンス</u>」「社会調査法Ⅰ」「社会調査法Ⅱ」「社会統計学Ⅰ」「社会統計学Ⅱ」「量的データ分析」「質的データ分析」「<u>社会調査法実践Ⅰ（質的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅱ（質的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅰ（量的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅱ（量的）</u>」を配置する。学生は、自身の興味関心にもとづいて科目を履修する。</p> <p>（略）</p> <p>（F）「<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>」</p> <p>（略）</p> <p>（G）「プロジェクトマネジメント科目」 「プロジェクトマネジメント科目」は「プロジェクトマネジメント」と「経営学基礎」の2つの区分で構成される。 「プロジェクトマネジメント」は「①設置の趣旨及び必要性」の3.（1）養成する人材像で示したプロジェクトマネジメントスキルを身につけるために配置する科目で、「課題解決型学習（Problem Based Learning）」と「プロジェクト型学習（Project Based Learning）」から構成される。</p> <p>（略）</p> <p>「経営学基礎」区分では、現代社会におけるあらゆる課題解決の実装・持続に不可欠な経営学に関する知識・スキルを身につける科目を配置する。これらの科目の知識は、<u>営利企業のみならず、NPOや自治体、地域活動など、さまざまな組織体に共通する基盤的知識となる。まず、2年次前期に必修科目「経営学入門」を配置し、プロ</u></p>	<p>や社会について理解するための教養科目として、 「日本国憲法」「法学」「哲学」「宗教の世界史」「ジェンダー論」「経済学」「フィットネス科学」「フィットネス科学演習Ⅰ」「フィットネス科学演習Ⅱ」「ジェンダード・イノベーションと地域社会」「社会調査法Ⅰ」「社会調査法Ⅱ」「社会統計学Ⅰ」「社会統計学Ⅱ」「量的データ分析」「質的データ分析」「社会調査法実践Ⅰ」「社会調査法実践Ⅱ」を配置する。学生は、自身の興味関心にもとづいて科目を履修する。</p> <p>（略）</p> <p>（F）「ドメイン科目」</p> <p>（略）</p> <p>（G）「プロジェクトマネジメント科目」 「①設置の趣旨及び必要性」の3.（1）養成する人材像で示したプロジェクトマネジメントスキルを身につけるために配置する科目で、「課題解決型学習（Problem Based Learning）」と「プロジェクト型学習（Project Based Learning）」から構成される。</p> <p>（略）</p> <p>（追加）</p>
---	---

<p>プロジェクトを推進する前提となる経営学を理解するための基礎知識を身につける。具体的には、会計論や事業戦略の基本、組織の社会的責任のあり方等を取り扱う。2 年次後期からは、選択科目として「事業戦略論」「マーケティング概論」「企業会計Ⅰ」「企業会計Ⅱ」「DX マネジメント概論」を配置する。</p>	
--	--

(新旧対照表) 授業科目の概要 (基本計画書)

新	旧
<p>(p.30)</p> <p>科目名：<u>経営学入門</u></p> <p><u>本講義科目では、経営学における基礎的な概念・知識を身に付けることを目的とする。企業経営の要諦として挙げられる「人・モノ・金・情報」を軸に授業を行い、リーダーシップ、人事評価、マーケティング戦略、企業会計等について、組織の社会的責任の観点も踏まえて講義を行う。この科目は、2 年次後期以降に履修するプロジェクトマネジメント科目、経営学基礎科目への橋渡しの位置づけとする。</u></p>	<p>(追加)</p>
<p>(p.32)</p> <p>科目名：ゼミナールⅠ・ゼミナールⅡ・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱ（共通）</p> <p>(略)</p> <p>【ヘルスケアドメイン】</p> <p>(③ 飯島史朗) 様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>(④ 神作一実) 発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>(⑫ 長野祐一郎) アフェクティブコンピューティング</p> <p>(⑭ 飯田開) 身体データと健康管理</p>	<p>(p.29)</p> <p>科目名：ゼミナールⅠ・ゼミナールⅡ・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱ（共通）</p> <p>(略)</p> <p>【生活・健康ドメイン】</p> <p>(3 飯島史朗) 様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>(4 江原義弘) バイオメカニクスの観点から考える日常生活動作 (ADL) 向上トレーニング手法の構築</p> <p>(5 神作一実) 発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>(13 長野祐一郎) アフェクティブコンピューティ</p>

<p>【地域づくりドメイン】</p> <p>(① 浅野俊幸) 街と空間に基づいた人の行動解析・人流シミュレーション</p> <p>(⑧ 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(⑪ 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(⑯ 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>【異文化間コミュニケーションドメイン】</p> <p>(② 穴太克則) 問題解決への多変量解析・確率モデル・機械学習とその応用</p> <p>(⑤ 恒吉僚子) 多文化共生社会</p> <p>(⑦ 渡部吉昭) <u>社会課題とマーケティング</u></p> <p>(⑨ 小山治) 大学教育の職業的レリバンス(意義・有効性)</p> <p>(⑩ 登丸あすか) デジタルメディアとメディアリテラシー</p> <p>(⑬ 貫井万里) 異文化理解</p>	<p>ング</p> <p>(15 飯田開) 身体データと健康管理</p> <p>【地域・環境ドメイン】</p> <p>(9 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(12 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(17 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>【ビジネス・文化ドメイン】</p> <p>(2 穴太克則) 問題解決への多変量解析・確率モデル・機械学習とその応用</p> <p>(6 恒吉僚子) 多文化共生社会</p> <p>(8 渡部吉昭) マーケティング戦略の実践</p> <p>(10 小山治) 大学教育の職業的レリバンス(意義・有効性)</p> <p>(11 登丸あすか) デジタルメディアとメディアリテラシー</p> <p>(14 貫井万里) 異文化理解</p>
---	---

(新旧対照表) シラバス

新	旧
(p.226) 科目名： <u>経営学入門</u>	(追加)

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

2 審査意見1のとおり、本学部設置の趣旨・目的に掲げる3つのドメイン設定の妥当性が判然としないため、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できない。このため、審査意見1の対応を踏まえ、適切な3つのドメイン設定に基づき、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが適切に設定されていることを、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応) 審査意見1を踏まえ、3つのドメイン設定の再整理及びビジネス領域科目の位置づけの変更にあわせて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの修正を行った。

審査意見1の【対応1】において3つのドメインを「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」と設定し、当初「ビジネス・文化」ドメインに含めていたビジネスの領域をプロジェクトマネジメント科目区分内に「経営学基礎」区分を新設し、科目を移動した。これは、審査意見1の【対応2】で示した通り、いずれのドメインの課題に取り組む場合においても、プロジェクトを推進するためには経営学の基礎知識が必要になるためである。その対応を踏まえ、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーをそれぞれ修正した。

具体的には、ディプロマ・ポリシーのDP1においてドメインの名称を「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」に修正した。プロジェクトマネジメント科目区分に新設した「経営学基礎」科目については、当初設定していた「DP3：様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる」を到達するための教育課程であるため、「DP3-1：コミュニケーション力、マネジメントスキルを身につけている」を、「DP3-1：コミュニケーション力、経営学の基礎知識及びマネジメントスキルを身につけている」に修正した。カリキュラム・ポリシーにおいても、経営学基礎科目の考え方を明確にするため、CP3に「経営学の基礎知識」を修得する科目を配置することを追加した。

(ディプロマ・ポリシー 修正前)

DP1：基本的な教養を身につけており、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる

DP2：課題を客観的・論理的に解決するためにデータサイエンス・AIを活用できる

DP3：様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる

DP4：実社会の課題に対して、データサイエンス・AIを用いて解決策を提案できる

本学部 DP	詳細	学士力
DP1	(DP1-1) 基本的な教養知識を理解している (DP1-2) 3つのドメインに関する基礎的な知識を理解している	知識・理解

本学部 DP	詳細	学士力
	(DP1-3) 1つまたは複数のドメインについて社会課題を把握できる	
DP2	(DP2-1) 数量的分析スキルを身につけている (DP2-2) 情報処理能力（データ分析含む）を身につけている (DP2-3) 論理的思考力を身につけている (DP2-4) 問題解決手順を身につけている	汎用的技能
DP3	(DP3-1) コミュニケーション力、マネジメントスキルを身につけている (DP3-2) 与えられた課題の背景を理解する能力を身につけている (DP3-3) 課題解決に適したデータを収集する力を身につけている (DP3-4) 社会的責任を身につけている (DP3-5) 生涯学習力を身につけている	態度・志向性
DP4	(DP4-1) ドメイン知識をもとに社会課題を発見できる (DP4-2) データサイエンス・AIを活かして、課題解決案を作成できる (DP4-3) 課題解決案の妥当性を検討できる (DP4-4) 課題解決案の成果を発信できる力を身につけている	統合的な学習経験と 創造的思考力

（ディプロマ・ポリシー 修正後）

DP1：基本的な教養を身につけており、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる

DP2：課題を客観的・論理的に解決するためにデータサイエンス・AIを活用できる

DP3：様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる

DP4：実社会の課題に対して、データサイエンス・AIを用いて解決策を提案できる

本学部 DP	詳細	学士力
DP1	(DP1-1) 基本的な教養知識を理解している (DP1-2) 3つのドメインに関する基礎的な知識を理解している (DP1-3) 1つまたは複数のドメインについて社会課題を把握できる	知識・理解
DP2	(DP2-1) 数量的分析スキルを身につけている (DP2-2) 情報処理能力（データ分析含む）を身につけている (DP2-3) 論理的思考力を身につけている (DP2-4) 問題解決手順を身につけている	汎用的技能

本学部 DP	詳細	学士力
DP3	(DP3-1) コミュニケーション力、経営学の基礎知識及びマネジメントスキルを身につけている (DP3-2) 与えられた課題の背景を理解する能力を身につけている (DP3-3) 課題解決に適したデータを収集する力を身につけている (DP3-4) 社会的責任を身につけている (DP3-5) 生涯学習力を身につけている	態度・志向性
DP4	(DP4-1) ドメイン知識をもとに社会課題を発見できる (DP4-2) データサイエンス・AI を活かして、課題解決案を作成できる (DP4-3) 課題解決案の妥当性を検討できる (DP4-4) 課題解決案の成果を発信できる力を身につけている	統合的な学習経験と創造的思考力

(カリキュラム・ポリシー 修正前)

CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する

CP2:データサイエンス・AI の基礎から応用までを修得するための科目を配置する

CP3:プロジェクトマネジメント手法を修得するための科目を配置する

CP4:データサイエンス・AI を活用して社会課題の解決案を策定するための実践的な科目を配置する

(カリキュラム・ポリシー 修正後)

CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する

CP2:データサイエンス・AI の基礎から応用までを修得するための科目を配置する

CP3:プロジェクトマネジメント手法及び経営学の基礎知識を修得するための科目を配置する

CP4:データサイエンス・AI を活用して社会課題の解決案を策定するための実践的な科目を配置する

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(p.6) ①設置の趣旨及び必要性 3. 養成する人材像及び教育目標 (2) 学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー) (略) <ヒューマン・データサイエンス学部ディプロマ・ポリシー> 本学部では、下記の DP1～DP4 に定められた能力を修得し、所定の卒業要件を満たした者に、卒業を認定して学位を授与する。	(p.5) ①設置の趣旨及び必要性 3. 養成する人材像及び教育目標 (2) 学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー) (略) <ヒューマン・データサイエンス学部ディプロマ・ポリシー> 本学部では、下記の DP1～DP4 に定められた能力を修得し、所定の卒業要件を満たした者に、卒業を認定して学位を授与する。

<p>DP1：基本的な教養を身につけており、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる</p> <p>DP2：課題を客観的・論理的に解決するためにデータサイエンス・AIを活用できる</p> <p>DP3：様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる</p> <p>DP4：実社会の課題に対して、データサイエンス・AIを用いて解決策を提案できる</p> <p>(略)</p> <p>表2 DPの詳細と修得すべき4つの学士力の対応</p>			<p>DP1：基本的な教養を身につけており、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる</p> <p>DP2：課題を客観的・論理的に解決するためにデータサイエンス・AIを活用できる</p> <p>DP3：様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる</p> <p>DP4：実社会の課題に対して、データサイエンス・AIを用いて解決策を提案できる</p> <p>(略)</p> <p>表2 DPの詳細と修得すべき4つの学士力の対応</p>		
本学部 D P	詳細	学士力	本学部 D P	詳細	学士力
D P 1	<p>(DP1-1) 基本的な教養知識を理解している</p> <p>(DP1-2) 3つのドメインに関する基礎的な知識を理解している</p> <p>(DP1-3) 1つまたは複数のドメインについて社会課題を把握できる</p>	知識・理解	D P 1	<p>(DP1-1) 基本的な教養知識を理解している</p> <p>(DP1-2) 3つのドメインに関する基礎的な知識を理解している</p> <p>(DP1-3) 1つまたは複数のドメインについて社会課題を把握できる</p>	知識・理解
D P 2	<p>(DP2-1) 数量的分析スキルを身につけている</p> <p>(DP2-2) 情報処理能力（データ分析含む）を身につけている</p> <p>(DP2-3) 論理的思考力を身につけている</p> <p>(DP2-4) 問題解決手順を身につけている</p>	汎用的技能	D P 2	<p>(DP2-1) 数量的分析スキルを身につけている</p> <p>(DP2-2) 情報処理能力（データ分析含む）を身につけている</p> <p>(DP2-3) 論理的思考力を身につけている</p> <p>(DP2-4) 問題解決手順を身につけている</p>	汎用的技能

D P 3	(DP3-1) コミュニケーション力、 <u>経営学の基礎知識及びマネジメントスキル</u> を身につけている (DP3-2) 与えられた課題の背景を理解する能力を身につけている (DP3-3) 課題解決に適したデータを収集する力を身につけている (DP3-4) 社会的責任を身につけている (DP3-5) 生涯学習力を身につけている	態度・志向性
D P 4	(DP4-1) ドメイン知識をもとに社会課題を発見できる (DP4-2) データサイエンス・AI を活かして、課題解決案を作成できる (DP4-3) 課題解決案の妥当性を検討できる (DP4-4) 課題解決案の成果を発信できる力を身につけている	統合的な学習経験と創造的思考力
<p>(3) 教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）</p> <p>本学部では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を達成するため、教育課程編成・実施方法（カリキュラム・ポリシー）を下記の通り定める。</p> <p>CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する</p> <p>CP2:データサイエンス・AI の基礎から応用までを修得するための科目を配置する</p> <p>CP3:<u>プロジェクトマネジメント手法及び経営学の基礎知識</u>を修得するための科目を配置する</p> <p>CP4:データサイエンス・AI を活用して社会課題の解決案を策定するための実践的な科目を配置する</p> <p>(略)</p>		
D P 3	(DP3-1) コミュニケーション力、マネジメントスキルを身につけている (DP3-2) 与えられた課題の背景を理解する能力を身につけている (DP3-3) 課題解決に適したデータを収集する力を身につけている (DP3-4) 社会的責任を身につけている (DP3-5) 生涯学習力を身につけている	態度・志向性
D P 4	(DP4-1) ドメイン知識をもとに社会課題を発見できる (DP4-2) データサイエンス・AI を活かして、課題解決案を作成できる (DP4-3) 課題解決案の妥当性を検討できる (DP4-4) 課題解決案の成果を発信できる力を身につけている	統合的な学習経験と創造的思考力
<p>(3) 教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）</p> <p>本学部では、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を達成するため、教育課程編成・実施方法（カリキュラム・ポリシー）を下記の通り定める。</p> <p>CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する</p> <p>CP2:データサイエンス・AI の基礎から応用までを修得するための科目を配置する</p> <p>CP3:プロジェクトマネジメント手法を修得するための科目を配置する</p> <p>CP4:データサイエンス・AI を活用して社会課題の解決案を策定するための実践的な科目を配置する</p> <p>(略)</p>		

<p>(5) 養成する人材像と3つのポリシーの関係 (略)</p> <p>まず、養成する人材像と DP の関係を説明する。養成する人材像「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人材に必要な資質としては、本学部では①「社会課題発見スキル」、②「データサイエンス・AI 活用スキル」、③「プロジェクトマネジメントスキル」を身につけて、その応用として④「解決策を提案できる能力」が必要であるとする。そこで、最初の項目である①社会課題発見スキルについては、DP1 に示すように社会課題の理解の基礎となる基本的な教養を身につけることから始め、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の3つのドメインについて、ドメイン知識の基礎及び学生自身が関心をもったドメインについての知識を掘り下げ、社会課題を把握することを目標に設定した。</p> <p>(略)</p> <p>次に、DP と CP の関係について述べる。まず、CP1 は、DP1 に含まれる「基本的な教養」及び「『ヘルスケア』『地域づくり』『異文化間コミュニケーション』のドメイン知識」をカリキュラムの視点でまとめたものである。次に、CP2 には、DP2 に示す社会課題解決のために必要となるデータサイエンスの手法や AI 活用方法の修得をカリキュラムとして設置する方針を示している。また、プロジェクトのマネジメントには、課題解決のためにステークホルダーとコミュニケーションできる能力と経営学の基礎的知識及びプロジェクトの進捗管理のためのスキルが必要であり、これらは学士力に示した能力に関わるものであることから、DP3 を踏まえ CP3 を設定している。</p>	<p>(5) 養成する人材像と3つのポリシーの関係 (略)</p> <p>まず、養成する人材像と DP の関係を説明する。養成する人材像「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人材に必要な資質としては、本学部では①「社会課題発見スキル」、②「データサイエンス・AI 活用スキル」、③「プロジェクトマネジメントスキル」を身につけて、その応用として④「解決策を提案できる能力」が必要であるとする。そこで、最初の項目である①社会課題発見スキルについては、DP1 に示すように社会課題の理解の基礎となる基本的な教養を身につけることから始め、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の3つのドメインについて、ドメイン知識の基礎及び学生自身が関心をもったドメインについての知識を掘り下げ、社会課題を把握することを目標に設定した。</p> <p>(略)</p> <p>次に、DP と CP の関係について述べる。まず、CP1 は、DP1 に含まれる「基本的な教養」及び「『生活・健康』『地域・環境』『ビジネス・文化』のドメイン知識」をカリキュラムの視点でまとめたものである。次に、CP2 には、DP2 に示す社会課題解決のために必要となるデータサイエンスの手法や AI 活用方法の修得をカリキュラムとして設置する方針を示している。また、プロジェクトのマネジメントには、課題解決のためにコミュニケーションができる能力が必要であり、これらは学士力に示した能力に関わるものであることから、DP3 を踏まえ CP3 を設定している。</p>
--	--

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

3 本学部のアドミッション・ポリシーについて、以下の点を踏まえて、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づく教育内容に照らし、適切なアドミッション・ポリシーが設定されていることを、具体的かつ明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

・ディプロマ・ポリシーにおいて「データサイエンス・AI」の活用に関する素養を掲げ、カリキュラム・ポリシーにおいて「データサイエンス・AI」について基礎から応用まで修得するための教育課程を編成する計画であることから、受け入れる学生には一定程度の数学的素養が求められると見受けられる。しかしながら、知識・技能に関する AP1 では「高等学校までに修得すべき基礎的な学力を身につけている」としているのみで、具体的な素養が示されていないため、適切なアドミッション・ポリシーが設定されているか、判断できない。

(対応) 審査意見を踏まえ、アドミッション・ポリシーの内容を具体化するとともに、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの整合性と、入学後の学習支援体制を明確にした。

【対応1】本学部における STEM 教育の基本的考え方の整理

厳密な理論体系を重視した従来の数学教育とは異なり、社会課題への応用を重視する本学部では、定理や公式をコンピュータによる数値計算や可視化を通じて直感的に理解し、データ分析での活用を教育の主眼に据えている。加えて、統計や機械学習アルゴリズムのプログラミング実装（ライブラリ活用）を並行して行うことで、アジャイル型、すなわち試行錯誤（トライ＆エラー）を重視した教育手法を取り入れ、数学的理解を段階的に深める構成としている。各データサイエンス科目における演習の時間には、得られた結果の解釈や手法の適用可能性について学生同士でディスカッションを行い、数理的思考の社会課題への応用について多面的な理解を促す授業方法を計画している。

【対応2】本学部のデータサイエンス教育における数学的素養の位置づけの説明

本学部では、ディプロマ・ポリシーにおいて「データサイエンス・AI」の活用を掲げ、カリキュラム・ポリシーにおいても、データサイエンス・AI に関する基礎から応用に至る体系的な教育課程を構成している。審査意見において示された「こうした教育内容を学修するためには、一定程度の数学的素養が求められる」との指摘については、本学部としても重要な視点と受け止めている。こうした認識のもと、本学部ではデータサイエンス・AI を学ぶうえで必要となる数学的要素を、確率・統計・線形代数・微積分、そしてそれらを支える数式リテラシーであると位置づけている。

【対応3】アドミッション・ポリシーの具体化と補足説明の追加

本学部では、特定の理工系分野に限定せず、幅広い人文社会学系分野に関心や背景を持つ学生の受け入れも重視しており、総合型選抜や学校推薦型選抜、一般選抜の一部では数学を課さない方式を導入している。これに関連して、また審査意見における「具体的な素養が示されていない」という指摘を受けて、アドミッション・ポリシーの記述を見直し、求める基礎的な学力をより明確に示すこととした。

文系的な素養を持つ学生も積極的に受け入れていることから、AP1-1 では数学に限らず国語・英語・地

理歴史など幅広い教科の基礎学力を求めることを明示し、加えて、文章や資料の読解力および論理的思考力を評価する AP1-2 を新たに設定した。

(改定前の AP1)

AP1：本学科での学びに必要な、高等学校までに修得すべき基礎的な学力を身につけている

(改訂後の AP1)

AP1-1：高等学校までに修得すべき国語・英語・数学・情報・地理歴史など基礎的な学力を身につけている

AP1-2：文章や資料の内容を正しく理解し、自分の考えをわかりやすく説明する力を備えている

加えて、アドミッション・ポリシー全体に対する補足説明として、以下の文言を明記する

(補足説明)

本学部の入学後にデータサイエンスや AI 活用方法の学びを深める上で、数学的な素養が必要となる場面があるため、授業を通じて段階的に学べるようカリキュラムを整備している。これにより特定の理工系分野に限定することなく、幅広い人文社会学系分野に関心や背景を持つ学生の学びも支援する。

【対応 4】入学前～2 年次にかけた数学学習支援体制の整備

このような受け入れ方針と教育課程の両立を図るため、本学部では入学前から入学後にかけて段階的に数学的素養を身につける支援体制を整備している。具体的には、入学前教育として、3 月中旬に対面で 1 日実施する予定であり、1 年次前期の「データサイエンスへのいざない」につながる導入的なプログラム（約 2 時間）を含む計画である。このプログラムでは、アートなどの親しみやすい題材を通じて数学的な考え方やおもしろさに触れ、数学は抽象的な計算だけでなく、具体的に目に見える現象とつながっていることの理解を促すとともに、データに基づいて社会や現象をとらえる視点や、数値解析結果の可視化をもとに考える姿勢を養うことを目指している。なお、当日参加できない学生に対しては、同内容のオンデマンド動画を配信するとともに、プログラム内容に基づいた課題を入学式時に提出する形式とし、参加の有無にかかわらず共通の学びを保证する。ただし一般選抜の中でも一般Ⅲ期については、合格発表から入学までの期間が短く入学前教育及び課題の実施ができないことから、基礎学力の確認として「数学」を必須で課している。これにより、すべての入学生が本学部の教育課程を円滑に開始できる体制とする。

また、当初の申請では、この「データサイエンスへのいざない」に相当する内容を入学前にも履修可能とし、単位認定を行うことを想定していたが、入学前教育の参加状況や自習環境にばらつきがあることを踏まえ、単位認定は行わないことが適切であると判断した。

この入学前教育を起点として、1 年次からは本格的に数学的素養を育てる授業が段階的に展開される。1 年前期には「データサイエンスへのいざない」「ドメインとデータサイエンス」を通じて、確率的な見方や最適化の考え方、データの可視化といった数学的思考の入口を幅広く体験する。これにより、数式処理に限らず、社会現象を数量的にとらえ、課題を分析・予測・改善するというデータサイエンス的アプローチの基礎に触れることを目的とする。なお、これらの科目は高度な数学的知識を前提とせず、1 年前期に開講するリメディアル科目「基礎数学」と併行して履修できるよう構成されており、数学的素養に不安

のある学生でも無理なく理解を深められる内容となっている。1年後期は「基礎統計学」で統計的基礎を修得し、2年前期には「統計処理演習」「データサイエンスと線形代数」により実践的な統計分析と線形代数の基礎的理解を育成。2年後期には「データサイエンスと微積分」により、データの変化や傾向をとらえる解析的視点を獲得する。いずれの科目の教育においても重要な点は、数学の定理や公式を論理的に厳密に理解することに重点を置かず、それらをプログラミングによって数値解析を行い、可視化された結果を理解することを主なアプローチとすることである。

以上の数学的要素と、それに対応する科目・時期は以下のとおりである。

科目名	配当年次	数式 リテラシー	確率・統計	線形代数	微分・積分
基礎数学	1 年前期	◎			
ドメインとデータサイエンス	1 年前期	○	○	○	○
データサイエンスへのいざない	1 年前期	○	○		○
基礎統計学	1 年後期		◎		
統計処理演習	2 年前期		◎		
データサイエンスと線形代数	2 年前期			◎	
データサイエンスと微積分	2 年後期				◎

こうした科目を円滑に履修するには、数式を正しく読み、意味を理解し、適切に使う数式リテラシーが必要となる。そこで、入学後すぐに、全学的に取り組んでいる基礎学力テスト（数学）を実施し、高校「数学Ⅰ」相当の内容について点数が7割に満たない学生には必須で、加えて希望者にも履修可能として1年前期にリメディアル科目「基礎数学」を受講させる。これにより、早期の補完と後続科目への円滑な接続を図る。また、情報活用に関する素養についても、1年次前期・後期に「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」を設置し、プログラミングについても「プログラミングⅠ」（1年前期・週2回、全28回）をはじめ、「Ⅱ」（1年後期）、「Ⅲ」（2年前期）と、Pythonの基礎、ヴィジュアルライズ、機械学習アルゴリズムの初歩まで段階的に学べる教育課程を整えており、データサイエンスの実践に必要な力を総合的に育成している。さらに、学修のどの段階で不安やつまづきが生じた場合でも、専任の教員が個別に対応する「学習サポートセンター」を整備しており、理解の定着を支援する体制もあわせて用意している。

このように、教育課程と支援措置を組み合わせ、数学を課さない入試方式と必要な数学的素養の習得を両立できる環境を整備する。これらの教育課程と学習支援の体制があるため、大学入学共通テストにおいて数学を必須とはせず、多様な入学者の受け入れと学修成果の確保を両立する方針としている。なお、アドミッション・ポリシーにおいては、これらの対応を踏まえた補足説明を加えることで、入学後に必要となる数学的素養への支援体制と、多様な学生の受け入れ方針を明示することとした。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.8)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(4) 入学者受入れ方針 (アドミSSION・ポリシー)</p> <p>(略)</p> <p>AP1 : [知識・技能]</p> <p><u>AP1-1 高等学校までに修得すべき国語・英語・数学・情報・地理歴史など基礎的な学力を身につけている</u></p> <p><u>AP1-2 文章や資料の内容を正しく理解し、自分の考えをわかりやすく説明する力を備えている</u></p> <p>AP2 : [思考力・判断力・表現力]</p> <p>課題を理解し、データを活用して解決策を見出すことに挑戦し、その内容やアイデアを自分の言葉で表現してみたいという意欲を持つ</p> <p>AP3 : [主体性・多様性・協働性]</p> <p>自ら進んで学ぶ姿勢を持ち、様々な関係者と積極的にコミュニケーションをとり課題解決に向けて取り組む意欲を備えている</p> <p><u>【補足】 本学部の入学後にデータサイエンスやAI活用方法の学びを深める上で、数学の素養が必要となるため、入学前教育、リメディアル教育、段階的に学べるようカリキュラムを整備してサポート体制を整えている。これにより特定の理工系分野に限定することなく、幅広い人文社会学系分野に関心や背景を持つ学生の学びも支援する。</u></p>	<p>(p.8)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(4) 入学者受入れ方針 (アドミSSION・ポリシー)</p> <p>(略)</p> <p>AP1 : [知識・技能]</p> <p>本学科での学びに必要な、高等学校までに修得すべき基礎的な学力を身につけている</p> <p>AP2 : [思考力・判断力・表現力]</p> <p>課題を理解し、データを活用して解決策を見出すことに挑戦し、その内容やアイデアを自分の言葉で表現してみたいという意欲を持つ</p> <p>AP3 : [主体性・多様性・協働性]</p> <p>自ら進んで学ぶ姿勢を持ち、様々な関係者と積極的にコミュニケーションをとり課題解決に向けて取り組む意欲を備えている</p> <p>(追加)</p>
<p>(p.15)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>1. 教育課程編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー) と教育課程の概要</p>	<p>(p.14)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>1. 教育課程編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー) と教育課程の概要</p>

<p><教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）></p> <p>（略）</p> <p>CP2：DP2「汎用的技能」を達成するため、「データサイエンス科目」区分の科目を通じて、データサイエンスに必要な数学、統計学、情報学、データ分析の基礎から応用までを1年次から3年次にかけて体系的に学習し、身につけられるようにする。「データサイエンス科目」区分はさらに「データサイエンス」「データエンジニアリング」「AI」「数理・統計」から構成される。<u>なお、本学部では数学的素養に不安のある学生も無理なく学べるよう、入学前教育および1年前期にリメディアル科目「基礎数学」を配置し、基礎力の補完とスムーズな導入を図っている。さらに、「データサイエンスへのいざない」「ドメインとデータサイエンス」などの初学者向け科目と連携させることで、データサイエンス・AIに必要な数学的思考を段階的に育成する体制を整えている。</u></p>	<p><教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）></p> <p>（略）</p> <p>CP2：DP2「汎用的技能」を達成するため、「データサイエンス科目」区分の科目を通じて、データサイエンスに必要な数学、統計学、情報学、データ分析の基礎から応用までを1年次から3年次にかけて体系的に学習し、身につけられるようにする。「データサイエンス科目」区分はさらに「データサイエンス」「データエンジニアリング」「AI」「数理・統計」から構成される。</p>
<p>（p.24）</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>（E）「データサイエンス科目」</p> <p>（略）</p> <p>補足として、STEM分野、特に数学に関する教育課程の考え方について述べる。<u>厳密な理論体系を重視した従来の数学教育とは異なり、社会課題への応用を重視する本学部では、定理や公式をコンピュータで数値計算を行って可視化することで直観的に理解し、データ分析での数学公式の活用を教育の主眼に据える。重要な点は、統計や機械学習アルゴリズムのプログラミング実装学習（ライブラリ活用）を併行して進めることにより、アジャイル型の教育方法、つまりトライ＆エラーを通じた数学理解の促進をはかることである。以上の基本的教育方針を述べた上で、教育課程を述べれば、数学の基礎知識は、1年次必修科目「ドメイ</u></p>	<p>（p.23）</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>（E）「データサイエンス科目」</p> <p>（略）</p> <p>補足として、STEM分野、特に数学に関する教育課程の考え方について述べる。数学の基礎知識は、1年次必修科目「ドメインとデータサイエンス」をはじめ、1年次後期必修科目「基礎統計学」、2年次必修科目の「統計処理演習」「データサイエンスと線形代数」「データサイエンスと微積分」の中で順を追って学修する。その際には、行列、ベクトル、微分など機械学習の理解に必要な概念に絞って、計算機科学の視点でプログラミングを通して学習することで、高校時代に数学Ⅰのみ履修した学生にも理解できる教育内容となっている。</p>

<p>ンとデータサイエンス」をはじめ、1 年次後期必修科目「基礎統計学」、2 年次必修科目の「統計処理演習」「データサイエンスと線形代数」「データサイエンスと微積分」の中で順を追って学修する。その際には、行列、ベクトル、微分など機械学習の理解に必要な概念に絞って、計算機科学の視点でプログラミングを通して学習することで、高校時代に数学 I のみ履修した学生にも理解できる教育内容となっている。</p>	
<p>(p.37)</p> <p>⑨ 入学者選抜の概要</p> <p>1. 入学者受入れ方針 (アドミッション・ポリシー)</p> <p><u>本学部では、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーにおいて、①3つのドメインの社会課題の理解、②データサイエンス・AI の活用、③プロジェクトマネジメントへの寄与、④データサイエンス・AI の社会実装への提案力を上げている。これらに従って、カリキュラム・ポリシーでは、社会課題の理解に必要な知識科目の配置、データサイエンス・AI に関する基礎から応用に至る体系的な教育課程、プロジェクトマネジメント手法と経営学基礎科目の配置、社会課題解決に向けた実践科目の配置を行っている。それぞれの科目修得に必要なとなる素養を挙げれば、社会課題理解に必要な人文社会学の基礎知識、データサイエンス・AI を学ぼううえで必要な数学的要素（確率・統計・線形代数・微積分など）や情報処理技能（プログラミング、アルゴリズムなど）、プロジェクトマネジメントに必要な知識とコミュニケーションスキル、提案に必要なプレゼンテーション力である。</u></p> <p><u>本学部で受け入れる入学者には、これらの素養を円滑に修得していくために、高校で学ぶ国語・英語・地理歴史に相当する知識を有することが望ましい。また、確率・統計・線形代数・微積分の理解を支える基礎的な数式リテラシーや「情報 I」の基礎的知識にも同様に興味・関心があることが望ましい。さらに、主体的な学修・活動やコミュ</u></p>	<p>(p.34)</p> <p>⑨ 入学者選抜の概要</p> <p>1. 入学者受入れ方針 (アドミッション・ポリシー)</p> <p>(追加)</p>

<p><u>コミュニケーション力修得への意欲も重要視される。</u></p> <p><u>以上の検討を踏まえ、本学部では、高校学習指導要領の「学力の3要素」である①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性・多様性・協働性に照らし合わせて、入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を下記のように定めている。</u></p> <p>AP1：[知識・技能]</p> <p><u>AP1-1 高等学校までに修得すべき国語・英語・数学・情報・地理歴史など基礎的な学力を身につけている</u></p> <p><u>AP1-2 文章や資料の内容を正しく理解し、自分の考えをわかりやすく説明する力を備えている</u></p> <p>AP2：[思考力・判断力・表現力]</p> <p>課題を理解し、データを活用して解決策を見出すことに挑戦し、その内容やアイデアを自分の言葉で表現してみたいという意欲を持つ</p> <p>AP3：[主体性・多様性・協働性]</p> <p>自ら進んで学ぶ姿勢を持ち、様々な関係者と積極的にコミュニケーションをとり課題解決に向けて取り組む意欲を備えている</p> <p><u>【補足】本学部の入学後にデータサイエンスやAI活用方法の学びを深める上で、数学の素養が必要となるため、入学前教育、リメディアル教育、段階的に学べるようカリキュラムを整備してサポート体制を整えている。これにより特定の理工系分野に限定することなく、幅広い人文社会学系分野に関心や背景を持つ学生の学びも支援する。</u></p> <p><u>これらの AP を各種の入学者選抜で、バランスよく測る計画である。</u></p>	<p>本学部では、「学力の3要素」である①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性・多様性・協働性を踏まえ、入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）を下記のように定めている。</p> <p>AP1：[知識・技能]</p> <p>本学科での学びに必要な、高等学校までに修得すべき基礎的な学力を身につけている。</p> <p>AP2：[思考力・判断力・表現力]</p> <p>課題を理解し、データを活用して解決策を見出すことに挑戦し、その内容やアイデアを自分の言葉で表現してみたいという意欲を持つ。</p> <p>AP3：[主体性・多様性・協働性]</p> <p>自ら進んで学ぶ姿勢を持ち、様々な関係者と積極的にコミュニケーションをとり課題解決に向けて取り組む意欲を備えている。</p> <p>(追加)</p>
---	--

(改善事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

4 「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.3の「(3) 本学における必要性」において、「デジタル情報技術の活用は・・・持続可能な社会課題、とりわけ環境、自然、健康といった分野に・・・必要な様々な非言語データの種類やその測定手法自体が少なく、普及に至っていない」と説明しているが、本学部は「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」ドメインに関する社会課題の効果的な解決策を提供することを目標とすることを掲げていることから、これらの分野に必要な様々な非言語データの種類やその測定手法自体が少ない状況でどのように学生に対して教育していく計画なのかを明示すること。

(対応) 審査意見を踏まえ、非言語データの収集について、機器の自作や演習を通じた実践的な教育を行う計画であることを明示した。

環境、自然、健康といった分野でのデータサイエンスには、非言語データの収集と活用が重要視されるが、本学ではその非言語データ収集機器の作成自体もカリキュラムに含んでいる。具体的には、心理・健康分野では「ヒューマンデータエンジニアリング演習Ⅰ・Ⅱ」や「IoTとヒューマンデータ」において生体反応の計測機器を自作する演習を行う計画である。また、環境、自然分野では「IoTとGIS」やにおいてGPSデータや自作のセンサーデータなどによるデータ収集とGIS（地理情報システム）の活用を行う。これらを「設置の趣旨等を記載した書類」p.2(3) 本学における必要性に明示することで、内閣府による「総合知」創出のための方策につなげることができる考えを明示した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.2)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>2. 設置の社会的必要性</p> <p>(3) 本学における必要性</p> <p>日本が抱える社会課題の多くは、意思決定や最適化問題に転換することが可能であり、その意味ではデータによる意思決定手法から大きな利益を得ることができると考えられる。しかし、デジタル情報技術の活用は高い収益性を目指す商業分野に偏っており、持続可能な社会課題、とりわけ環境、自然、健康といった分野に十分に応用されているとは言えない。もとより、これらの分野に必要な様々な非言語データの種類やその測定手法自体が少なく、普及に至っていない。<u>本学部では、環境、自然、健康の分野を扱う教育課程を設置するが、</u><u>その中で非言語データ測定に使用する機器の作製</u></p>	<p>(p.2)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>2. 設置の社会的必要性</p> <p>(3) 本学における必要性</p> <p>日本が抱える社会課題の多くは、意思決定や最適化問題に転換することが可能であり、その意味ではデータによる意思決定手法から大きな利益を得ることができると考えられる。しかし、デジタル情報技術の活用は高い収益性を目指す商業分野に偏っており、持続可能な社会課題、とりわけ環境、自然、健康といった分野に十分に応用されているとは言えない。もとより、これらの分野に必要な様々な非言語データの種類やその測定手法自体が少なく、普及に至っていない。以上の課題の解決の糸口を高等教育で提供していくことが、内閣府による「総合知」創出のための方策につながると</p>

<p>や GIS（Geographic Information System :地理情報システム）などのツール活用もカリキュラムに含めることで、それらの課題の解決の糸口を提供し、内閣府による「総合知」創出のための方策につなげることができると考える。</p>	<p>考えられる。</p>
--	---------------

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

5 審査意見1～3のとおり、本学部設置の趣旨・目的並びにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーが判然としないことから、本学部の学部・学科名称及び学位名称の妥当性が判断できないため、関連する審査意見への対応及び以下の点を踏まえて、適切な名称が付されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

・「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.12～13の「③学部・学科等の名称及び学位の名称」において、「人間中心社会の実現のために3つのドメインについての社会課題解決のための理論を学ぶ」学部・学科であることから、学部・学科名称は「学問領域を総称してヒューマン・データサイエンス」と冠する名称を付すと説明している。しかしながら、学位の名称は、「学士（データサイエンス）」としているため、学部・学科名称の理由を踏まえれば、適切な学位名称が付されているか、疑義がある。

・また、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.4の「(1) 養成する人材像」において、「人材養成のために提供する教育・研究の方向性は、『生活・健康』『地域・環境』『ビジネス・文化』ドメインの社会課題の理解・把握、その解決におけるデータサイエンス・AIの活用が主眼となる」とし、養成する人材像が身につけるべき資質として、「社会課題発見スキル×データサイエンス・AI活用スキル×プロジェクトマネジメントスキル」と説明していることから、本学部の「人材養成の目的、研究対象分野」は、「データサイエンス」のみではないと見受けられるため、適切な学位名称が付されているか、疑義がある。

(対応) 審査意見を踏まえ、教育内容と養成する人材像に照らして、学位の名称を「学士（ヒューマン・データサイエンス）」へと修正した。

本学部は、「人間中心社会の実現」を目的として設置されており、その実現に向けて、審査意見1への対応も踏まえ、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の各ドメインにおける社会課題を理解・把握し、データサイエンスおよびAIを活用して解決策を提案する力を身につける教育課程を編成している。社会課題に焦点を当て、データサイエンスおよびAIを用いて人間の意思決定を支援する取り組みは、北米の高等教育機関での導入が見られ、“Human-centered Data Science”という新たな学問体系が構築されつつある。本学部の学部学科名称「ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科」は、この“Human-centered Data Science”の概念に着想を得たものである【資料2】【資料3】。

学部名称における「ヒューマン・データサイエンス」は、人間中心社会の実現のために社会課題を理解し、その背景や取り巻く環境を理解した上でデータ・AIを活用し、さらに様々な関係者からなるプロジェクトにおいて解決策の提案に向けたマネジメントを行う力を全て統合したものであると定義する。当初は、本学部での学びの中心に「データサイエンスの手法を用いた課題解決」が位置づけられていたこと、また学位名称としての社会的認知度の高さも踏まえ、学位の名称については「学士（データサイエンス）」を採用していた。

しかしながら、審査意見において指摘されたとおり、本学部が養成する人材像に求められる資質は、「社会課題発見スキル×データサイエンス・AI活用スキル×プロジェクトマネジメントスキル」の三要素を統合することによって達成される。具体的にカリキュラムから示せば、審査意見1の対応を受けて科目名称区分を変更した「ヒューマン・ドメイン科目」及び「データサイエンス科目」「プロジェクトマネジメント科目」から必要単位数を修得し、「実践科目」においてそれらを実践し統合することが必要である。これは即ち、Society5.0の目指す人間中心社会に対し、本学が定義するヒューマン・ドメイン（「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」）において、データサイエンス・AIの活用による社会課題解決の提案ができる人材であることを保証するものである。このような観点から、学位の名称を「学士（ヒューマン・データサイエンス）」へと修正する。また、国際通用性の観点から、学部学科名称及び学位の名称の英語表記は以下の通りとする。

学部名：ヒューマン・データサイエンス学部	Faculty of Human-centered Data Science
学科名：ヒューマン・データサイエンス学科	Department of Human-centered Data Science
学位名：学士（ヒューマン・データサイエンス）	Bachelor of Human-centered Data Science

なお、本学部が定義する「ヒューマン・データサイエンス」と人間の生体データを示す「ヒューマンデータ」を区別する意図から、学部名称及び学位の日本語名称においては「ヒューマン」と「データサイエンス」の間に中点「・」を付すこととする。

【資料2】MIT Press, *Human-Centered Data Science*

【資料3】University of Toronto, Human-Centered Data Science

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.10)</p> <p>②学部・学科等の特色</p> <p>1. 文理融合型教育</p> <p>第1の特色は、人文・社会科学的な視点から社会課題を理解・把握し、その解決に向けたデータの収集・処理・分析手法やAI活用法などの工学的手法を学ぶ文理融合型の教育を提供する点である。特筆すべき点は、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」といった多様な分野を1つの学部内で学び、社会課題に取り組めることである。したがって、入学者は文系・理系を問わず、広く社会課題の解決に情熱・興味・関心を持つ人を対象とし、卒業時には、広い視野で社会課題を理解・把握・発見する力と、デ</p>	<p>(p.9)</p> <p>②学部・学科等の特色</p> <p>1. 文理融合型教育</p> <p>第1の特色は、人文・社会科学的な視点から社会課題を理解・把握し、その解決に向けたデータの収集・処理・分析手法やAI活用法などの工学的手法を学ぶ文理融合型の教育を提供する点である。特筆すべき点は、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」といった多様な分野を1つの学部内で学び、社会課題に取り組めることである。したがって、入学者は文系・理系を問わず、広く社会課題の解決に情熱・興味・関心を持つ人を対象とし、卒業時には、広い視野で社会課題を理解・把握・発見する力と、データにもとづ</p>

<p>ータにもとづく合理的な意思決定・課題解決に貢献できる力を備えた人材を育成することを目指す。</p> <p>具体的には、1～2年次を中心に「データサイエンス科目」でデータサイエンスの基本的な手法やその応用を学び、同時に「<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>」（定義は、「③ 学部・学科等の名称及び学位の名称」で後述する）で3つのドメイン「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の基礎知識を幅広く学ぶ。また、後述のように社会課題解決に向け3年次の「実践科目」のうち「ドメインとデータ解析演習」科目で3つのドメインにおいてデータ解析手法を活用し課題解決につなげるための知識を学ぶ。<u>4年次の「卒業研究」では、社会課題への解決策の提案とデータサイエンス・AI活用を組み合わせる研究を行う。</u>これにより文理融合を明確にカリキュラムとして提供している。</p>	<p>く合理的な意思決定・課題解決に貢献できる力を備えた人材を育成することを目指す。</p> <p>具体的には、1～2年次を中心に「データサイエンス科目」でデータサイエンスの基本的な手法やその応用を学び、同時に「ドメイン科目」で3つのドメイン「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の基礎知識を幅広く学ぶ。また、後述のように社会課題解決に向け3年次の「実践科目」のうち「ドメインとデータ解析演習」科目で3つのドメインにおいてデータ解析手法を活用し課題解決につなげるための知識を学ぶ。これにより文理融合を明確にカリキュラムとして提供している。</p>
<p>(p.13)</p> <p>③学部・学科等の名称及び学位の名称 学部名：ヒューマン・データサイエンス学 <u>Faculty of Human-centered Data Science</u> 学科名：ヒューマン・データサイエンス学科 <u>Department of Human-centered Data Science</u> 学位名：学士（<u>ヒューマン・データサイエンス</u>） <u>Bachelor of Human-centered Data Science</u></p> <p>本学部は、「①設置の趣旨及び必要性」の「3.（1）養成する人材像」で記した通り「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人材の養成を目指している。本学部が示す社会像は、Society 5.0 構想が掲げる『人間中心社会』を、本学の建学の精神にもとづき解釈したものである。具体的に、本学部・学科が対象とする分野としては、「②学部・学科等の特色」の「2. 社会課題とデータサイエンスの適合性を考慮したドメイン別教育」で示したように「ヘルスケア」</p>	<p>(p.12)</p> <p>③学部・学科等の名称及び学位の名称 学部名：ヒューマン・データサイエンス学部 学科名：ヒューマン・データサイエンス学科 学位名：学士（データサイエンス）</p> <p>本学部は、「①設置の趣旨及び必要性」の3.（1）養成する人材像で記した通り「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人材の養成を目指している。本学部が示す社会像は、Society 5.0 構想が掲げる『人間中心社会』を、本学の建学の精神にもとづき解釈したものである。具体的に、本学部・学科が対象とする分野としては、「②学部・学科等の特色」の「2.社会課題とデータサイエンスの適合性を考慮したドメイン別教育」で示したように「生活・健康」「地域・環境」</p>

<p>「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」ドメインである。これらのドメインでのデータ利活用は、下記のように人間中心社会という視点での共生や持続可能性を促進するものである。</p> <p>① 心や体の健康上の課題に対処するデータサイエンス手法の新たな進歩</p> <p>② 持続可能性課題にデータサイエンスを適用する新しい研究</p> <p>③ <u>人文社会分野の文献やデータ分析による人間精神生活の理解</u></p> <p>こういった社会課題に焦点を当て、データサイエンスおよびAIを用いて人間の意思決定を支援する取り組みは、北米の高等教育機関での導入が見られ、「Human-centered Data Science」という新たな学問体系が構築されつつある。本学部の学部学科名称「<u>ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科</u>」は、この「Human-centered Data Science」の概念に着想を得たものである。従って、学部名の英語表記は「<u>Faculty of Human-centered Data Science</u>」、学科名は「<u>Department of Human-centered Data Science</u>」とする。</p> <p>なお、「ヒューマン・データサイエンス」は「ヒューマンデータ＝身体に関するデータ」とは異なる概念であることを明確にするため、「ヒューマン」と「データサイエンス」の間に中点「・」を付す。</p> <p>次に、学位の名称について説明する。本学部として解釈する人間中心社会の実現への寄与は、本学部が養成する人材像として示した3つの資質「<u>社会課題発見スキル</u>」「<u>データサイエンス・AI活用スキル</u>」「<u>プロジェクトマネジメントスキル</u>」を統合的に身につけることによって実現される。そこで、本学部が示す社会課題の範囲を明確にするために、上述の①～③に示した人間中心社</p>	<p>「ビジネス・文化」ドメインである。これらのドメインでのデータ利活用は、下記のように人間中心社会という視点での共生や持続可能性を促進するものである。</p> <p>① 心や体の健康上の課題に対処するデータサイエンス手法の新たな進歩</p> <p>② 持続可能性課題にデータサイエンスを適用する新しい研究</p> <p>③ <u>ビジネス経営データ分析の実践的活用や人文社会分野の文献分析による人間精神生活の理解</u></p> <p>この①～③に示した通り、本学部として解釈する人間中心社会の実現のために、3つのドメインについての社会課題解決のための理論を学ぶことから、学部・学科名はそれらの学問領域を総称して「<u>ヒューマン・データサイエンス</u>」と呼称する。学位の名称は、人材養成の目的、研究対象分野にもとづき「<u>学士（データサイエンス）</u>」とする。</p>
--	---

会の実現のために理解・把握すべき社会課題の
ドメイン（「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化
間コミュニケーション」）を、「ヒューマン・ドメ
イン」と定義づけることとする。すなわち、本学
部の教育課程における学位取得には「ヒューマ
ン・ドメイン科目」「データサイエンス科目」「プ
ロジェクトマネジメント科目」から必要単位を修
得し、「実践科目」においてそれらを実践し統合
することが必要である。換言すれば、本学部の学
位を修得することは、本学が定義する「ヒューマ
ン・ドメイン」について、データサイエンス・AI
の活用による社会課題解決の提案ができる人材で
あることを保証するものである。このような観点
から、学位の名称を「学士（ヒューマン・デー
タサイエンス）」とする。英語表記は、「Bachelor of
Human-centered Data Science」である。

ここで、学位の分野が工学関係である点について
補足説明する。次章「④教育課程の編成の考え方
及び特色」に記す教育課程から示すと、データサ
イエンス科目区分において「情報処理・計算・デ
ータ分析」「システム化」「情報倫理・情報社会」
の知識・技能を修得する科目を配置していること
に加え、実践科目区分における「ドメインとデー
タ解析」では、具体的なドメインの事例に対し
てデータ解析手法を適用する実践的スキルを養う
科目を配置している。さらに、プロジェクトマネ
ジメント科目区分では、課題解決型学習やプロジ
ェクト型学習、経営学の基礎に関する科目を通じ
て、データサイエンス・AI の活用スキルを実社
会で実装するためのプロジェクト推進能力を育成
する科目を配置している。最終的には、社会課題
に対する解決策を提案する力を身につける「卒業
研究Ⅰ・Ⅱ」を４年次に配置し、その研究に対し
基幹教員（工学博士及び理学博士）がデータの収
集・分析に関する質保証を行う。以上により、本
学部の教育課程には、応用情報学として必要な研
究内容が包含されており、学位の分野が工学以外
ではないことが示される。

(新旧対照表) 学則

新			旧		
(p.10) (学士の学位の授与) 第 26 条 学長は、卒業を認定した者には、次の区分により学士の学位を授与する。			(p.10) (学士の学位の授与) 第 26 条 学長は、卒業を認定した者には、次の区分により学士の学位を授与する。		
学部	学科・専攻	学位	学部	学科・専攻	学位
(略)			(略)		
ヒューマン・データサイエンス学部	ヒューマン・データサイエンス学科	学士（ <u>ヒューマン・データサイエンス</u> ）	ヒューマン・データサイエンス学部	ヒューマン・データサイエンス学科	学士（データサイエンス）

6 本学部が授与する学位の分野を「工学関係」とすることの妥当性が判断できないため、関連する審査意見への対応及び以下の点を踏まえて、適切な学位の分野が位置付けられていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

・DP1において、「『生活・健康』『地域・環境』『ビジネス・文化』の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる」ことを掲げており、本学部の養成する人材像が身につけるべき資質として、「社会課題発見スキル×データサイエンス・AI活用スキル×プロジェクトマネジメントスキル」と説明していることから、本学が授与する学位において、相当程度「生活・健康」、「地域・環境」及び「ビジネス・文化」の3つのドメインに関する素養も位置づけられていると見受けられるため、学位の分野を「工学関係」とする妥当性が判然とししない。

(対応) 審査意見を踏まえ、データサイエンス・AIの応用と社会実装を重視した教育内容に照らし、学位の分野を「工学関係」とする妥当性を示す。また、卒業研究におけるデータ分析手法の適用について成果を担保するため、情報教育委員会の役割を明確化した。

【対応1】工学関係とすることの妥当性の説明

本学部が授与する学位の分野を「工学関係」と定めた理由は、統計学、機械学習・深層学習アルゴリズムに代表されるデータサイエンス及びAIに関する知識と技術の修得に加え、それらの社会課題への適用および社会実装するために必要なプロジェクトマネジメント能力の育成を重視しており、これらの要素が応用情報学領域を包含しているためである。応用情報学とは、情報技術を他の学問分野や社会課題に応用し、実社会の問題解決に資する知識と技術を体系的に探究する学問領域であり、本学部の教育研究の目的に合致するものである【資料4】。

具体的に教育課程から示すと、まずデータサイエンス科目区分において「情報処理・計算・データ分析」「システム化」「情報倫理・情報社会」の知識・技能を修得する科目を配置している。これに加え、実践科目区分における「ドメインとデータ解析」では、具体的なドメインの事例に対してデータ解析手法を適用する実践的スキルを養う科目を配置している。さらに、プロジェクトマネジメント科目区分では、課題解決型学習やプロジェクト型学習、経営学の基礎に関する科目を通じて、データサイエンス・AIの活用スキルを実社会で実装するためのプロジェクト推進能力を育成する科目を配置している。最終的には、データの収集・分析を通じて社会課題に対する解決策を提案する力を身につける「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」を4年次に配置している。これらの学位プログラムについて基幹教員（工学博士、理学博士）が質保証することを明確にし、学位の分野が「工学関係」であることを説明する。

本学部が対象とするドメイン「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」における社会課題の理解・把握は、あくまでデータサイエンス・AIを応用するための基礎的知識として位置づけられており、教育の主眼はデータサイエンス・AIの応用およびその社会実装を可能とするプロジェクトマネジメントスキルの育成にある。この点からも、「工学関係」以外の学位分野に該当するものではないと考える。

【対応 2】情報教育委員会の役割の明確化

工学関係の学位プログラムの質を担保するため、本学部では、STEM 担当基幹教員で構成される「情報教育委員会」を設置し、データサイエンスに関連する授業科目や卒業研究の運用、授業内容の質の維持、学生の成績評価等について一元的に管理を行う体制を整備することを明示した。情報教育委員会の授業科目に対する主な対応としては、以下のとおりである。

- ①データサイエンス関連科目の運用管理
- ②「ドメインとデータ解析演習 A～G」の運用管理
- ③「卒業研究 I・II」におけるデータサイエンス手法に関する助言および審査

①データサイエンス関連科目の運用管理

データサイエンス関連科目については、主要科目を原則として工学または理学の学位を有する基幹教員が担当する（複数クラス開講の場合は、少なくとも 1 クラスを基幹教員が担当する）。これらの教員が情報教育委員会に所属することで、カリキュラム全体における学生の学修状況を把握し、定期的な点検・改善を行う体制を構築する。

②「ドメインとデータ解析演習 A～G」の運用管理

「ドメインとデータ解析演習 A～G」は、各ドメインにおいて活用可能な最新のデータ分析・AI 活用手法を扱う演習科目であり、卒業研究に向けてデータサイエンスの実践的な適用能力を養成することを目的としている。そのため、当該科目には実務経験を有する教員を配置しており、必ずしも基幹教員に限定していない。科目の質を担保するため、各授業で扱う事例および使用データについては、情報教育委員会が事前に精査を行う。また、成果物の評価に関しても、委員会が評価ルーブリックを作成し、担当教員に配布する。これらの運用は【資料：ドメインとデータ解析演習実施要領】に示す。

③「卒業研究 I・II」におけるデータサイエンス手法に関する助言および審査

卒業研究においては、学生は各自が所属するドメインのゼミナールにおいて研究テーマを設定する。4 年次前期には、情報教育委員会が学生の研究テーマに即したデータサイエンス手法の応用について助言及び審査を行う体制とする。また、成果物の評価に際しても、情報教育委員会の助言が適切に活用されているかを最終的に審査する運用を行う。これにより、人文社会系の研究テーマを選択した学生であっても、データの収集から分析、考察に至る一連のプロセスを経て論文を執筆することを担保する。これらの運用は【資料 5】に示す。

【資料 4】日本学術会議「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学分野」
(抜粋)

【資料 5】卒業研究におけるテーマ設定およびデータサイエンスの活用に関する審査実施要領案

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.9)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(6) ヒューマン・データサイエンス学部の研究対象とする中心的な学問分野</p> <p><u>本学部が研究対象とする中心的学問分野は、統計学、機械学習・深層学習アルゴリズムに代表されるデータサイエンス・AI 活用の社会課題への適用およびそれらの社会実装に必要なプロジェクトマネジメント手法を包含する応用情報学であり、学問分野としては工学分野となる。ここで、応用情報学とは、情報技術を他の学問分野や社会課題に応用し、実社会の問題解決に資する知識と技術を体系的に探究する学問領域を指す【資料12】。</u></p> <p><u>なお、この応用情報学の対象として、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」ドメインの社会課題を扱う。</u></p>	<p>(p.9)</p> <p>①設置の趣旨及び必要性</p> <p>3. 養成する人材像及び教育目標</p> <p>(6) ヒューマン・データサイエンス学部の研究対象とする中心的な学問分野</p> <p>本学部が研究対象とする中心的学問分野は、統計学、機械学習・深層学習アルゴリズムに代表されるデータサイエンスの応用分野である。具体的には、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインを中心に、その社会課題解決のためのデータサイエンスの社会実装に関わる教育・研究（機械学習、深層学習、非言語データ分析、時空間データベースなどの応用）が対象となる。</p>
<p>(p.14)</p> <p>③ 学部・学科等の名称及び学位の名称</p> <p>(略)</p> <p><u>学位の分野が工学である点について補足説明する。次章「④教育課程の編成の考え方及び特色」に記す教育課程から示すと、データサイエンス科目区分において「情報処理・計算・データ分析」「システム化」「情報倫理・情報社会」の知識・技能を修得する科目を配置していることに加え、実践科目区分における「ドメインとデータ解析」では、具体的なドメインの事例に対してデータ解析手法を適用する実践的スキルを養う科目を配置している。さらに、プロジェクトマネジメント科目区分では、課題解決型学習やプロジェクト型学習、経営学の基礎に関する科目を通じて、データサイエンス・AI の活用スキルを実社会で実装するためのプロジェクト推進能力を育成する科目を配置し</u></p>	<p>(p.12)</p> <p>③ 学部・学科等の名称及び学位の名称</p> <p>(略)</p> <p>(追加)</p>

<p>ている。最終的には、社会課題に対する解決策を提案する力を身につける「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」を4年次に配置し、その研究に対し基幹教員（工学博士及び理学博士）がデータの収集・分析質保証を行う。以上により、本学部教育課程には、応用情報学として必要な研究内容が包含されており、学位の分野が工学以外ではないことが示される。</p>	
<p>(p.29)</p> <p>⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p> <p>1. ゼミナール、卒業研究の指導方法及び選定方法</p> <p>2年次後期開始後に、3年次に所属するゼミナールを決定する。ゼミナールと卒業研究は同一の教員が担当するため、ゼミナールが決定すると同時に卒業研究の指導教員も決定することとなる。学生には、ゼミ選定を視野に入れながら2年次からの<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>及び<u>データサイエンス科目</u>の履修計画を行うよう、1年次のうちからクラスアドバイザーの教員が丁寧に指導する。クラスアドバイザーは、原則として「初年次演習Ⅰ・Ⅱ」の担当教員が、2年次まで学生の指導にあたる。</p> <p>各ゼミナールは1名の教員で指導されるが、学生はゼミナール指導教員のみならず、学部のSTEM教育担当教員に適宜データ解析等の指導を得ることができる教育体制とする。<u>具体的には、STEM教育担当教員が所属する情報教育委員会において、学生の研究テーマに応じたデータ分析手法の助言と審査、必要に応じた指導を行う体制を整備する。</u>ゼミナール指導教員、STEM教育担当教員等の分担は【資料15】、情報教育委員会による卒業研究への審査実施要領については【資料16】に示す。</p>	<p>(p.25)</p> <p>⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p> <p>1. ゼミナール、卒業研究の選定方法</p> <p>2年次後期開始後に、3年次に所属するゼミナールを決定する。ゼミナールと卒業研究は同一の教員が担当するため、ゼミナールが決定すると同時に卒業研究の指導教員も決定することとなる。学生には、ゼミ選定を視野に入れながら2年次からのドメイン科目及びデータサイエンス科目の履修計画を行うよう、1年次のうちからクラスアドバイザーの教員が丁寧に指導する。クラスアドバイザーは、原則として「初年次演習Ⅰ・Ⅱ」の担当教員が、2年次まで学生の指導にあたる。</p> <p>各ゼミナールは1名の教員で指導されるが、学生はゼミナール指導教員のみならず、学部のSTEM教育担当教員に適宜データ解析等の指導を得ることができる教育体制とする。ゼミナール指導教員、STEM教育担当教員等の分担は【資料14】の通りである。</p>
<p>(p.41)</p> <p>⑩教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の担当教員</p> <p>主要授業科目のうち、キャリア・インターンシップ科目、データサイエンス科目、<u>ヒューマン・</u></p>	<p>(p.37)</p> <p>⑩教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の担当教員</p> <p>主要授業科目のうち、キャリア・インターンシップ科目、データサイエンス科目、ドメイン科目、</p>

<p>ドメイン科目、実践科目の必修科目を中心に基幹教員を配置している。ただし、プログラミングやキャリア科目は、効果的にスキル習得を行うために複数クラスで開講し、基幹教員と基幹教員以外の教員を配置して対応している。また、プロジェクトマネジメント科目は、専門分野と実務現場での最新情報を反映することを視野に入れ一部で基幹教員以外の教員を配置している。</p> <p><u>実践科目である「ドメインとデータ解析演習 A～G」は、学問体系に基づく理論的知識よりも、実務経験に基づく具体的な事例を重視することを目的とした科目群である。そのため、当該科目においては、実務におけるデータ分析の経験を有する教員を基幹教員以外からも配置することで、教育目的の達成を図る。一方で、基幹教員以外の教員は教育課程を構成する主要授業科目に対する責任を担うことができない。このため本科目群においては、情報教育委員会が科目運営の指揮・管理を行い、教育課程全体に対する責任を担保する体制を構築する。具体的には「ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領」【資料 27】を策定し、以下の事項を実施することで、科目の質の維持および円滑な運営を図る。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>各担当教員によるシラバス内容の理解確認</u> ・ <u>使用する具体的事例、サンプルデータ、解析手法の確認および調整</u> ・ <u>科目運営上で発生したトラブルへの対応検討およびフォロー体制の整備</u> ・ <u>受講学生に対する学修支援および情報共有の実施</u> ・ <u>授業運営に関する振り返りの実施</u> <p><u>これらの質を担保するため、情報教育委員会は、データサイエンス等の工学分野に研究業績のある基幹教員を配置する他、外部よりデータサイエンス領域に研究業績や知見を持つアドバイザーを迎える等の体制を整える。</u></p>	<p>実践科目の必修科目を中心に基幹教員を配置している。ただし、プログラミングやキャリア科目は、効果的にスキル習得を行うために複数クラスで開講し、基幹教員と基幹教員以外の教員を配置して対応している。また、プロジェクトマネジメント科目は、専門分野と実務現場での最新情報を反映することを視野に入れ一部で基幹教員以外の教員を配置している。</p> <p>(追加)</p>
---	--

7 審査意見2のとおり、カリキュラム・ポリシーの妥当性が判断できないため、教育課程全体が適切に編成されているかも判断できない。このため、関連する審査意見への対応や以下に例示する点を踏まえて、本学部の教育課程が適切なディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーに基づき、修得すべき知識や能力等に係る教育が網羅され、体系性が担保された上で、適切に編成されていることを明確かつ具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

・「生活・健康」ドメインに関する教育課程について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.4に示されている研究テーマの例示によれば、「心理学」や「リハビリテーション」に関する内容を扱うドメイン設定であるように見受けられ、これらの基礎的な内容を学修する授業科目が編成されているものの、「生活・健康」としてこれらの知識を掛け合わせて社会課題を理解するための授業科目が判然とせず、CP1に基づき適切な教育課程が編成されているか、疑義がある。

・また、「健康」に関して、例えば「リハビリテーション論」では、「シラバス」において「データサイエンスを活用した評価・効果測定の方法についても学ぶ」としてリハビリテーション各領域とデータサイエンスを関連付けて学修する計画に見受けられるが、社会課題を理解する上で、ビッグデータから価値を見出すヘルスデータサイエンスに関する知識が必要であると考えられるものの、これらを扱う計画であるのか判然としない。

・加えて、例えば「地域・環境」ドメインに配置されている授業科目「ジェンダーと開発研究」や「家族生活論」は、「生活・健康」ドメインにも必要と考えられるような授業内容であるため、同ドメインとして適切な教育課程が編成されているか判然としない。

・「地域・環境」ドメインに関する教育課程について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.4に示されている研究テーマの例示によれば、「自然環境保護」に関する内容を扱うドメイン設定であるように見受けられるが、例えば授業科目「自然環境保護論」について、授業内容が動物保護を扱う内容に留（とど）まっており、「自然環境保護」の観点が十分ではないと見受けられ、授業科目名称との関係も判然としないなど、CP1に基づき「環境」に関する教育課程が十分に編成されているか、疑義がある。

・「ビジネス・文化」ドメインに関する教育課程について、審査意見1のとおり、ビジネスと文化を同じドメインに設定する趣旨が判然としないため、「比較教育学」や「比較文化論」などの授業科目が、ビジネスに関する社会課題の解決のためにどのように関係するのか、判然としない。

・また、ビジネスに関する授業科目について、「事業戦略論」や「マーケティング概論」のように社会課題を解決するための手法に関する授業科目が編成されているものの、例えば「会計論」などのような社会課題を理解するための前提となる知識を修得する授業科目が見受けられず、CP1に基づき適切な教育課程が編成されているか、疑義がある。

・授業科目「社会調査法実践Ⅰ・Ⅱ」について、「シラバス」によれば、質的調査に関する授業計画になっていると見受けられる。しかしながら、本学部はデータサイエンスによる量的な分析スキルを身につける学部であることに鑑み、量的調査を実践できる授業内容が必要と考えられるため、適切な教育課程が編成されているか、疑義がある。

(対応) 審査意見1及び審査意見2への対応においてディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーの修正を行った。具体的にはディプロマ・ポリシーのDP1においてドメインの名称を「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」に修正し、DP3-1において「経営学の基礎知識」を明示した。カリキュラム・ポリシーのCP3においては、「経営学の基礎知識」を身につける科目を配置することを明確化した。さらに、審査意見1においては「ヒューマン・ドメイン科目」の位置づけを明確にした。

(修正後のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー)

DP1: 基本的な教養を身につけており、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる

DP2: 課題を客観的・論理的に解決するためにデータサイエンス・AIを活用できる

DP3: 様々なステークホルダーと、課題解決プロジェクトの策定及びマネジメントに寄与することができる

DP4: 実社会の課題に対して、データサイエンス・AIを用いて解決策を提案できる

CP1: 社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する

CP2: データサイエンス・AIの基礎から応用までを修得するための科目を配置する

CP3: プロジェクトマネジメント手法及び経営学の基礎知識を修得するための科目を配置する

CP4: データサイエンス・AIを活用して社会課題の解決案を策定するための実践的な科目を配置する

これらの修正を踏まえ、「ヒューマン・ドメイン科目」の科目配置の考え方を再整理し、教育課程全体の体系性と妥当性を確保した。また、審査意見7で例示されている点を踏まえ「データサイエンス科目」「教養科目」の科目についても一部修正を加えた。これらの修正を踏まえ、卒業要件及び履修モデル、図書整備の考え方についても整理を行った。

【対応1】ヒューマン・ドメイン科目の再検討および基礎科目の整備

審査意見1を踏まえ、新たに設定した3つのドメイン「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」について、「ヒューマン・ドメイン科目」区分における配置科目を修正した。1年次後期の必修科目である「生活・健康理解入門」「地域・環境理解入門」「ビジネス・文化理解入門」について、それぞれ「ヘルスケア入門」「地域づくり入門」「異文化間コミュニケーション入門」へと科目名称を変更し、授業内容を見直した。これらの入門科目を、2年次以降に履修する各ヒューマン・ドメイン科目に接続される基礎科目とすることで、すべての学生が3つのドメインに関する基本的な知識を修得

できるようにする。

具体的には、「ヘルスケア入門」ではヘルスケアを構成する身体的・精神的・社会的側面の多面的な概念を理解し、人々が心身ともに健やかに暮らせる社会の実現に向けた社会課題を理解するための基礎を学ぶ。「地域づくり入門」では、都市・地域社会が直面する多様な社会課題を理解するための基礎を学ぶ。

「異文化間コミュニケーション入門」ではグローバル化が進展する現代社会において、文化的背景の異なる人々が共生する社会の課題を理解する基礎を学ぶ。これらの必修科目を通して、すべての学生が3つのドメインに関して、社会課題を理解するための前提となる基礎知識を身につけることができる。これにより、2年次以降にどのヒューマン・ドメイン科目を選択しても、基礎的知識を踏まえた上で、学生個人の関心や研究テーマに応じたより深い学びが可能となる。

また、2年次以降のヒューマン・ドメイン科目の配置方針についても以下のように整理し、一部のドメインでは新たな科目の追加や科目名称の変更、科目内容の見直しを行った。

まず、「ヘルスケア」ドメインでは、健康に関する社会課題を理解するために「ヘルスプロモーション」を新設科目として配置した。その上で、身体的側面の理解を深めるために「生化学と栄養」「生体検査学」「バイオメカニクス」を、精神的側面について理解を深めるために「心理学概論」「心身測定学」を配置している。加えて、社会的側面の理解を深めるために「発達学概論」「リハビリテーション論」を配置していることを明確にした。「ヘルスケア」ドメインでは、審査意見及びカリキュラム・ポリシーの「CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する」を踏まえ、社会課題を理解する基礎知識を身につけられる教育課程を編成するため、一部の科目においては授業内容の見直しも行った。身体的・精神的・社会的健康に関する基礎知識と社会課題との関連性を扱うことで、「ヒューマン・ドメイン科目」の位置づけに整合するものとした。「リハビリテーション論」では当初「データサイエンスを活用した評価・効果測定の方法についても学ぶ」ことを予定していたが、データサイエンスの活用についてはデータサイエンス科目及びドメインとデータ解析演習、ゼミナール、卒業研究で知識を深めることから、社会課題を理解するための基礎知識を学ぶ内容に修正を行った。審査意見で指摘された「ビッグデータから価値を見出すヘルスデータサイエンスに関する知識」については、本学部で扱う範囲を超えているため、教育課程においては扱わないこととする。

なお、「福祉工学」はより支援技術に関する工学的な応用や設計概念を学ぶ内容であったことから、「CP1:社会課題の理解に必要な知識を修得するための科目を配置する」及び「DP1：基本的な教養を身につけており、『ヘルスケア』『地域づくり』『異文化間コミュニケーション』の3つのドメインについて、社会課題を理解・把握できる」との整合性に鑑み、ヒューマン・ドメイン科目から科目を削除した。

「地域づくり」ドメインでは、「共生まちづくり論」「地域政策論」「都市論」「家族生活論」において、多角的な視点で地域づくりに関する基礎知識を学ぶ。「国際協力論」「ジェンダーと開発研究」「アジア地域研究（旧：地域研究Ⅰ）」「アフリカ地域研究（旧：地域研究Ⅱ）」では、発展途上国の開発事例を中心に、さらに特定の地域における地域づくりについての知識を身につける。「地域研究Ⅰ・Ⅱ」については、科目名称を変更することで内容の明確化を図った。加えて、「自然環境保護論」「環境ビジネス論」を配置し、人と自然の関わり、循環型社会、都市と自然環境、さらには環境配慮型ビジネスなどを学ぶことで、持続可能な地域づくりに関する理解を深める。なお、審査意見を踏まえ、「自然環境保護論」では気候変動や森林破壊、海洋汚染等の自然環境にも関わる社会課題について理解を深める授

業内容に修正を行った。

「異文化間コミュニケーション」ドメインでは、異なる文化的背景を持つ人々について理解するため、新設科目の「異文化間コミュニケーション」及び「比較文化論」を配置した。また、人々の価値観を育む基盤として宗教や教育は大きな要素であり、その基礎知識を身につけるため「宗教の世界史」「教育社会学概論」「比較教育学」を配置した。加えて、あらゆる文化をまたがってコミュニケーションの手段となるメディアについて学ぶ「メディア概論」「メディアリテラシー」「ソーシャルメディア論」を配置した。「宗教の世界史」は当初教養的な素養として身につける目的で教養科目に配置していたが、比較文化的な観点から人々の価値観の違いを考察する内容にシラバスを修正した上で、「異文化間コミュニケーション」ドメイン科目に移動した。

科目配置の見直しを受けて、配当時期は以下の通り変更を行うが、これらのヒューマン・ドメイン科目は、どの順序で履修をしても、入門科目で修得した基礎知識に基づいて学びを深めることができるよう設計されている。学生は自身の興味・関心や研究テーマに応じて科目を選択的に履修することで、データサイエンスやAIを適用する社会課題の理解のための基礎的知識を身につけることができる。

なお、新設した「ヘルスプロモーション」「異文化間コミュニケーション」はいずれも主要授業科目ではない選択科目であり、当該分野において適切な業績を有する基幹教員以外の教員を担当者として充てる。「ヘルスプロモーション」は上田泰久（教員個人調書_⑰_上田泰久）、「異文化間コミュニケーション」は舘奈保子（教員個人調書_⑱_舘奈保子）が担当する。

（修正前）

ドメイン名	1 年次後期配当科目	2 年次前期配当科目	2 年次後期配当科目
生活・健康ドメイン	生活・健康理解入門	心理学概論	心身測定学
		生化学と栄養	生体検査学
		バイオメカニクス	福祉工学
		リハビリテーション論	発達学概論
地域・環境ドメイン	地域・環境理解入門	地域政策論	共生まちづくり論
		国際協力論	ジェンダーと開発研究
		地域研究Ⅰ	地域研究Ⅱ
		都市論	家族生活論
		自然環境保護論	環境ビジネス論
ビジネス・文化ドメイン	ビジネス・文化理解入門	事業戦略論	マーケティング概論
		メディア概論	メディアリテラシー
		企業会計Ⅰ	企業会計Ⅱ
		教育社会学概論	比較教育学
		比較文化論	ソーシャルメディア論
			パーソナルファイナンス

(修正後)

ドメイン名	1 年次後期担当科目	2 年次前期担当科目	2 年次後期担当科目
ヘルスケアドメイン	ヘルスケア入門	心理学概論	心身測定学
		生化学と栄養	生体検査学
		発達学概論	リハビリテーション論
		ヘルスプロモーション	バイオメカニクス
地域づくりドメイン	地域づくり入門	都市論	地域政策論
		共生まちづくり論	ジェンダーと開発研究
		家族生活論	国際協力論
		アジア地域研究	アフリカ地域研究
		自然環境保護論	環境ビジネス論
異文化間コミュニケーションドメイン	異文化間コミュニケーション入門	異文化間コミュニケーション	ソーシャルメディア論
		宗教の世界史	比較文化論
		教育社会学概論	比較教育学
		メディア概論	メディアリテラシー

【対応 2】「データマイニング概論」の必修化

審査意見を踏まえ、すべての学生が量的なデータ分析手法を身につけることができるよう、3 年次前期に選択科目で配置していたデータサイエンス科目の「データマイニング概論」を必修科目に変更した。さらに、これを主要授業科目と位置づけ、基幹教員を科目担当者として配置した（教員個人調書_①_浅野俊幸、教員個人調書_②_穴太克則）。これにより、全ての学生が必修科目としてデータマイニングについて学ぶことから、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.11 の表 3「ドメイン別に適合するデータサイエンス科目・実践科目」の表から、「データマイニング概論」を削除した。

【対応 3】社会調査法の量的調査の実践科目の追加

審査意見を踏まえ、質的調査と量的調査をいずれも実践的に学ぶことができるようにするため、当初の「社会調査法実践Ⅰ・Ⅱ」を「社会調査法実践（質的）Ⅰ」「社会調査法実践（質的）Ⅱ」に科目名を修正し、新たに「社会調査法実践（量的）Ⅰ」「社会調査法実践（量的）Ⅱ」を設置した。

【対応 4】卒業要件単位数の見直し

審査意見 1 の【対応 1】でドメインの設定の考え方を再整理し、同じく審査意見 1 の【対応 2】では「プロジェクトマネジメント科目」区分に「経営学基礎」科目を新たに新設し、必修科目を追加した。また審査意見 7 での【対応 2】において「データマイニング概論」を必修科目としたことを踏まえて、卒業要件を見直した。具体的には、データサイエンス科目の「データサイエンス」区分の必修科目を 10 単位から 12 単位に変更し、プロジェクトマネジメント科目の「経営学基礎」区分において新たに 2 単位を必修として設定した。これにより、必修科目 70 単位、選択必修科目 38 単位、その他自由に選択する科目 16 単位の合計 124 単位以上を卒業要件単位数とした。また、必修科目以外の選択必修科目の要

件について不明瞭だったことから、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.31 に選択必修科目の修得方法について説明を追記した。

【対応 5】履修モデルの見直し

審査意見 1 の【対応 1】においてドメイン設定の考え方を明確にし、審査意見 7 への【対応 1】において、ドメイン科目の配置の考え方を明確にした。それらを踏まえ、履修モデルについても見直しを行い、ドメインごとの目的に沿った教育課程となっていることを示す。

（修正前）

履修モデル 1：「生活・健康」ドメイン

- ・将来の健康維持に向けたヘルスケアイノベーションの促進に貢献する人材
- ・人体や心のデータの収集・分析を通して人間に適合するシステムや社会の構築に貢献できる人材

履修モデル 2：「地域・環境」ドメイン

- ・地域社会・国際社会の課題の発掘・解決による地域活性化や国際協力に貢献する人材
- ・カーボンニュートラル、GX 推進、食品ロス削減や農林水産業の活性化に貢献する人材

履修モデル 3：「ビジネス・文化」ドメイン

- ・企業ビジネスにおける適切な顧客ニーズ分析やデータ駆動型の課題解決案策定に貢献する人材
- ・歴史学や教育学などの人文社会分野におけるトピックモデルの応用により新たな知見の探求に貢献する人材

（修正後）

履修モデル 1：「ヘルスケア」ドメイン

人々の心身の健康や生活の質の向上に向けて、データやデジタル技術を活用し、人間の特性に応じた社会のしくみや支援のあり方を提案できる人材

履修モデル 2：「地域づくり」ドメイン

地域や地球規模の課題を多様な視点から捉え、データに基づいて持続可能な暮らしや環境との共存の方法を提案できる人材

履修モデル 3：「異文化間コミュニケーション」ドメイン

多様な文化的背景や価値観の違いを理解し、宗教・教育・メディアなどの観点から異文化理解を深めながら、データに基づいた意思決定支援を通じて共生社会のあり方を提案できる人材

修正後の履修モデルは【資料 6】に示す。

【対応 6】 図書の整備の考え方の再整理

審査意見 1 でも説明した通り、「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインを「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」ドメインとして再整理を行った。それに伴い、図書館における資料整備計画についても再整理を行った。

「ヘルスケア」「地域づくり」ドメインについては、再整理に伴うドメイン領域の変更が無いため、資料整備計画の変更は不要である。

一方で「異文化間コミュニケーション」ドメインについては、ビジネス領域の教育課程における位置づけが変更された為、経営管理（NDC:335）、企業経営（NDC:336）、商業（NDC:670）について整備計画の積算から除外した。また、異なる文化的背景を持つ人々について理解するため、「異文化間コミュニケーション」「宗教の世界史」「比較文化論」、教育的観点から文化の共生を捉えるために、「教育社会学概論」「比較教育学」、あらゆる文化を繋ぐコミュニケーションの手段となるメディアについて学ぶ「メディア概論」「メディアリテラシー」「ソーシャルメディア論」等の科目が配された。その為、宗教（NDC:160）、教育（NDC:370）、教育学、教育思想（NDC:371）、教育史・事情（NDC:372）、教育政策、教育制度、教育行財政（NDC:373）、学校経営・管理、学校保健（NDC:374）、教育課程、学習指導、教科別教育（NDC:375）、幼児・初等・中等教育（NDC:376）、大学・高等・専門教育、学術行政（NDC:377）、障害児教育（NDC:378）、社会教育（NDC:379）を積算した。「異文化間コミュニケーション」ドメインにおいても、関連する資料は 39,849 冊と十分な資料が収蔵されている。

このように、既に収蔵している資料により、3つのドメイン領域を網羅している。したがって、今後新たに整備する資料については、当初の計画に基づき、「データサイエンス」領域を中心とした購入方針を継続する予定である。

【資料 6】 履修モデル

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.25)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(F)「<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>」</p> <p>3つのドメイン「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の社会課題を理解・把握し、ドメインに関する基礎知識を身につける科目である。</p> <p>1 年次後期に開講される必修科目「<u>ヘルスケア入門</u>」「<u>地域づくり入門</u>」「<u>異文化間コミュニケーション入門</u>」では、各ドメインの社会課題を理解するにあたって必要となる、領域ごとの基礎知識</p>	<p>(p.23)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(F)「<u>ドメイン科目</u>」</p> <p>3つのドメイン「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の社会課題を理解・把握し、ドメインに関する基礎知識を身につける科目である。</p> <p>1 年次後期に開講される必修科目「生活・健康理解入門」「地域・環境理解入門」「ビジネス・文化理解入門」では、ゼミナールを担当する教員が分担して担当し、ドメインで扱う社会課題や、それぞれのドメインでどのように ICT やデータサイエンス</p>

<p>を身につけることを目的とする。具体的には、「ヘルスケア入門」では、ヘルスケアの多面的な概念（身体的・精神的・社会的側面）を理解し、人々が心身ともに健やかに暮らせる社会の実現に向けた社会課題を学ぶ。「地域づくり入門」では、都市・地域社会が直面する多様な社会課題を学ぶ。「異文化間コミュニケーション入門」では、グローバル化が進展する現代社会において、文化的背景の異なる人々が共に生きるために必要な知識と視点を総合的に学ぶ。これにより、すべての学生が3つのドメインに関して、社会課題理解の前提となる基礎知識を身につけることができる。これにより、2年次以降に、どのヒューマン・ドメイン科目を選択しても、基礎的知識を踏まえた上で、学生個人の関心や研究テーマに応じ、より掘り下げた学びが可能となる。</p> <p>2年次前期からは、上記の入門科目を踏まえ、ドメインに関してより知識を深める科目を配置し、後述の(H)「実践科目」にて配置される「ドメインとデータ解析演習A～G」（選択必修科目）及び「ゼミナールⅠ・Ⅱ」「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」に進むための土台となるドメイン知識を修得することができる。3年次から学生はいずれかのドメインを専門分野とするゼミに入室するため、2年次は各ドメインから幅広く科目を選択して履修することとし、3年次からは入室したゼミに応じて、該当するドメインの科目を選択して履修する。</p> <p>「ヘルスケア」ドメインでは健康に関する社会課題を理解するために「ヘルスプロモーション」を配置する。身体的健康の理解を深めるために「生化学と栄養」「生体検査学」「バイオメカニクス」を、精神的健康について理解を深めるために「心理学概論」「心身測定学」を配置する。さらに、社会的健康に関する理解を深めるために「発達学概論」「リハビリテーション論」を配置する。</p> <p>「地域づくり」ドメインでは「共生まちづくり論」「地域政策論」「都市論」「家族生活論」において、多角的な視点で地域づくりに関する基礎知識</p>	<p>が活用され、どのように社会課題解決に貢献しているのかを、事例を参考に学んでいくことを目的としている。</p> <p>2年次前期からは、ドメインに関する基礎知識を身につける科目を配置し、後述の(H)「実践科目」にて配置される「ドメインとデータ解析演習A～G」（選択必修科目）及び「ゼミナールⅠ・Ⅱ」「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」に進むための土台となるドメイン知識を修得することができる。3年次から学生はいずれかのドメインを専門分野とするゼミに入室するため、2年次は各ドメインから幅広く科目を選択して履修することとし、3年次からは入室したゼミに応じて、該当するドメインの科目を選択して履修する。</p> <p>(追加)</p>
--	--

<p>を学ぶ。「国際協力論」「ジェンダーと開発研究」「アジア地域研究」「アフリカ地域研究」では、発展途上国の開発事例を中心に、さらに特定の地域における地域づくりについての知識を身につける。加えて、「自然環境保護論」「環境ビジネス論」を配置し、人と自然の関わり、循環型社会、都市と自然環境、さらには環境配慮型ビジネスなどを学ぶことで、持続可能な地域づくりに関する理解を深める。</p> <p>「異文化間コミュニケーション」ドメインでは、異なる文化的背景を持つ人々について理解するため、「異文化間コミュニケーション」「宗教の世界史」「比較文化論」を配置する。教育的観点から文化の共生を捉えるために、「教育社会学概論」「比較教育学」を配置し、あらゆる文化を繋ぐコミュニケーションの手段となるメディアについて学ぶ「メディア概論」「メディアリテラシー」「ソーシャルメディア論」を配置する。</p> <p>これらのヒューマン・ドメイン科目は、どの順序で履修しても、入門科目で修得した基礎知識に基づいて学びを深めることができるよう設計されている。学生は自身の興味・関心や研究テーマに応じて科目を選択的に履修することで、データサイエンスや AI を活用する社会課題の理解のための基礎的知識を身につけることができる。</p>	
<p>(p.24)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(E)「データサイエンス科目」</p> <p>(略)</p> <p>2 年次前期からは、ドメインとデータサイエンスの接続準備のために、各ドメインに汎用的な応用が可能な「シミュレーション論」やバイオメカニクスを学ぶ学生に対して「データサイエンスと物理」を設置する。続いて、2 年次後期からは、本格的にドメインへのデータサイエンス応用を想定</p>	<p>(p.22)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(E)「データサイエンス科目」</p> <p>(略)</p> <p>2 年次前期からは、ドメインとデータサイエンスの接続準備のために、各ドメインに汎用的な応用が可能な「シミュレーション論」やバイオメカニクスを学ぶ学生に対して「データサイエンスと物理」を設置する。続いて、2 年次後期からは、本格的にドメインへのデータサイエンス応用を想定</p>

<p>して、「音声解析概論」「画像解析概論」「自然言語解析概論」「時空間データ分析」を選択することで、音声、画像、自然言語、地理情報の各データのベクトル空間への射影と AI アルゴリズムの適用方法の基礎知識等を学ぶ。続いて、3 年次前期の<u>必修科目として「データマイニング概論」</u>を履修することで実社会での各 AI アルゴリズムの応用について概略を学び、ゼミや卒業研究につなげることができる。また、ビジネスや人文科学への関心が深い学生は、「トピックモデル概論」も選択可能である。これら 2 年次から 3 年次にかけて配置されているデータサイエンス科目区分の科目を修得することにより、後述する実践科目の 3 年次配当科目「ドメインとデータ解析演習 A～G」へと円滑に接続される。</p>	<p>して、「音声解析概論」「画像解析概論」「自然言語解析概論」「時空間データ分析」を選択することで、音声、画像、自然言語、地理情報の各データのベクトル空間への射影と AI アルゴリズムの適用方法の基礎知識等を学ぶ。続いて、3 年次前期からの選択科目として「データマイニング概論」を履修することで実社会での各 AI アルゴリズムの応用について概略を学び、ゼミや卒業研究につなげることができる。また、ビジネスや人文科学への関心が深い学生は、「トピックモデル概論」も選択可能である。これら 2 年次から 3 年次にかけて配置されているデータサイエンス科目区分の科目を修得することにより、後述する実践科目の 3 年次配当科目「ドメインとデータ解析演習 A～G」へと円滑に接続される。</p>
<p>(p.23)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(B)「教養科目」</p> <p>(略)</p> <p>◆選択科目</p> <p>多様な視野を身につけるための基本的な教養科目や社会について理解するための教養科目として、 「日本国憲法」「法学」「哲学」「ジェンダー論」「経済学」「フィットネス科学」「フィットネス科学演習Ⅰ」「フィットネス科学演習Ⅱ」「ジェンダード・イノベーションと地域社会」「<u>パーソナルファイナンス</u>」「社会調査法Ⅰ」「社会調査法Ⅱ」「社会統計学Ⅰ」「社会統計学Ⅱ」「量的データ分析」「質的データ分析」「<u>社会調査法実践Ⅰ（質的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅱ（質的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅰ（量的）</u>」「<u>社会調査法実践Ⅱ（量的）</u>」を配置する。学生は、自身の興味関心にもとづいて科目を履修する。</p>	<p>(p.21)</p> <p>④教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>2. 科目区分と科目構成</p> <p>(略)</p> <p>(B)「教養科目」</p> <p>(略)</p> <p>◆選択科目</p> <p>多様な視野を身につけるための基本的な教養科目や社会について理解するための教養科目として、 「日本国憲法」「法学」「哲学」「宗教の世界史」「ジェンダー論」「経済学」「フィットネス科学」「フィットネス科学演習Ⅰ」「フィットネス科学演習Ⅱ」「ジェンダード・イノベーションと地域社会」「社会調査法Ⅰ」「社会調査法Ⅱ」「社会統計学Ⅰ」「社会統計学Ⅱ」「量的データ分析」「質的データ分析」「<u>社会調査法実践Ⅰ</u>」「<u>社会調査法実践Ⅱ</u>」を配置する。学生は、自身の興味関心にもとづいて科目を履修する。</p>
<p>(p.30)</p> <p>⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p>	<p>(p.27)</p> <p>⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件</p>

2. 卒業要件

表 11 科目区分ごとの卒業要件単位数

科目区分		卒業要件単位数			合計
		必修	選択 必修	自由 選択	
大学特別科目		2	0	16	
教養科目		4	4		
キャリア・インターンシップ科目		4	0		
学科基礎科目		6	0		
データサイエンス 科目	データサイエンス	12	10 ※1		
	データエンジニアリング	4			
	AI	4			
	数理・統計	8			
ヒューマン・ ドメイン科目	ヘルスケア	2	20 ※2		
	地域づくり	2			
	異文化間コミュニケーション	2			
プロジェクト マネジメント科目	プロジェクトマネジメント	6	0		
	経営学基礎	2	0		
実践科目	ドメインとデータ解析	0	4		
	ゼミナール	4	0		
	卒業研究	8	0		
合計		70	38	16	124 単位 以上

※1 「データサイエンス」区分より 4 単位以上とする

(但し「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は対象外)

※2 「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の選択科目より、それぞれ 4 単位以上とする

選択必修及び自由選択科目について補足すると、まず教養科目では、必修科目に加え、選択必修科目として 4 単位を修得することとする。データサイエンス関連では、必修 28 単位に加え、選択必修 10 単位の修得が必要であり、そのうち「データサイエンス」区分から 4 単位以上を修得することを要件とする（「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は除く）。ヒューマン・ドメイン科目では、必修 6 単位に加え、選択必修科目を 20 単位とし、その際各ドメインから 4 単位以上を修得することとする。「実践科目」区分の「ドメインとデータ解析」は、選択必修科目として 2 科目 4 単位を修得する。自由選択の 16 単位は、各区分で要件単位を超えて修得した単位を加算する。

(p.33)

⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件

7. 履修モデル

本学部の教育方法、履修指導方法として下記の履修モデルを設定する【資料 13】。各履修モデル

2. 卒業要件

表 11 科目区分ごとの卒業要件単位数

科目区分		卒業要件単位数			合計
		必修	選択 必修	自由 選択	
大学特別科目		2	0	20	124 単位 以上
教養科目		4	4		
キャリア・インターンシップ科目		4	0		
学科基礎科目		6	0		
データサイエンス 科目	データサイエンス	10	10 ※1		
	データエンジニアリング	4			
	AI	4			
	数理・統計	8			
ドメイン科目	生活・健康	2	20 ※2		
	地域・環境	2			
	ビジネス・文化	2			
プロジェクトマネジメント科目		6	0		
実践科目	ドメインとデータ解析	0	4		
	ゼミナール	4	0		
	卒業研究	8	0		
合計		66	38	20	

※1 「データサイエンス」区分より 4 単位以上とする

(但し「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は対象外)

※2 「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」の選択科目より、それぞれ 4 単位以上とする

(追加)

(p.29)

⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件

7. 履修モデル

本学部の教育方法、履修指導方法として下記の履修モデルを設定する【資料 12】。各履修モデル

<p>における、具体的な養成する人材像例は下記の通りである。</p> <p>履修モデル1:「ヘルスケア」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人々の心身の健康や生活の質の向上に向けて、データやデジタル技術を活用し、人間の特性に応じた社会のしくみや支援のあり方を提案できる人材 <p>履修モデル2:「地域づくり」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域や地球規模の課題を多様な視点から捉え、データに基づいて持続可能な暮らしや環境との共存の方法を提案できる人材 <p>履修モデル3:「異文化間コミュニケーション」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な文化的背景や価値観の違いを理解し、宗教・教育・メディアなどの観点から異文化理解を深めながら、データに基づいた意思決定支援を通じて共生社会のあり方を提案できる人材 	<p>における、具体的な養成する人材像例は下記の通りである。</p> <p>履修モデル1:「生活・健康」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の健康維持に向けたヘルスケアイノベーションの促進に貢献する人材 ・人体や心のデータの収集・分析を通して人間に適合するシステムや社会の構築に貢献できる人材 <p>履修モデル2:「地域・環境」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会・国際社会の課題の発掘・解決による地域活性化や国際協力に貢献する人材 ・カーボンニュートラル、GX 推進、食品ロス削減や農林水産業の活性化に貢献する人材 <p>履修モデル3:「ビジネス・文化」ドメイン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業ビジネスにおける適切な顧客ニーズ分析やデータ駆動型の課題解決案策定に貢献する人材 ・歴史学や教育学などの人文社会分野におけるトピックモデルの応用により新たな知見の探求に貢献する人材
<p>(p.47)</p> <p>⑫施設、設備等の整備計画</p> <p>3. 図書館等の資料及び図書館の整備計画</p> <p>(3) 図書整備計画について</p> <p>(略)</p> <p>本学部では、「データサイエンス」領域に関連して、情報学・情報科学(NDC:007)、統計学(NDC:350)、数学(NDC:410)、コンピュータ科学(NDC:548)のデータサイエンス分野の資料が必要となる。</p> <p>またその他の領域については、「ヘルスケア」ドメイン領域では、基礎医学 (NDC:491)、臨床医学 (NDC:492)、リハビリテーション (NDC:494)、体育・スポーツ (NDC:780)。「地域づくり」ドメイン領域では、社会学 (NDC:361)、社会史、社会体制 (NDC:362)、</p>	<p>(p.42)</p> <p>⑫施設、設備等の整備計画</p> <p>3. 図書館等の資料及び図書館の整備計画</p> <p>(3) 図書整備計画について</p> <p>(略)</p> <p>本学部では、「データサイエンス」領域に関連して、情報学・情報科学(NDC:007)、統計学(NDC:350)、数学(NDC:410)、コンピュータ科学(NDC:548)のデータサイエンス分野の資料が必要となる。</p> <p>またその他の領域については、「生活・健康ドメイン」領域では、基礎医学 (NDC:491)、臨床医学 (NDC:492)、リハビリテーション (NDC:494)、体育・スポーツ (NDC:780)。「地域・環境ドメイン」領域では、社会学 (NDC:361)、社会史、社会体制 (NDC:362)、</p>

<p>社会保障 (NDC:364)、生活・消費者問題 (NDC:365)、労働経済、労働問題 (NDC:366)、家族問題、男性・女性問題、老人問題 (NDC:367)、社会病理 (NDC:368)、自然科学 (NDC:450)、公害・環境工学 (NDC:519)、農学 (NDC:610)。「異文化間コミュニケーション」ドメイン領域では、<u>宗教 (NDC:160)</u> 国際関係 (NDC:319)、社会学 (NDC:361)、教育 (NDC:370)、教育学、教育思想 (NDC:371)、教育史・事情 (NDC:372)、教育政策、教育制度、教育行財政 (NDC:373)、学校経営・管理、学校保健 (NDC:374)、教育課程、学習指導、教科別教育 (NDC:375)、幼児・初等・中等教育 (NDC:376)、大学・高等・専門教育、学術行政 (NDC:377)、障害児教育 (NDC:378)、社会教育 (NDC:379)、文化財 (NDC:709)、言語と文化 (NDC:809) 等の資料が必要となる。</p> <p>本学には、外国語学部・外国語学研究科、経営学部・経営学研究科、人間学部・人間学研究科、保健医療技術学部・保健医療科学研究科・看護学研究科、福祉医療マネジメント研究科を擁しており、従前より「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」ドメインとして取り扱う領域の資料は充実しており、データサイエンス領域を除き、それぞれのドメインに対して 20,000 冊以上の収蔵がある。具体的な各分野の蔵書数は表 16 に示す。</p>	<p>社会保障 (NDC:364)、生活・消費者問題 (NDC:365)、労働経済、労働問題 (NDC:366)、家族問題、男性・女性問題、老人問題 (NDC:367)、社会病理 (NDC:368)、自然科学 (NDC:450)、公害・環境工学 (NDC:519)、農学 (NDC:610)。「ビジネス・文化ドメイン」領域では、国際関係 (NDC:319)、経営管理 (NDC:335)、企業経営 (NDC:336)、社会学 (NDC:361)、商業 (NDC:670)、文化財 (NDC:709)、言語と文化 (NDC:809) 等の資料が必要となる。</p> <p>本学には、外国語学部・外国語学研究科、経営学部・経営学研究科、人間学部・人間学研究科、保健医療技術学部・保健医療科学研究科・看護学研究科、福祉医療マネジメント研究科を擁しており、従前より「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインとして取り扱う領域の資料は充実しており、データサイエンス領域を除き、それぞれのドメインに対して 20,000 冊以上の収蔵がある。具体的な各分野の蔵書数は表 16 に示す。</p> <p>本学には、外国語学部・外国語学研究科、経営学部・経営学研究科、人間学部・人間学研究科、保健医療技術学部・保健医療科学研究科・看護学研究科、福祉医療マネジメント研究科を擁しており、従前より「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインとして取り扱う領域の資料は充実しており、データサイエンス領域を除き、それぞれのドメインに対して 20,000 冊以上の収蔵がある。具体的な各分野の蔵書数は表 16 に示す。</p>
--	---

(新旧対照表) シラバス

新	旧
<p>(p.142)</p> <p>科目名：<u>ヘルスケア入門</u></p> <p>(授業の目的・到達目標)</p>	<p>(p.135)</p> <p>科目名：生活・健康理解入門</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p>

<p>【授業の目的】 <u>本授業は、ヘルスケアの多面的な概念（身体的・精神的・社会的側面）を理解し、人々が心身ともに健やかに暮らせる社会の実現に向けた社会課題を理解するための基礎を身につけることを目的とする。食生活、運動、睡眠、メンタルヘルス、歯科口腔保健、健康格差、社会保障制度、職場の健康管理など、現代の健康に関する多様なトピックを通して、健康と社会との関わりを多角的に捉える視点を養う。これにより、今後の専門的な学習に対する関心と意義を育む。</u></p> <p>【到達目標】 <u>・ヘルスケアの概念とそれを構成する身体的・精神的・社会的側面を説明できる</u> <u>・食生活、運動、睡眠、メンタルヘルス、健康格差など、現代の健康に関する社会課題について基礎的な内容を説明できる</u> <u>・健康に関する社会課題の背景構造や相互関係を理解し、それらの全体像を説明できる</u></p> <p>（授業概要） （略） ＜社会と健康＞ 第2回：社会と健康①（健康の概念）【飯田】 第3回：社会と健康②（健康の社会的決定要因・健康格差）【飯島】 ＜生活習慣の現状と対策＞ 第4回：生活習慣の現状と対策①（生活習慣病）【飯島】 第5回：生活習慣の現状と対策②（食生活と栄養）【飯島】 第6回：生活習慣の現状と対策③（身体活動・運動）【飯田】 第7回：生活習慣の現状と対策④（ストレスの概念）【長野】 第8回：生活習慣の現状と対策⑤（ストレスマネジメント）【長野】</p>	<p>【授業の目的】 本授業では、「生活・健康」ドメインにおける社会的課題を多角的な視点から理解することを目的とする。各専門分野におけるデータサイエンスやICTの活用事例を学び、それらが健康維持や社会課題の解決にどのように貢献しているかを検討する。また、各教員の専門性を通じて、学生自身の興味や関心のある分野を明確にし、今後の学習やキャリア形成の基盤を築くことを目指す。</p> <p>【到達目標】 ・「生活・健康」ドメインにおける各専門分野の基本的な知識を理解することができる。 ・ICTやデータサイエンスが各分野でどのように活用され、社会課題の解決に貢献しているかを説明することができる。 ・自身の興味や関心のある分野を明確化し、今後の学習においてどのように活用するか検討することができる。</p> <p>（授業概要） （略） 第2～4回：リハビリテーション学とデータサイエンスの関係【飯田】 第5・6回：作業療法学におけるデータ活用【神作】 第7・8回：データで解き明かす生理学【飯島】 第9～11回：計測心理学とデータサイエンス【長野】 第12・13回：バイオメカニクスとデータサイエンス【江原】 （略）</p>
---	---

<p>第 9 回：生活習慣の現状と対策⑥（睡眠）【長野】</p> <p>第 10 回：生活習慣の現状と対策⑦（歯科口腔保健）【神作】</p> <p>＜社会保障制度＞</p> <p>第 11 回：社会保障制度①（社会保障の概念）【神作】</p> <p>第 12 回：社会保障制度②（保健・医療・福祉制度）【神作】</p> <p>第 13 回：社会保障制度③（職場の健康管理と健康経営）【飯田】</p> <p>（略）</p>	
<p>（p.159）</p> <p>科目名：地域づくり入門</p> <p>（授業の目的・到達目標）</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業は、地域づくりに関する基本的な視点を学び、持続可能で共生的な地域社会の実現に向けた社会課題を理解することを目的とする。都市化や地域の多様性、国際協力、市民参加、交通、自然環境など多様な視点から地域が抱える課題の構造を捉え、地域づくりの基礎的な考え方を学ぶ。これにより、今後の専門的な学びに対する関心と意義を育む。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域づくりに関する基本的な考え方や視点を説明できる ・地域が直面する社会課題（人口減少、環境保全、地域経済など）の基礎的な内容を説明できる ・地域が抱える社会課題の背景や相互関係を理解し、その全体像を説明できる <p>（授業概要）</p> <p>（略）</p> <p>＜都市の空間構成を読み解く＞</p>	<p>（p.161）</p> <p>科目名：地域・環境理解入門</p> <p>（授業の目的・到達目標）</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業では、「地域・環境」ドメインにおける社会的課題を多角的な視点から理解することを目的とする。各専門分野におけるデータサイエンスや ICT の活用事例を学び、それらが健康維持や社会課題の解決にどのように貢献しているかを検討する。また、各教員の専門性を通じて、学生自身の興味や関心のある分野を明確にし、今後の学習やキャリア形成の基盤を築くことを目指す。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「地域・環境」ドメインにおける各専門分野の基本的な知識を理解することができる。 ・ICT やデータサイエンスが各分野でどのように活用され、社会課題の解決に貢献しているかを説明することができる。 ・自身の興味や関心のある分野を明確化し、今後の学習においてどのように活用するか検討することができる。 <p>（授業概要）</p> <p>（略）</p> <p>第 2・3 回：データから見る環境問題【中山】</p>

<p>第2回：都市空間の空間的・社会的構造【岩舘】</p> <p>第3回：人びとの生活から都市空間を読み解く【岩舘】</p> <p>＜多様性と国際協力から考える地域づくり＞</p> <p>第4回：高齢者・障がい者・ジェンダーとの協働・共生【嶋崎】</p> <p>第5回：発展途上国の視点から見る地域づくり【甲斐田】</p> <p>第6回：国際協力における農村開発【甲斐田】</p> <p>＜協働・共生の地域づくり＞</p> <p>第7回：市民参加型の地域づくりのあり方【井上】</p> <p>第8回：シビックテックと地域社会【井上】</p> <p>＜オープンデータと地域づくり＞</p> <p>第9回：デジタル技術と市民参加【井上】</p> <p>第10回：都市の交通問題【仲田】</p> <p>第11回：交通問題と市民社会【仲田】</p> <p>＜自然と人がともに生きる地域づくり＞</p> <p>第12回：都市と自然の共生【中山】</p> <p>第13回：人と人との共生のまちづくり【中山】</p> <p>(略)</p>	<p>第4・5回データで探るジェンダーと国際開発【甲斐田】</p> <p>第6・7回：都市社会学とデータサイエンス【岩舘】</p> <p>第8～10回：交通シミュレーションとデータ分析【仲田】</p> <p>第11～13回：デジタル技術と市民参加～シビックテックと地域社会～【井上】</p> <p>(略)</p>
<p>(p.183)</p> <p>科目名：異文化間コミュニケーション入門</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業は、異文化間コミュニケーションに関する基本的な視点を学び、文化的多様性がもたらす社会課題とその背景を理解することを目的とする。</p> <p>メディア、宗教、教育、労働などの具体的な事例を通じて、多様な観点から異文化との関わりを学び、文化的背景と社会的構造の相互関係を捉える力を養う。これにより、今後の専門的な学びに対する関心と意義を育む。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異文化間コミュニケーションに関する基本的な考え方や視点を説明できる ・異文化との関係で生じる社会課題の基礎的な 	<p>(p.186)</p> <p>科目名：ビジネス・文化理解入門</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業では、「ビジネス・文化」ドメインにおける社会的課題を多角的な視点から理解することを目的とする。各専門分野におけるデータサイエンスやICTの活用事例を学び、それらが健康維持や社会課題の解決にどのように貢献しているかを検討する。また、各教員の専門性を通じて、学生自身の興味や関心のある分野を明確にし、今後の学習やキャリア形成の基盤を築くことを目指す。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ビジネス・文化」ドメインにおける各専門分野の基本的な知識を理解することができる。 ・ICTやデータサイエンスが各分野でどのように

<p><u>内容を説明できる</u></p> <p><u>・異文化をめぐる社会課題の背景や相互関係を理解し、その全体像を説明できる</u></p> <p>(授業概要)</p> <p>(略)</p> <p><u><異文化間コミュニケーションの基礎></u></p> <p><u>第2回：言語／非言語コミュニケーション【舘】</u></p> <p><u>第3回：価値観の多様性と文化的相互作用【舘】</u></p> <p><u><グローバル化とメディア・情報化社会></u></p> <p><u>第4回：多文化社会を映すメディア【登丸】</u></p> <p><u>第5回：情報科社会とメディアリテラシー【登丸】</u></p> <p><u>第6回：ソーシャルメディアと異文化の交錯【登丸】</u></p> <p><u><宗教・生活文化と異文化理解></u></p> <p><u>第7回：世界の宗教と共生の課題【貫井】</u></p> <p><u>第8回：食文化とアイデンティティ【貫井】</u></p> <p><u>第9回：地域社会における異文化コミュニティ【貫井】</u></p> <p><u><グローバル時代における教育・労働と価値観></u></p> <p><u>第10回：世界の教育と文化的背景【恒吉】</u></p> <p><u>第11回：日本の教育と国際化の課題【恒吉】</u></p> <p><u>第12回：教育と労働をつなぐ異文化理解【小山】</u></p> <p><u>第13回：職業選択にみる文化的差異【小山】</u></p> <p>(略)</p>	<p>活用され、社会課題の解決に貢献しているかを説明することができる。</p> <p>・自身の興味や関心のある分野を明確化し、今後の学習においてどのように活用するか検討することができる。</p> <p>(授業概要)</p> <p>(略)</p> <p>第2・3回：データから見る国際比較 ～日本の教育と社会課題の分析～【恒吉】</p> <p>第4・5回：データサイエンスによる価値共創とマーケティング戦略の実践【渡部】</p> <p>第6・7回：メディア・リテラシーの向上とデータから見る文化傾向【登丸】</p> <p>第8・9回：データを用いた日本社会と異文化理解の新しい視点【貫井】</p> <p>第10・11回：データで読み解く大学教育とキャリア形成の実態【小山】</p> <p>第12・13回：データで読み解く経済の構造【穴太】</p> <p>(略)</p>
<p>(p.149)</p> <p>科目名：生化学と栄養</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p><u>本授業では、生化学と栄養学の基礎を学び、ヒトが生きるために必要な栄養素が、体内でどのように利用され、それがどのように生命の維持につながるのかを理解する力を養う。細胞や栄養素の基</u></p>	<p>(p.141)</p> <p>科目名：生化学と栄養</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>ヒトが生きていくために必要な栄養素が、体内でどのように利用され生命が維持されているか理解し、「生活・健康」を学ぶための基本的知識を身につける。</p>

<p><u>礎的理解に加え、現代の食生活や健康格差といった社会的課題との関連にも触れながら、身体的健康の維持・増進における栄養の重要性を理解する。現在の食生活における課題や健康格差といった社会課題にも触れる。</u></p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の体を形づくる基本単位である細胞について説明できる。 ・五大栄養素の種類を列挙できる。・五大栄養素の吸収と機能を説明できる。 ・<u>栄養素の代謝とエネルギー産生の基本的な仕組みを説明できる。</u> ・<u>現代の食生活における課題や健康食品との関係を踏まえ、栄養の重要性を多角的に説明できる。</u> <p>(授業概要)</p> <p>第1回 オリエンテーション (科目の目的、全体構成、評価方法等の説明を行い、導入<u>(栄養と生命活動の関係)</u>を行う。)</p> <p>第2回 <u>細胞の構造と細胞小器官と働き</u></p> <p>第3回 糖質の種類と消化・吸収</p> <p>第4回 糖質の代謝とエネルギー産生<u>の基本</u></p> <p>第5回 脂質の種類と消化・吸収</p> <p>第6回 脂質代謝と<u>その特徴</u></p> <p>第7回 アミノ酸の種類とタンパク質の消化・吸収</p> <p>第8回 アミノ酸代謝</p> <p>第9回 核酸代謝と DNA 合成<u>の基礎</u></p> <p>第10回 遺伝情報とタンパク質合成<u>の仕組み</u></p> <p>第11回 ビタミンの<u>分類</u>と働き</p> <p>第12回 <u>ミネラル・電解質</u>の働きと濃度調節</p> <p>第13回 基礎代謝量・呼吸商・エネルギー所要量と食事摂取基準</p> <p>第14回 健康食品<u>と食生活・健康格差の課題</u></p>	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の体を形づくる基本単位である細胞について説明できる。 ・五大栄養素の種類を列挙できる。 ・五大栄養素の吸収と機能を説明できる。 ・生きるために必要なエネルギー産生について説明できる。 ・食事から摂取する栄養の重要性と、健康食品との関わりについて説明できる。 <p>(授業概要)</p> <p>第1回 オリエンテーション (科目の目的、全体構成、評価方法等の説明を行い、導入を行う。)</p> <p>第2回 細胞小器官と働き</p> <p>第3回 糖質の種類と消化吸収</p> <p>第4回 糖質の代謝とエネルギー産生</p> <p>第5回 脂質の種類と消化吸収</p> <p>第6回 脂質の代謝</p> <p>第7回 アミノ酸種類とタンパク質の消化吸収</p> <p>第8回 アミノ酸代謝</p> <p>第9回 核酸代謝と DNA 合成</p> <p>第10回 遺伝情報とタンパク質合成</p> <p>第11回 ビタミンの働き</p> <p>第12回 電解質の働きと濃度調節</p> <p>第13回 基礎代謝量、呼吸商、エネルギー所要量、食事摂取基準</p> <p>第14回 健康食品</p>
<p>(p.151)</p> <p>科目名：生体検査学</p>	<p>(p.143)</p> <p>科目名：生体検査学</p>

<p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本講義では、<u>血液検査や身体計測など、人の健康状態を評価するための基本的な検査手法とその理論的背景を理解する力を身につける。健康状態や疾患リスクを科学的に把握するための知識、および生活習慣病の予防や健康管理における検査値の意義を学び、日常生活や社会における健康課題への理解を深める。</u></p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生体を対象としたさまざまな検査の方法とその目的が概説できる。 ・臓器の機能や病気の状態を把握するための各種検査方法と結果の解釈を概説できる。 ・生活習慣病を予防するための検査値の意味を説明できる ・<u>健康管理や社会的健康課題への応用可能性を、検査結果データから検討できる</u> <p>(授業概要)</p> <p>第 13 回 <u>悪性腫瘍・血液疾患</u>の検査</p> <p>第 14 回 <u>健康管理と生活習慣病予防に向けた生体検査の活用</u></p>	<p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>血液検査や身体計測など、人の健康状態を評価するための基本的な検査手法とその理論的背景を理解し、健康状態や疾患リスクを科学的に把握するための知識、および日常的な健康管理に活用できる実践的な知識を身につける。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生体を対象としたさまざまな検査の方法とその目的が概説できる。 ・臓器の機能や病気の状態を把握するための各種検査方法と結果の解釈を概説できる。 ・生活習慣病を予防するための検査値の意味を説明できる <p>(授業概要)</p> <p>(略)</p> <p>第 13 回 悪性腫瘍の検査</p> <p>第 14 回 血液疾患の検査</p>
<p>(p.156)</p> <p>科目名：リハビリテーション論</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本講義科目では、<u>リハビリテーションの基本的な概念や目的を理解し、健康の維持・回復や生活の質（QOL）の向上に向けた支援の在り方を学ぶ。</u> <u>身体的・精神的・社会的な側面を含むヘルスケアの視点から、リハビリテーションが個人や地域社会にどのように関与し、貢献しているのかを多面的に捉える力を養う。また、理学療法および作業療法の各分野における支援の特徴を学び、リハビリテーションの実践において活用される評価・観</u></p>	<p>(p.155)</p> <p>科目名：リハビリテーション論</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本講義では、リハビリテーションの基本概念とその実施目的を理解し、個々の健康維持や生活の質（QOL）向上に向けた取り組みを学ぶことを目指す。リハビリテーションの理論や手法を体系的に学び、身体機能の回復や日常生活動作の支援が、個人だけでなく社会全体にどのように役立つかを考察する。また、リハビリテーション医療が地域社会に果たす役割や、データサイエンスを活用した評価・効果測定の方法についても学ぶ。これら</p>

<p>察手法や、可視化技術の事例について基礎的な理解を深めることを目的とする。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーションの基本的な考え方と目的を説明できる ・リハビリテーションが健康の回復や生活の質（QOL）に果たす役割を理解できる ・理学療法および作業療法の特徴と違いを基礎的に説明できる ・リハビリテーション分野で活用される観察・評価・可視化の手法について基本的な意義を理解できる <p>（授業概要） （略）</p> <p>第2回 総論①（リハビリテーションと対人援助職の基本的理解） 【神作】</p> <p>第3回 総論②（地域連携、QOL、社会学モデルとしてのリハビリテーション） 【神作】</p> <p>第4回 総論③（リハビリテーション職との連携に必要な知識） 【神作】</p> <p>第5回 理学療法各論（理学療法士の専門性と運動療法）【飯田】</p> <p>第6回 理学療法と可視化技術①（身体機能の観察と可視化に関する基本的視点） 【飯田】</p> <p>第7回 理学療法と可視化技術②（AIを活用した姿勢分析アプリの紹介と体験）【飯田】</p> <p>第8回 理学療法と可視化技術③（三次元動作解析装置による歩行分析の事例紹介と体験）【飯田】</p> <p>第9回 作業療法各論①（作業療法の基礎と日常生活支援への応用）【神作】</p> <p>第10回 作業療法各論②（作業療法における支援技法の検討と発表①）【神作】</p> <p>第11回 作業療法各論③（作業療法における支援技法の検討と発表②）【神作】</p> <p>第12回 多職種連携の基礎 【神作】</p>	<p>を通じて、リハビリテーションがもたらす多面的な意義を検討する。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーションが対象者の生活や QOL の改善に介入することを理解できる。 ・リハビリテーションにおける多職種連携を理解することができる。 ・対人援助であるリハビリテーションの概要を理解することができる。 ・理学療法および作業療法等のリハビリテーションとデータサイエンスの関連を理解できる。 ・理学療法及び作業療法におけるデータ取得とその解析方法の例について理解することができる。 <p>（授業概要） （略）</p> <p>第2回 総論①（対人援助職） 【神作】</p> <p>第3回 総論②（地域連携や QOL、社会学モデル） 【神作】</p> <p>第4回 総論③（リハビリテーション職との連携に必要な知識） 【神作】</p> <p>第5回 PT 各論（理学療法士の専門性と運動療法）【飯田】</p> <p>第6回 PT とデータサイエンス①（リハビリテーション医療におけるデータサイエンスの意義）【飯田】</p> <p>第7回 PT とデータサイエンス②（グループワーク：AI による姿勢分析アプリを用いた解析）【飯田】</p> <p>第8回 PT とデータサイエンス③（グループワーク：三次元動作解析装置を使用した歩行動作の解析）【飯田】</p> <p>第9回 OT 各論① 作業療法とデータサイエンス（グループワーク）【神作】</p> <p>第10回 OT 各論② 作業療法とデータサイエンス（プレゼンテーション 1）【神作】</p> <p>第11回 OT 各論③ 作業療法とデータサイエンス</p>
---	---

<p>第 13 回 <u>社会課題の中で求められるリハビリテーションの役割</u> 【飯田】</p> <p>第 14 回 <u>授業の振り返りまとめ</u> 【神作】</p>	<p>ス（プレゼンテーション 2）【神作】</p> <p>第 12 回 その他のリハビリテーション関係領域とデータサイエンス（多職種連携 ※CM）【神作】</p> <p>第 13 回 データサイエンスとリハビリテーションの未来 【飯田】</p> <p>第 14 回 まとめ 【神作】</p>
<p>(p.190)</p> <p>科目名：宗教の世界史</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p><u>本講義では、キリスト教、仏教、神道を中心に、世界各地の宗教の成り立ちや特徴を学び、宗教が文化や社会や人の価値観に与える影響を理解することを目的とする。特に、宗教を通して人々の価値観や行動様式の違いを捉え、異文化理解の視点を養うことを目指す。各講義では、宗教と政治・経済、宗教とビジネス、宗教と教育の関係などにも触れながら、宗教が関わる現代社会の課題について多角的に考察する。</u></p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の宗教について基礎的な知識を身につけ、説明ができるようになる。 ・宗教と政治、宗教と経済の関係を理解し、宗教を軸とした現代社会における課題を把握できるようになる。 <p>(授業概要)</p> <p>(略)</p> <p>第 12 回 <u>宗教と現代世界の葛藤</u></p> <p>第 13 回 <u>異文化理解と宗教</u></p> <p>(略)</p>	<p>(p.8)</p> <p>科目名：宗教の世界史</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>人類の誕生以来、人は自然環境に適応し、集団で生きていくために宗教を発展させてきた。自然の恵みに感謝し、予測不可能な災害を恐れ、生死を経験する中で、世界各地で独自の宗教儀礼が生み出されてきた。本講義では、キリスト教、仏教、神道を中心に私たちに身近な宗教とその歴史について学んでいく。さらに、宗教を軸に政治と宗教の関係や、宗教ビジネスなど現代社会や国際情勢を理解する。最後に、現代中国の宗教事情について考える。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の宗教について基礎的な教養を身につけ、説明ができるようになる。 ・宗教と政治、宗教と経済の関係を理解し、宗教を軸とした現代社会における課題を把握できるようになる。 <p>(授業概要)</p> <p>(略)</p> <p>第 12 回 宗教と現代世界</p> <p>第 13 回 宗教と東アジア</p> <p>(略)</p>
<p>(削除)</p>	<p>p.150</p> <p>科目名：福祉工学</p>

(p.88) 科目名：データマイニング概論	(追加)
--------------------------	------

(新旧対照表) 授業科目の概要 (基本計画書)

新	旧
(p.19) 科目名：社会調査法実践（質的）Ⅰ	科目名：社会調査法実践Ⅰ
(p. 19) 科目名：社会調査法実践（質的）Ⅱ	科目名：社会調査法実践Ⅱ
(p. 19) 科目名：社会調査法実践（量的）Ⅰ 本演習科目では、量的調査への取り組みを通じて社会調査の一連のプロセスを習得することを目的とする。後期開講の「社会調査法実践（量的）Ⅱ」で実施する調査に向け、調査目的の明確化、仮説の設定、質問項目の構成、調査票の作成、プレテスト（予備調査）などの基礎的作業を行う。量的調査では、対象者の意識や行動を数値化し、傾向や関係性を統計的に分析することが重視されるため、信頼性・妥当性を考慮した調査設計が求められる。これらを通じて、量的データに基づいた社会調査の計画立案能力を養うことを目標とする。	(追加)
(p. 19) 科目名：社会調査法実践（量的）Ⅱ 本演習科目では、量的調査を通じて社会調査の一連のプロセスを実践的に学ぶことを目的とする。前期開講の「社会調査法実践（量的）Ⅰ」で作成した調査計画を踏まえ、調査の実施、データ収集、集計・分析、考察、報告書の作成までを行う。量的調査では、得られた数値データを用いて統計的手法による仮説の検証や傾向の把握を行い、客観性の高い知見の導出が求められる。これらのプロセスを通じて、量的データをもとに論理的に説明・報告する力を養い、実践的な調査遂行力を高めることを目標とする。	(追加)

<p>(p.26)</p> <p>科目名：<u>ヘルスプロモーション</u></p> <p><u>本講義科目では、人々が健康に生活するために必要な基礎的な知識や考え方を学ぶ。ヘルスプロモーション（健康づくり）の基本的な理念や、健康に影響を与える生活習慣、環境、社会のしくみについて理解を深める。生活習慣病やメタボリックシンドローム、ストレス、働き方、健康格差など、日常生活に関わるさまざまな健康課題を取り上げ、その背景にある社会的な要因にも目を向ける。多様な健康課題があることを知り、自分や周囲の健康について考える力を養うとともに、身体的・社会的側面を中心としたヘルスケアの視点との関連性を理解する。</u></p>	<p>(追加)</p>
<p>(p.28)</p> <p>科目名：<u>異文化間コミュニケーション</u></p> <p><u>本講義科目では、異文化間コミュニケーションの基本的な概念や理論を学びながら、文化や価値観の違いが引き起こす誤解や摩擦について学ぶことを目的とする。言語的・非言語的な表現の違いや、カルチャーショックとその適応プロセスなどを通して、異文化理解に必要な視点を養う。さらに、ジェンダー、セクシュアリティ、障がい者、外国につながる子どもたちなど、地域社会や企業活動における多様性とコミュニケーションに関する課題も取り上げ、ディスカッションを通じて自らの意見を深める。</u></p>	<p>(追加)</p>

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

8 本学部の学部・学科名称、学位名称及び学位の分野に照らし、教育課程との関係性が判然としな
いたため、以下の点を踏まえ、各名称を付すことにふさわしい教育課程が編成されていることを、具
体的かつ明確に説明すること。

・「人間中心社会の実現のため」に学ぶ学部・学科であることから、学部名称に「ヒューマン」を冠
しているが、例えば関連すると思われる授業科目「ヒューマンデータ可視化法」及び「IoT とヒュー
マンデータ」の「シラバス」によれば、「ヒューマンデータ」を扱う授業計画には見受けられず、ど
のように「人間中心社会の実現」するための教育課程が編成されているのか、判然としない。

・卒業要件上、データサイエンスに関する授業科目の必修科目は 26 単位の設定であり、学生が選択
するドメインによっては、それ以外の卒業要件修得単位を人文社会学系の学修によって満たすことも
可能な計画であると見受けられることから、学部・学科名称及び学位名称に「データサイエンス」を
冠し、学位の分野を「工学関係」としていることに照らし、ふさわしい教育課程が編成されているの
か疑義がある。

(対応) 審査意見を踏まえ、学部・学科・学位名称および分野の趣旨と教育課程の整合性を明確にする
ため、「ヒューマン・データサイエンス」定義を明確にし、科目内容と区分の見直しおよび修得単位数
の再整理を行った。

【対応 1】 本学が取り組む「ヒューマン・データサイエンス」の定義の明確化

本学部設置は「人間中心社会の実現」を目的としており、その実現に向けて、審査意見 1 への対応も
踏まえ、「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」の各ドメインにおける社会課題
を理解・把握し、データサイエンスおよび AI を活用して解決策を提案する力を身につける教育課程を
編成している。こういった社会課題に焦点を当て、データサイエンスおよび AI を用いて人間の意思決
定を支援する取り組みは、北米の高等教育機関での導入が見られ、“Human-centered Data Science”とい
う新たな学問体系が構築されつつある。本学部の名称である「ヒューマン・データサイエンス」は、こ
の“Human-centered Data Science”の概念に着想を得たものであり、「ヒューマンデータ＝身体に関する
データ」とは異なる概念として区別をしている。

学部名称における「ヒューマン・データサイエンス」は、人間中心社会の実現のために社会課題を理
解し、その背景や取り巻く環境を理解した上でデータ・AI を活用し、さらに様々な関係者からなるプロ
ジェクトにおいて解決策の提案に向けたマネジメントを行う力を全て統合したものであると定義する。
この定義を明確にするため、学部名称においては「ヒューマン」と「データサイエンス」の間に中点
「・」を付し、「ヒューマンデータ」との混同を避けていることの説明を加えた。

一方で、人間中心社会の実現に向けて、「ヒューマンデータ」そのものを活用することも極めて重要
な要素である。今回の審査意見を踏まえ、「ヒューマンデータ可視化法」および「IoT とヒューマンデー
タ」のシラバスにおいて、人の行動・生理データの収集から分析に至る手法について取り扱うことを明
確に記載した。

【対応 2】科目区分名称の変更

審査意見 1 及び 7 への対応でも説明した通り、学部学科名称及び学位の名称における「ヒューマン」に関して、身につけるべき知識や技能を明確にするため、3つのドメインに関する基礎的な知識を身につける科目を「ヒューマン・ドメイン科目」と定義し、「ドメイン科目」から変更した。

【対応 3】学位分野を工学分野とすることの妥当性の説明

本学部における卒業要件として、データサイエンスに関連する必修科目は 26 単位であったが、新たに量的データの分析手法を身につける「データマイニング概論」(2 単位)を必修科目とした。これに加え、選択必修科目として 10 単位をデータサイエンス科目から修得することが要件で定められているほか、「実践科目」区分における「ドメインとデータ解析」科目(選択必修、2 科目 4 単位)もデータ分析の実践を行う科目であることから、合計 42 単位をデータサイエンスに関する最低修得単位数と位置付ける。これらの科目区分は、データサイエンスに関する学修の中核を構成し、工学関係の教育体系に準拠した内容となっている。

また、審査意見 1 への対応において新設した必修科目「経営学入門」を含む「プロジェクトマネジメント科目」(計 8 単位)についても、データサイエンス・AI の技術を社会課題に対して活用するために必要となるスキルを身につけるものであり、応用情報学の領域を包含している。

さらに、必修科目である「卒業研究 I・II」(計 8 単位)においては、人文社会系の研究テーマを扱う場合であっても、データ分析手法の活用を前提とした研究を行うこととしている。審査意見 6 の【対応 2】で述べた通り、学部の情報教育委員会が学修成果に基づいて最終的な審査を実施することで、学生がデータサイエンスに関する実践的能力を修得していることを担保する計画となっている。

以上より、データサイエンス関連科目 42 単位、プロジェクトマネジメント関連科目 8 単位、卒業研究 8 単位の合計 58 単位を、当該分野における最低修得単位数として位置づけており、学位の分野として「工学関係」を選択することは妥当であると判断する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(p.13)</p> <p>③学部・学科等の名称及び学位の名称</p> <p>学部名：ヒューマン・データサイエンス学部</p> <p><u>Faculty of Human-centered Data Science</u></p> <p>学科名：ヒューマン・データサイエンス学科</p> <p><u>Department of Human-centered Data Science</u></p> <p>学位名：学士 (ヒューマン・データサイエンス)</p> <p><u>Bachelor of Human-centered Data Science</u></p> <p>本学部は、「①設置の趣旨及び必要性」の「3. (1) 養成する人材像」で記した通り「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与</p>	<p>(p.12)</p> <p>③学部・学科等の名称及び学位の名称</p> <p>学部名：ヒューマン・データサイエンス学部</p> <p>学科名：ヒューマン・データサイエンス学科</p> <p>学位名：学士 (データサイエンス)</p> <p>本学部は、「①設置の趣旨及び必要性」の 3. (1) 養成する人材像で記した通り「人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造」に寄与できる人材</p>

<p>できる人材の養成を目指している。本学部が示す社会像は、Society 5.0 構想が掲げる『人間中心社会』を、本学の建学の精神にもとづき解釈したものである。具体的に、本学部・学科が対象とする分野としては、「②学部・学科等の特色」の「2.社会課題とデータサイエンスの適合性を考慮したドメイン別教育」で示したように「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」ドメインである。これらのドメインでのデータ活用は、下記のように人間中心社会という視点での共生や持続可能性を促進するものである。</p> <p>① 心や体の健康上の課題に対処するデータサイエンス手法の新たな進歩</p> <p>② 持続可能性課題にデータサイエンスを適用する新しい研究</p> <p>③ <u>人文社会分野の文献やデータ分析による人間精神生活の理解</u></p> <p><u>こういった社会課題に焦点を当て、データサイエンスおよび AI を用いて人間の意思決定を支援する取り組みは、北米の高等教育機関での導入が見られ、“Human-centered Data Science”という新たな学問体系が構築されつつある。本学部の学部学科名称「ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科」は、この</u></p> <p><u>“Human-centered Data Science”の概念に着想を得たものである。従って、学部名の英語表記は「Faculty of Human-centered Data Science」、学</u></p> <p><u>科名は「Department of Human-centered Data Science」とする。</u></p> <p><u>なお、「ヒューマン・データサイエンス」は「ヒューマンデータ＝身体に関するデータ」とは異なる概念であることを明確にするため、「ヒューマン」と「データサイエンス」の間に中点「・」を付す。</u></p> <p>次に、学位の名称について説明する。本学部と</p>	<p>の養成を目指している。本学部が示す社会像は、Society 5.0 構想が掲げる『人間中心社会』を、本学の建学の精神にもとづき解釈したものである。具体的に、本学部・学科が対象とする分野としては、「②学部・学科等の特色」の「2.社会課題とデータサイエンスの適合性を考慮したドメイン別教育」で示したように「生活・健康」「地域・環境」「ビジネス・文化」ドメインである。これらのドメインでのデータ利活用は、下記のように人間中心社会という視点での共生や持続可能性を促進するものである。</p> <p>① 心や体の健康上の課題に対処するデータサイエンス手法の新たな進歩</p> <p>② 持続可能性課題にデータサイエンスを適用する新しい研究</p> <p>③ ビジネス経営データ分析の実践的活用や人文社会分野の文献分析による人間精神生活の理解</p> <p>この①～③に示した通り、本学部として解釈する人間中心社会の実現のために、3 つのドメインについての社会課題解決のための理論を学ぶことから、学部・学科名はそれらの学問領域を総称して「ヒューマン・データサイエンス」と呼称する。学位の名称は、人材養成の目的、研究対象分野にもとづき「学士（データサイエンス）」とする。</p> <p>(追加)</p>
--	---

<p>して解釈する人間中心社会の実現への寄与は、本学部が養成する人材像として示した3つの資質「社会課題発見スキル」「データサイエンス・AI活用スキル」「プロジェクトマネジメントスキル」を統合的に身につけることによって実現される。そこで、本学部が示す社会課題の範囲を明確にするために、上述の①～③に示した人間中心社会の実現のために理解・把握すべき社会課題のドメイン（「ヘルスケア」「地域づくり」「異文化間コミュニケーション」）を、「ヒューマン・ドメイン」と定義づけることとする。すなわち、本学部の教育課程における学位取得には「ヒューマン・ドメイン科目」「データサイエンス科目」「プロジェクトマネジメント科目」から必要単位を修得し、「実践科目」においてそれらを実践し統合することが必要である。つまり、本学部の学位を修得することは、本学が定義する「ヒューマン・ドメイン」について、データサイエンス・AIの活用による社会課題解決の提案ができる人材であることを保証するものである。このような観点から、学位の名称を「学士（ヒューマン・データサイエンス）」とする。英語表記は、「Bachelor of Human-centered Data Science」である。</p>	
--	--

（新旧対照表）シラバス

新	旧
<p>(p.78)</p> <p>科目名：ヒューマンデータ可視化法 （授業の目的・到達目標）</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業では、<u>人の行動・生理データ（ヒューマンデータ）</u>の可視化技術を習得し、データの分析結果を効果的に伝える方法を学ぶことを目的とする。デジタルメディア（テキスト、画像、2D・3DCG、音）のデータ処理およびビジュアライゼーション技術を活用し、情報の理解を促進するとともに、新たな価値や体験の創出を目指す。</p>	<p>(p.77)</p> <p>科目名：ヒューマンデータ可視化法 （授業の目的・到達目標）</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本授業では、各種のデータの可視化技術を習得し、データの分析結果を効果的に伝える方法を学ぶことを目的とする。デジタルメディア（テキスト、画像、2D・3DCG、音）のデータ処理およびビジュアライゼーション技術を活用し、情報の理解を促進するとともに、新たな価値や体験の創出を目指す。</p>

<p>(p.85)</p> <p>科目名：IoT とヒューマンデータ</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本講義では、IoT（モノのインターネット）技術の基礎を学び、IoT システムを活用し、<u>ヒューマンデータを収集・分析するための基本的スキル</u>を修得することを目的とする。具体的には、IoT デバイスの基本となるマイクロコンピュータ、<u>人の行動・生理反応を測定するセンサー類との接続方法、データの保存方法</u>などを学び、自作した IoT 機器を用いて、理論と実践の両面から理解を深める。</p> <p>※ 「<u>ヘルスケア</u>」ドメイン、特に健康へのデータサイエンス応用に関心のある学生向け</p>	<p>(p.83)</p> <p>科目名：IoT とヒューマンデータ</p> <p>(授業の目的・到達目標)</p> <p>【授業の目的】</p> <p>本講義では、IoT（モノのインターネット）技術の基礎を学び、IoT システムを活用したデータ収集・分析の基本的スキルを修得することを目的とする。具体的には、IoT デバイスの基本となるマイクロコンピュータ、センサー類との接続方法、センサーデータの取得などを学び、自作した IoT 機器を用いて、理論と実践の両面から理解を深める。</p> <p>※ 「生活・健康」ドメイン、特に健康へのデータサイエンス応用に関心のある学生向け</p>
--	---

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

9 主要授業科目の考え方について、適切な設定がなされているのか疑義があるため、以下の点を踏まえて、明確に説明すること。

・授業科目「ドメインとデータ解析演習 A～G」について、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.24 において、当該科目は「ドメインごとに必要とされるデータ解析手法を修得することができる」科目であると説明しており、本学部の趣旨に鑑みれば、ディプロマ・ポリシーの達成にとって重要な科目であると見受けられるが、当該科目は主要授業科目に設定されておらず、1 科目を除き、基幹教員が担当しない計画である。このため、大学設置基準第 8 条において主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、適切な主要授業科目が設定されているか判然としない。

(対応) 審査意見を踏まえ、「ドメインとデータ解析演習 A～G」を主要授業科目に位置付けるとともに、基幹教員による指導・管理体制を整備し、適切な運営体制を確保した。

【対応 1】「ドメインとデータ解析演習 A～G」の主要授業科目への変更

「ドメインとデータ解析演習 A～G」については、審査意見の通り本学部のディプロマ・ポリシーの達成にとって重要な科目である。その為、審査意見を踏まえ、本科目を主要授業科目とする。

【対応 2】「ドメインとデータ解析演習 A～G」の質の担保及び授業運用体制の明確化

大学設置基準第 8 条において、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することと定められている。しかしながら、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.27 に記載の通り、本科目は「具体的な事例を用いながらデータ解析を行う演習形式の授業」であり、「実務経験から得られる具体的な事例」を重視している点が特徴である。このため、実務におけるデータ分析の経験を有する基幹教員以外の教員を担当者として配置することにより、当該科目の教育目的を十分に達成できる体制となっている。

一方、基幹教員以外の教員は、教育課程を構成する主要授業科目に対して責任を負うことができない。そこで、本科目区分においては、基幹教員で構成される情報教育委員会が、授業運営の適正を確保するための指揮・管理を担い、教育課程に対する責任を担保する体制を構築している。具体的には「ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領」【資料 7】を策定し、以下の事項を実施することで、教育の質の維持・向上を図る。

- ・科目担当教員に対する、当該科目のカリキュラム全体における役割の周知
- ・使用する具体的な事例、サンプルデータ、解析手法の確認および調整
- ・成果物の評価に関する評価ルーブリックの作成、および配布
- ・授業運営上のフォロー体制の整備と、発生した問題への対応方針の検討
- ・受講学生への学修支援および情報共有
- ・授業運営に関する振り返りの実施

【資料 7】ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領案

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧																																																																						
<p>(p.28)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の考え方</p> <p>(略)</p> <p>表 10 DP、CP 及び学士力と対応する主要授業科目対応表</p> <table><tr><th>DP</th><th>DP1</th><th>DP2</th><th>DP3</th><th>DP4</th></tr><tr><th>CP</th><th>CP1</th><th>CP2</th><th>CP3</th><th>CP4</th></tr><tr><th>学士力</th><th>知識・理解</th><th>汎用的技能</th><th>態度・志向性</th><th>統合的な学習経験と創造的思考力</th></tr><tr><td>1 年次</td><td>「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「ヘルスケア入門」「地域づくり入門」「異文化間コミュニケーション入門」</td><td>「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」</td><td>「未来体験プログラム」</td><td></td></tr><tr><td>2 年次</td><td></td><td>「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」</td><td>「プロジェクトマネジメント概論」「経営学入門」</td><td></td></tr><tr><td>3 年次</td><td></td><td>「データマイニング概論」</td><td>「プロジェクトマネジメント演習」</td><td>「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「ドメインとデータデータ解析演習 A～G」</td></tr><tr><td>4 年次</td><td></td><td></td><td></td><td>「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」</td></tr></table>	DP	DP1	DP2	DP3	DP4	CP	CP1	CP2	CP3	CP4	学士力	知識・理解	汎用的技能	態度・志向性	統合的な学習経験と創造的思考力	1 年次	「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「ヘルスケア入門」「地域づくり入門」「異文化間コミュニケーション入門」	「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」	「未来体験プログラム」		2 年次		「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」	「プロジェクトマネジメント概論」「経営学入門」		3 年次		「データマイニング概論」	「プロジェクトマネジメント演習」	「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「ドメインとデータデータ解析演習 A～G」	4 年次				「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」	<p>(p.25)</p> <p>④ 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の考え方</p> <p>(略)</p> <p>表 10 DP、CP 及び学士力と対応する主要授業科目対応表</p> <table><tr><th>DP</th><th>DP1</th><th>DP2</th><th>DP3</th><th>DP4</th></tr><tr><th>CP</th><th>CP1</th><th>CP2</th><th>CP3</th><th>CP4</th></tr><tr><th>学士力</th><th>知識・理解</th><th>汎用的技能</th><th>態度・志向性</th><th>統合的な学習経験と創造的思考力</th></tr><tr><td>1 年次</td><td>「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「生活・健康理解入門」「地域・環境理解入門」「ビジネス・文化理解入門」</td><td>「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」</td><td>「未来体験プログラム」</td><td></td></tr><tr><td>2 年次</td><td></td><td>「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」</td><td>「プロジェクトマネジメント概論」</td><td></td></tr><tr><td>3 年次</td><td></td><td></td><td>「プロジェクトマネジメント演習」</td><td>「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」</td></tr><tr><td>4 年次</td><td></td><td></td><td></td><td>「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」</td></tr></table>	DP	DP1	DP2	DP3	DP4	CP	CP1	CP2	CP3	CP4	学士力	知識・理解	汎用的技能	態度・志向性	統合的な学習経験と創造的思考力	1 年次	「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「生活・健康理解入門」「地域・環境理解入門」「ビジネス・文化理解入門」	「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」	「未来体験プログラム」		2 年次		「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」	「プロジェクトマネジメント概論」		3 年次			「プロジェクトマネジメント演習」	「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」	4 年次				「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」
DP	DP1	DP2	DP3	DP4																																																																			
CP	CP1	CP2	CP3	CP4																																																																			
学士力	知識・理解	汎用的技能	態度・志向性	統合的な学習経験と創造的思考力																																																																			
1 年次	「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「ヘルスケア入門」「地域づくり入門」「異文化間コミュニケーション入門」	「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」	「未来体験プログラム」																																																																				
2 年次		「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」	「プロジェクトマネジメント概論」「経営学入門」																																																																				
3 年次		「データマイニング概論」	「プロジェクトマネジメント演習」	「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「ドメインとデータデータ解析演習 A～G」																																																																			
4 年次				「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」																																																																			
DP	DP1	DP2	DP3	DP4																																																																			
CP	CP1	CP2	CP3	CP4																																																																			
学士力	知識・理解	汎用的技能	態度・志向性	統合的な学習経験と創造的思考力																																																																			
1 年次	「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「ドメインとデータサイエンス」「生活・健康理解入門」「地域・環境理解入門」「ビジネス・文化理解入門」	「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「基礎統計学」「データベースシステム概論」「機械学習入門」	「未来体験プログラム」																																																																				
2 年次		「プログラミングⅢ」「システム設計論」「機械学習応用」	「プロジェクトマネジメント概論」																																																																				
3 年次			「プロジェクトマネジメント演習」	「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」																																																																			
4 年次				「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」																																																																			
<p>(p.39)</p> <p>⑩教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の担当教員</p> <p>主要授業科目のうち、キャリア・インターンシップ科目、データサイエンス科目、<u>ヒューマン・ドメイン科目</u>、実践科目の必修科目を中心に基幹教員を配置している。ただし、プログラミングやキャリア科目は、効果的にスキル習得を行うために複数クラスで開講し、基幹教員と基幹教員以外の教員を配置して対応している。また、プロジェクトマネジメント科目は、専門分野と実務現場での最新情報を反映することを視野に入れ一部で基幹教員以外の教員を配置している。</p> <p><u>実践科目である「ドメインとデータ解析演習 A～G」</u>は、学問体系に基づく理論的知識よりも、実</p>	<p>(p.39)</p> <p>⑩教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色</p> <p>3. 主要授業科目の担当教員</p> <p>主要授業科目のうち、キャリア・インターンシップ科目、データサイエンス科目、ドメイン科目、実践科目の必修科目を中心に基幹教員を配置している。ただし、プログラミングやキャリア科目は、効果的にスキル習得を行うために複数クラスで開講し、基幹教員と基幹教員以外の教員を配置して対応している。また、プロジェクトマネジメント科目は、専門分野と実務現場での最新情報を反映することを視野に入れ一部で基幹教員以外の教員を配置している。</p>																																																																						

<p>務経験に基づく具体的な事例を重視することを目的とした科目群である。そのため、当該科目においては、実務におけるデータ分析の経験を有する教員を基幹教員以外からも配置することで、教育目的の達成を図る。一方で、基幹教員以外の教員は教育課程を構成する主要授業科目に対する責任を担うことができない。このため本科目群においては、情報教育委員会が科目運営の指揮・管理を行い、教育課程全体に対する責任を担保する体制を構築する。具体的には「ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領」【資料 27】を策定し、以下の事項を実施することで、科目の質の維持および円滑な運営を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目担当教員に対する、当該科目のカリキュラム全体における役割の周知 ・使用する具体的な事例、サンプルデータ、解析手法の確認および調整 ・成果物の評価に関する評価ルーブリックの作成、および配布 ・授業運営上のフォロー体制の整備と、発生した問題への対応方針の検討 ・受講学生への学修支援および情報共有 ・授業運営に関する振り返りの実施 <p>これらの質を担保するため、情報教育委員会は、データサイエンス等の工学分野に研究業績のある基幹教員を配置する他、外部よりデータサイエンス領域に研究業績や知見を持つアドバイザーを迎える等の体制を整える。</p>	
--	--

(新旧対照表) シラバス

新	旧
(p.240) 科目名：ドメインとデータ解析演習 A	(追加)
(p.244) 科目名：ドメインとデータ解析演習 B	(追加)

(p.249) 科目名：ドメインとデータ解析演習 C	(追加)
(p.252) 科目名：ドメインとデータ解析演習 D	(追加)
(p.257) 科目名：ドメインとデータ解析演習 E	(追加)
(p.264) 科目名：ドメインとデータ解析演習 G	(追加)

10 審査意見3のとおり、アドミSSION・ポリシーの妥当性が判然としないため、選抜方法の妥当性も判断できないが、関連する審査意見への対応や以下の点を踏まえて、適切なアドミSSION・ポリシーに基づいた選抜が行われることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

・「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」p.36の「(2) 入試区分ごとの募集人数と選考方法、アドミSSION・ポリシーとの対応」において、例えば、「一般選抜」において、「大学入学共通テスト利用選抜」では、「数学」又は「情報」を少なくとも1科目は選択することを求めているが、「全学統一選抜」では、英語の他、「(国語、数学、化学、生物、情報) より1科目」と設定しているため、「数学」や「情報」を選択しない学生も想定できることから、本学部の教育を受けるために必要な資質・能力を適切に評価・判定できる選抜方法が設定されているか、疑義がある。

(対応) 審査意見を踏まえ、アドミSSION・ポリシーを見直すとともに、選抜方法の整合性を確保し、多様な学生の受け入れと入学後の学修支援体制を明確にした。

本学部では、アドミSSION・ポリシーにおいて、特定の教科や分野に偏らない多様な資質・背景を持つ学生の受け入れを基本方針として掲げており、実際の選抜方式においても、一般選抜や総合型選抜、学校推薦型選抜では、必ずしも数学や情報を課さない形式を採用していた。こうした柔軟な受け入れ方針のもとで、文理を問わず広く人材を受け入れることを意図していた。

一方で、「大学入学共通テスト利用選抜」においては、「数学」または「情報」のいずれかを選択必須とする要件を当初設定していた。これは、全国規模で一律に実施される共通テストの制度を活用することによって、一定の学力保証を前提とした受験機会を提供できるという制度的特徴を踏まえたものであり、選抜の公正性と客観性の確保という観点から妥当と判断したものである。特に、データサイエンス・AIの学修に際しては、ある程度の数理的な考え方に触れていることが望ましいと考えられるため、入学後の学びへの準備状況を共通テストという全国共通の指標で把握する目的で、このような構成をとっていた。

【対応1】大学入学共通テスト利用選抜の選考方法の見直し

審査意見10において、「大学入学共通テスト利用選抜」では「数学」または「情報」の選択を必須としている一方で、「全学統一選抜」など他の選抜方式ではより広い選択科目を認めており、その結果、数学や情報を選択しない学生も想定されるため、アドミSSION・ポリシーと選抜方法との整合性に疑義があるとの指摘がなされた。

審査意見3への対応においては、アドミSSION・ポリシーにおいて求める素養をより具体化し、基礎的な学力として国語・英語・数学・情報・地理歴史などの教科を幅広く明示した上で、新たに文章や資料を読み取り自分の考えを説明する力(AP1-2)を追加するなど、文理を問わず多様な背景を持つ学生を受け入れる方針を明確化した。

さらに、アドミSSION・ポリシーの補足説明においても、数学的素養が入学後に必要となることを前提としつつ、それを段階的に育成するカリキュラムと支援体制(入学前教育、基礎学力テスト、リメ

ディアル科目、初年次科目など）を整備することによって、入学時点で特定教科を必須とせずとも学修成果を確保できることを明示した。

これらのアドミッション・ポリシーの見直しと支援体制の整備を踏まえ、当初「共通テスト利用選抜」において設定していた「数学」または「情報」の必須要件について見直しを行った。全国規模で実施される共通テストは、受験者層が幅広く、学力測定の公平性が高い一方で、受験者の教科選択に地域差・学校差が存在することも踏まえ、受験機会の平等性を重視して受験科目の制限を緩和したものである。これにより、アドミッション・ポリシー、選抜方法、教育課程の三者の整合性を確保しつつ、多様な学生の受け入れと育成を両立する選抜体制を構築した。

なお、審査意見3への対応でも述べた通り、本学部では合格者に対して、入学前から数学的素養を養う教育を提供し、入学後の学びへ円滑に接続できる体制を整えている。一方で、一般選抜の一般Ⅲ期においては、合格発表から入学までの期間が短いため、入学前教育や事前課題の実施が困難であることを踏まえ、「数学」を必須科目として課すことにより、入学後の学修に必要な基礎的素養を担保している。

【対応2】入試区分とアドミッション・ポリシーの対応関係の明確化

各入試区分とアドミッション・ポリシーの対応関係を明確にするため、「設置の趣旨等を記載した書類（本文）」のp.41の表14の前に、以下の文を追加した。

「本学では、入学者選抜において選抜方式ごとにアドミッション・ポリシーの要素に重点を置いている。一般選抜では「知識・技能（AP1）」、学校推薦型選抜では「思考力・判断力・表現力（AP2）」、総合型選抜では「主体性・多様性・協働性（AP3）」を特に重視している。それぞれの選抜方式においては、他の要素も適切に評価しつつ、重視する資質に応じた選抜を実施している。」

（新旧対照表）

新	旧
(p.39) ⑨ 入学者選抜の概要 2. 入学者選抜の実施方法 (1) 本学の入試区分ごとの目的 (略) 「一般選抜」 一般選抜には、試験名称として「大学入学共通テスト利用選抜」「全学統一選抜」「一般選抜」の3種類を用意する。基礎的な知識・学力を評価し、特にAP1の知識・技能に特化して評価を行う。ただし、学習意欲、多面的で総合的な学力を有する者を受け入れるため、出願時に提出を求める「主体性を持って取り組んだ経験」（150～200字）も併せて総合的に評価する。	(p.35) ⑨ 入学者選抜の概要 2. 入学者選抜の実施方法 (1) 本学の入試区分ごとの目的 (略) 「一般選抜」 一般選抜には、試験名称として「大学入学共通テスト利用選抜」「全学統一選抜」「一般選抜」の3種類を用意する。基礎的な知識・学力を評価し、特にAP1の知識・技能に特化して評価を行う。ただし、学習意欲、多面的で総合的な学力を有する者を受け入れるため、出願時に提出を求める「主体性を持って取り組んだ経験」（150～200字）も併せて総合的に評価する。

<p>試験名称「大学入学共通テスト利用選抜」では大学入学共通テストの2科目及び3科目による判定を行う。</p> <p>試験名称「全学統一選抜」では、英語を必須とし、国語、数学、化学、生物、情報の5科目から1科目を選択し受験することにより AP1 の基礎的な知識・技能の評価を行う。</p> <p>試験名称「一般選抜」は、一般選抜Ⅰ期 A 日程においては、2科目受験の場合は、英語を必須とし、国語、世界史、日本史、数学、化学、生物、情報の7科目より1科目を選択して受験する。3科目受験の場合は、英語を必須とし、国語、化学、生物、情報の4科目より1科目、世界史、日本史、数学の3科目より1科目を選択して受験する。一般選抜Ⅰ期 B 日程においては、英語、国語、世界史、日本史、数学、情報6科目より2科目を選択して受験する。一般選抜Ⅱ期においては、英語を必須とし、国語、化学、生物、数学、情報の5科目より1科目を選択して受験する。一般選抜Ⅲ期においては、数学を必須とし、英語、化学、生物、情報、総合の5科目より1科目を選択して受験する。</p>	<p>試験名称「大学入学共通テスト利用選抜」では大学入学共通テストの2科目による判定、及び3科目による判定を行うが、2科目判定の場合は少なくとも1科目は数学または情報を、3科目判定の場合は2科目に数学と情報を選択することにより、AP1 でも特に STEM に関する知識・技能を問う。</p> <p>試験名称「全学統一選抜」では、英語を必須とし、国語、数学、化学、生物、情報の5科目から1科目を選択し受験することにより AP1 の基礎的な知識・技能の評価を行う。</p> <p>試験名称「一般選抜」は、一般選抜Ⅰ期 A 日程においては、2科目受験の場合は、英語を必須とし、国語、世界史、日本史、数学、化学、生物、情報の7科目より1科目を選択して受験する。3科目受験の場合は、英語を必須とし、国語、化学、生物、情報の4科目より1科目、世界史、日本史、数学の3科目より1科目を選択して受験する。一般選抜Ⅰ期 B 日程においては、英語、国語、世界史、日本史、数学、情報6科目より2科目を選択して受験する。一般選抜Ⅱ期においては、英語を必須とし、国語、化学、生物、数学、情報の5科目より1科目を選択して受験する。一般選抜Ⅲ期においては、数学を必須とし、英語、化学、生物、情報、総合の5科目より1科目を選択して受験する。</p>
<p>(p.40)</p> <p>⑨ 入学者選抜の概要</p> <p>2. 入学者選抜の実施方法</p> <p>(2) 入試区分ごとの募集人数と選考方法、アドミッション・ポリシーとの対応</p> <p>表 13 入試区分ごとの募集人数と選考方法</p> <p>一般選抜 大学入学共通テスト利用選抜 選考方法</p> <p>【1期2科目型判定・Ⅱ期2科目型判定・Ⅲ期2科目型判定】</p> <p>【1期3科目型判定・Ⅱ期3科目型判定・Ⅲ期3科目型判定】</p>	<p>(p.36)</p> <p>⑨ 入学者選抜の概要</p> <p>2. 入学者選抜の実施方法</p> <p>(2) 入試区分ごとの募集人数と選考方法、アドミッション・ポリシーとの対応</p> <p>表 13 入試区分ごとの募集人数と選考方法</p> <p>一般選抜 大学入学共通テスト利用選抜 選考方法</p> <p>【1期2科目型判定・Ⅱ期2科目型判定・Ⅲ期2科目型判定】</p> <p>・2科目中少なくとも1科目は数学または情報を選択する。</p>

<p>(略)</p> <p><u>本学では、入学者選抜において選抜方式ごとにアドミッション・ポリシーの要素に重点を置いている。一般選抜では「知識・技能 (AP1)」、学校推薦型選抜では「思考力・判断力・表現力 (AP2)」、総合型選抜では「主体性・多様性・協働性 (AP3)」を特に重視している。それぞれの選抜方式においては、他の要素も適切に評価しつつ、重視する資質に応じた選抜を実施している。本学部における各入試区分とアドミッション・ポリシーの対応は表 14 の通りである。なお、評価する要素を「○」、特に重視する要素を「◎」で示している。</u></p>	<p>【1 期 3 科目型判定・Ⅱ期 3 科目型判定・Ⅲ期 3 科目型判定】</p> <p>・3 科目中少なくとも 2 科目に数学と情報を選択する。</p> <p>(略)</p> <p>(追加)</p> <p>各入試区分とアドミッション・ポリシーの対応は表 14 の通りである。なお、評価する要素を「○」、特に重視する要素を「◎」で示している。</p>
---	--

11 本学全体において、大学設置基準第 10 条に定める基幹教員の半数以上は原則として教授とする規定を満たしていないため、適切に改めること。

教職課程センターに所属する教員は、既存各学部にも所属し学位プログラムに責任を持っていることから、各学部に整理したうえで大学設置基準に定める基幹教員の定義に沿って計上を行った。具体的には、外国語学部教職課程センターの教授2名を外国語学部英語コミュニケーション学科の「a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの」に、人間学部教職課程センターの教授3名を人間学部児童発達学科の「a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの」に計上した。この修正により、大学全体の基幹教員数、教授数に変更はない。

p.2

学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 （助手を除く）	
		教授	准教授	講師	助教	計			
既設	外国語学部 英語コミュニケーション学科	<u>12人</u> (12)	12人 (12)	0人 (0)	1人 (1)	<u>25人</u> (25)	0人 (0)	91人 (91)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	<u>12</u> (12)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	25 (25)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	<u>12</u> (12)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	<u>25</u> (25)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	<u>12</u> (12)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	<u>25</u> (25)			
新設	人間学部 児童発達学科	<u>8</u> (8)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	<u>16</u> (16)	0 (0)	50 (50)	大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であつて、主要授業科目を担当するもの	<u>8</u> (8)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	<u>16</u> (16)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	<u>8</u> (8)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	<u>16</u> (16)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であつて、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であつて、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	<u>8</u> (8)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	<u>16</u> (16)			

(旧)
p.2

学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)	
		教授	准教授	講師	助教	計			
既設	外国語学部 英語コミュニケーション学科	10人 (10)	12人 (12)	0人 (0)	1人 (1)	23人 (23)	0人 (0)	91人 (91)	大学設置基準別表 第一イに定める基 幹教員数の四分の 三の数 9人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	23 (23)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	10 (10)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	23 (23)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	10 (10)	12 (12)	0 (0)	1 (1)	23 (23)			
	外国語学部 教職課程センター	2人 (2)	0人 (0)	0人 (0)	0人 (0)	2人 (2)	0人 (0)	0 (0)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)			
	小計（a～b）	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)			
設	人間学部 児童発達学科	5 (5)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	50 (50)	大学設置基準別表 第一イに定める基 幹教員数の四分の 三の数 8人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	5 (5)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	5 (5)	7 (7)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
	人間学部 教職課程センター	3人 (3)	0人 (0)	0人 (0)	0人 (0)	3人 (3)	0 (0)	0 (0)	
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	3 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)			
	小計（a～b）	3 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	3 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)			
分									

(是正事項) ヒューマン・データサイエンス学部ヒューマン・データサイエンス学科

12 「基本計画書」において、外国語学部及び人間学部において、「教職課程センター」として既設分の基幹教員数等を記載しているが、これらの組織は学位プログラムを実施する組織ではないと見受けられることから、当該組織として記載している教員数は、大学設置基準に定める基幹教員数に含めることはできないため、適切に改めること。

(対応) 審査意見を踏まえ、教職課程センター所属教員の扱いを見直した。

審査意見 11 への対応で説明を行った通り、教職課程センターに所属する教員は、既存各学部にも所属し学位プログラムに責任を持つ教員であることから、各学部に整理したうえで大学設置基準に定める基幹教員の定義に沿って計上を行った。具体的には、外国語学部教職課程センターの教授 2 名を外国語学部英語コミュニケーション学科の「a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの」に、人間学部教職課程センターの教授 3 名を人間学部児童発達学科の「a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの」に計上を行った。

新旧対照表は審査意見 11 への対応と同様の為、割愛する。

13 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する教員を基幹教員以外の教員で補充する場合には、主要授業科目は原則として基幹教員が担当することとなっていることを踏まえ、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。

(対応) 審査意見を踏まえ、教員資格審査結果および担当予定者の変更等に伴い、担当教員の補充・再配置と科目構成の見直しを行い、教育課程の整合性とバランスを確保した。また、やむを得ない事情に就任することができない教員については、後任の補充を行った。

【対応1】授業科目判定にて不可となった科目についての対応

基幹教員として着任を予定している飯島史朗（教員個人調書_③_飯島史朗）について、教員資格審査において「不可」と判定された「画像解析概論」は、当該分野において適切な業績を有する基幹教員以外の教員である水戸和幸（調書番号_②①_水戸和幸）を担当者として充てることとする。なお、「画像解析概論」は主要授業科目ではない選択科目である。

【対応2】逝去により着任できなくなった基幹教員に対する対応

教員資格審査における指摘事項とは別に、基幹教員として着任を予定していた江原義弘（教員個人調書_04_江原義弘）が本年4月に逝去されたため、やむを得ない事情により就任が不可能となった。

江原が担当予定であった、「データサイエンスと物理」及び「バイオメカニクス」については、いずれも主要授業科目ではない選択科目であることから、当該分野において適切な業績を有する基幹教員以外の教員として、本学学長である福井勉（教員個人調書_②②_福井勉）を担当者として充てることとした。

また、ドメイン設定の見直しに伴いカリキュラム全体を再検討した結果、「ヘルスケア入門」（修正前：生活・健康理解入門）については授業内容の変更により後任教員の補充を要しないこととなった。審査意見7【対応1】にて述べた通り、「福祉工学」科目は廃止済みである。

「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」については、江原義弘が「ヘルスケア」ドメインで担当予定であったが、同領域は飯田開（教員個人調書_①④_飯田開）が既に担当しており、ディプロマ・ポリシーの到達目標には影響を及ぼさないことから、当該科目は一時的に開講を見送る方針とした。現在、後任となる基幹教員の補充を目的として公募を継続しており、適任者が採用され次第、当該科目の担当教員を基幹教員へと変更し、教育の拡充を図る予定である。

【対応3】逝去により着任できなくなった基幹教員以外の教員に対する対応

基幹教員以外の教員として就任を予定していた田端章明（教員個人調書_41_田端章明）についても、逝去されたことによりやむを得ず就任が不可能となった。

田端が担当予定であった「社会統計学Ⅱ」及び「量的データ分析」については、本学において同様の授業科目の担当経験があり、かつ当該分野において適切な研究業績を有する柳瀬公（調書番号_②②_柳瀬

公)を後任として充てることとした。また、審査意見7【対応4】にて科目の追加を説明した「社会調査法実践(量的)Ⅰ」および「社会調査法実践(量的)Ⅱ」についても、柳瀬を担当者とした。

【対応4】教育拡充のために追加で採用することとなった基幹教員に対する対応

審査意見6【対応2】において、工学分野における学位プログラムの質を担保する体制について説明を行った。これを踏まえ、今回の補正では、博士(工学)の学位を保有し、本学部におけるデータサイエンス科目の担当が可能な研究業績を有する浅野俊幸(教員個人調書①_浅野俊幸)を基幹教員として採用した。

これにより、データサイエンス科目の教育課程に責任を持つ基幹教員が補充され、工学分野における教育体制の一層の強化を図っている。具体的には、これまで基幹教員以外の教員の担当としていた「自然言語解析概論」「データマイニング概論」「トピックモデル概論」について、担当教員を浅野に変更する。またSTEM教員の科目負担の調整を目的として、「プログラミングⅠ」「プログラミングⅡ」「プログラミングⅢ」については担当者を穴太から浅野に変更した。

さらに、「地域づくり」ドメインにおけるデータサイエンスおよびAI活用の研究を拡充するため、「ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅡ」「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」を新たに開講し、研究テーマを「街と空間に基づいた人の行動解析・人流シミュレーション」と設定した。

(新旧対照表)設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
(p.41) ⑩ 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色 2. 教員組織の年齢構成 学部開設時点において、教授8名、准教授6名、助教3名である。年齢構成は <u>60代7名、50代7名、40代3名、30代1名</u> と、教育研究水準の維持向上及び教育研究の活性化に支障がない構成とする。本学教員の定年は満68歳であるが、開設時に定年を超えている、または完成年度までに定年を迎える基幹教員は <u>2名</u> おり、「文京学院大学任期付専任教員就業規則」第1章第2条【資料24】を適用し、特別任用教育指導職として完成年度までの契約を締結することで教育・研究体制を維持する。完成年度以降の定年退職については、後任となる教員を新規採用によって補充を行うため、教員組織の継続性に問題はない。	(p.37) ⑩ 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色 2. 教員組織の年齢構成 学部開設時点において、教授8名、准教授6名、助教3名である。年齢構成は70代1名、60代6名、50代6名、40代3名、30代1名と、教育研究水準の維持向上及び教育研究の活性化に支障がない構成とする。本学教員の定年は満68歳であるが、開設時に定年を超えている、または完成年度までに定年を迎える基幹教員は3名おり、「文京学院大学任期付専任教員就業規則」第1章第2条【資料24】を適用し、特別任用教育指導職として完成年度までの契約を締結することで教育・研究体制を維持する。完成年度以降の定年退職については、後任となる教員を新規採用によって補充を行うため、教員組織の継続性に問題はない。

(新旧対照表) シラバス

新	旧
(削除)	(p.80) 科目名：画像解析概論
(削除)	(p.124) 科目名：データサイエンスと物理
(削除)	(p.145) 科目名：バイオメカニクス
<p>(p.142) 科目名：<u>ヘルスケア入門</u> (授業の目的・到達目標) 【授業の目的】 本授業は、ヘルスケアの多面的な概念（身体的・精神的・社会的側面）を理解し、人々が心身ともに健やかに暮らせる社会の実現に向けた社会課題を理解するための基礎を身につけることを目的とする。食生活、運動、睡眠、メンタルヘルス、歯科口腔保健、健康格差、社会保障制度、職場の健康管理など、現代の健康に関する多様なトピックを通して、健康と社会との関わりを多角的に捉える視点を養う。これにより、今後の専門的な学びに対する関心と意義を育む。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヘルスケアの概念とそれを構成する身体的・精神的・社会的側面を説明できる ・食生活、運動、睡眠、メンタルヘルス、健康格差など、現代の健康に関する社会課題について基礎的な内容を説明できる ・健康に関する社会課題の背景構造や相互関係を理解し、それらの全体像を説明できる <p>(授業概要) (略) <社会と健康> 第2回：社会と健康①（健康の概念）【飯田】 第3回：社会と健康②（健康の社会的決定要因・</p>	<p>(p.135) 科目名：生活・健康理解入門 (授業の目的・到達目標) 【授業の目的】 本授業では、「生活・健康」ドメインにおける社会的課題を多角的な視点から理解することを目的とする。各専門分野におけるデータサイエンスやICTの活用事例を学び、それらが健康維持や社会課題の解決にどのように貢献しているかを検討する。また、各教員の専門性を通じて、学生自身の興味や関心のある分野を明確にし、今後の学習やキャリア形成の基盤を築くことを目指す。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生活・健康」ドメインにおける各専門分野の基本的な知識を理解することができる。 ・ICTやデータサイエンスが各分野でどのように活用され、社会課題の解決に貢献しているかを説明することができる。 ・自身の興味や関心のある分野を明確化し、今後の学習においてどのように活用するか検討することができる。 <p>(授業概要) (略) 第2～4回：リハビリテーション学とデータサイエンスの関係【飯田】 第5・6回：作業療法学におけるデータ活用【神作】</p>

<p>健康格差)【飯島】</p> <p>＜生活習慣の現状と対策＞</p> <p>第4回：生活習慣の現状と対策①（生活習慣病） 【飯島】</p> <p>第5回：生活習慣の現状と対策②（食生活と栄養） 【飯島】</p> <p>第6回：生活習慣の現状と対策③（身体活動・運動）【飯田】</p> <p>第7回：生活習慣の現状と対策④（ストレスの概念）【長野】</p> <p>第8回：生活習慣の現状と対策⑤（ストレスマネジメント）【長野】</p> <p>第9回：生活習慣の現状と対策⑥（睡眠）【長野】</p> <p>第10回：生活習慣の現状と対策⑦（歯科口腔保健）【神作】</p> <p>＜社会保障制度＞</p> <p>第11回：社会保障制度①（社会保障の概念）【神作】</p> <p>第12回：社会保障制度②（保健・医療・福祉制度） 【神作】</p> <p>第13回：社会保障制度③（職場の健康管理と健康経営）【飯田】</p> <p>（略）</p>	<p>第7・8回：データで解き明かす生理学【飯島】</p> <p>第9～11回：計測心理学とデータサイエンス 【長野】</p> <p>第12・13回：バイオメカニクスとデータサイエンス 【江原】</p> <p>（略）</p>
<p>(p.272)</p> <p>科目名：ゼミナールⅠ・ゼミナールⅡ・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱ（共通）</p> <p>（授業の目的・到達目標）</p> <p>（略）</p> <p>【ヘルスケアドメイン】</p> <p>（③ 飯島史朗）様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>（④ 神作一実）発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>（⑫ 長野祐一郎）アフェクティブコンピューティング</p> <p>（⑭ 飯田開）身体データと健康管理</p>	<p>(p.242)</p> <p>科目名：ゼミナールⅠ・ゼミナールⅡ・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱ（共通）</p> <p>（授業の目的・到達目標）</p> <p>（略）</p> <p>【生活・健康ドメイン】</p> <p>（3 飯島史朗）様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>（4 江原義弘）バイオメカニクスの観点から考える日常生活動作（ADL）向上トレーニング手法の構築</p> <p>（5 神作一実）発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>（13 長野祐一郎）アフェクティブコンピューティ</p>

<p>【地域づくりドメイン】</p> <p>(① 浅野俊幸) 街と空間に基づいた人の行動解析・人流シミュレーション</p> <p>(⑧ 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(⑪ 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(⑯ 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>【異文化間コミュニケーションドメイン】</p> <p>(② 穴太克則) 問題解決への多変量解析・確率モデル・機械学習とその応用</p> <p>(⑤ 恒吉僚子) 多文化共生社会</p> <p>(⑦ 渡部吉昭) <u>社会課題とマーケティング</u></p> <p>(⑨ 小山治) 大学教育の職業的レリバンス(意義・有効性)</p> <p>(⑩ 登丸あすか) デジタルメディアとメディアリテラシー</p> <p>(⑬ 貫井万里) 異文化理解</p>	<p>ング</p> <p>(15 飯田開) 身体データと健康管理</p> <p>【地域・環境ドメイン】</p> <p>(9 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(12 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(17 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>【ビジネス・文化ドメイン】</p> <p>(2 穴太克則) 問題解決への多変量解析・確率モデル・機械学習とその応用</p> <p>(6 恒吉僚子) 多文化共生社会</p> <p>(8 渡部吉昭) マーケティング戦略の実践</p> <p>(10 小山治) 大学教育の職業的レリバンス(意義・有効性)</p> <p>(11 登丸あすか) デジタルメディアとメディアリテラシー</p> <p>(14 貫井万里) 異文化理解</p>
<p>(p.81)</p> <p>科目名：自然言語解析概論</p>	<p>(追加)</p>
<p>(p.88)</p> <p>科目名：データマイニング概論</p>	<p>(追加)</p>
<p>(p.94)</p> <p>科目名：トピックモデル概論</p>	<p>(追加)</p>

(新旧対照表) 教員の氏名等 (教員名簿)

新						旧					
(p.2)						(p.2)					
調 書 番 号		フリガナ 氏名 〈就任(予定)年月〉		担当授業科目の名称		調 書 番 号		フリガナ 氏名 〈就任(予定)年月〉		担当授業科目の名称	
①	(略)	アサノ トシユキ 浅野 俊幸 〈令和8年4月〉	(略)	プログラミングⅠ プログラミングⅡ プログラミングⅢ 自然言語解析概論 データマイニング概 論※ トピックモデル概論 ゼミナールⅠ ゼミナールⅡ 卒業研究Ⅰ 卒業研究Ⅱ	(略)	(追加)					
(略)						(略)					
③	(略)	イシヅマ シロウ 飯島 史朗 〈令和8年4月〉	(略)	ヘルスケア入門※ 生化学と栄養 生体検査学 ゼミナールⅠ ゼミナールⅡ 卒業研究Ⅰ 卒業研究Ⅱ	(略)	3	(略)	イシヅマ シロウ 飯島 史朗 〈令和8年4月〉	(略)	画像解析概論 生活・健康理解入門 ※ 生化学と栄養 生体検査学 ゼミナールⅠ ゼミナールⅡ 卒業研究Ⅰ 卒業研究Ⅱ	(略)
(削除)						4	(略)	エハラ ヨシヒロ 江原 義弘 〈令和8年4月〉	(略)	データサイエンスと 物理 生活・健康理解入門 ※ バイオメカニクス 福祉工学 ゼミナールⅠ ゼミナールⅡ 卒業研究Ⅰ 卒業研究Ⅱ	(略)

(略)					
②①	(略)	フカイ ツトム 福井 勉 〈令和 9 年 4 月〉	(略)	データサイエンスと 物理 バイオメカニクス	(略)
(略)					
②①	(略)	ミト カズユキ 水戸 和幸 〈令和 9 年 9 月〉	(略)	画像解析概論 人工知能(AI)応用 I 人工知能(AI)応用 II	(略)
(略)					
②②	(略)	ヤシセ トオル 柳瀬 公 〈令和 9 年 9 月〉	(略)	社会統計学 II 量的データ分析 社会調査法実践 (量的) I 社会調査法実践 (量的) II	(略)

(略)					
(追加)					
(略)					
4 9	(略)	ミト カズユキ 水戸 和幸 〈令和 10 年 4 月〉	(略)	人工知能(AI)応用 I 人工知能(AI)応用 II	(略)
(略)					
(追加)					

(新旧対照表) 授業科目の概要 (基本計画書)

新	旧
<p>(p.32)</p> <p>科目名：ゼミナール I ・ゼミナール II ・卒業研究 I ・卒業研究 II (共通)</p> <p>(略)</p> <p>【ヘルスケアドメイン】</p> <p>(③ 飯島史朗) 様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>(④ 神作一実) 発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>(⑫ 長野祐一郎) アフェクティブコンピューティング</p> <p>(⑭ 飯田開) 身体データと健康管理</p>	<p>(p.29)</p> <p>科目名：ゼミナール I ・ゼミナール II ・卒業研究 I ・卒業研究 II (共通)</p> <p>(略)</p> <p>【生活・健康ドメイン】</p> <p>(3 飯島史朗) 様々な生体情報に基づいた健康管理</p> <p>(4 江原義弘) バイオメカニクスの観点から考える日常生活動作 (ADL) 向上トレーニング手法の構築</p> <p>(5 神作一実) 発達期の作業療法、摂食嚥下リハビリテーション</p> <p>(13 長野祐一郎) アフェクティブコンピューティング</p> <p>(15 飯田開) 身体データと健康管理</p>

<p>【地域づくりドメイン】</p> <p><u>(① 浅野俊幸) 街と空間に基づいた人の行動解析・人流シミュレーション</u></p> <p>(⑧ 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(⑪ 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(⑯ 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>(略)</p>	<p>【地域・環境ドメイン】</p> <p>(9 甲斐田きよみ) 国際協力とジェンダー平等</p> <p>(12 仲田知弘) 社会経済シミュレーション、AI や統計学を用いたデータサイエンス、学習システムと教育工学</p> <p>(17 岩舘豊) アーバニズムと都市コモンズについてのハイブリッドエスノグラフィー</p> <p>(略)</p>
--	--

審査意見への対応を記載した書類（6月） 資料

目 次

【資料 1】 OECD Regional Development Studies 書籍情報	p.2
【資料 2】 MIT Press, <i>Human-Centered Data Science</i>	p.4
【資料 3】 University of Toronto, Human-Centered Data Science	p.6
【資料 4】 日本学術会議「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学分野」（抜粋）	p.7
【資料 5】 卒業研究におけるテーマ設定及びデータサイエンスの活用に関する審査実施要領案	p.9
【資料 6】 履修モデル	p.12
【資料 7】 ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領案	p.15

OECD Regional Development Studies

Book series

ISSN: 2789-8008 (Online)

Continues: [OECD Reviews of Regional Innovation](#)



Continues OECD Reviews of Regional Innovation

Discover

Abstract

Regional development or “place-based” policies are essential to enhance the performance and well-being in all regions. These policies can help reduce regional inequalities, drive efficiencies in public service delivery, support quality infrastructure, boost national performance, enhance resilience and support environmentally sustainable development.

Underpinned by unique granular data at the regional and local levels, the publications in this series consider how regional development is affected by issues such as globalisation, climate change, innovation, digitalisation, demographic change.

These reports and their policy recommendations are relevant to national, regional and local governments, financial institutions, academics, businesses and civil society.

Latest publications

Place-Based Policies for the Future • 19 May 2025



Going Granular with Regional and Municipal Fiscal Data • 18 November 2024



Subnational Public Employment in OECD and EU Countries • 18 November 2024



Reaching Climate Neutrality for the Hamburg Economy by 2040 • 26 January 2024



A Territorial Approach to Climate Action and Resilience • 6 December 2023



Enhancing Strategic Planning and Innovation Services • 20 November 2023



Regions in Industrial Transition 2023 • 29 September 2023



Rethinking Regional Attractiveness in the New Global Environment • 5 July 2023



Regional Industrial Transitions to Climate Neutrality • 15 February 2023



Urban-Rural Linkages in Poland • 27 June 2022



Global Compendium of Land Value Capture Policies • 21 June 2022



The Contribution of Migration to Regional Development • 10 March 2022



Regional Innovation in Piedmont, Italy • 16 December 2021



Implications of Remote Working Adoption on Place Based Policies • 22 June 2021



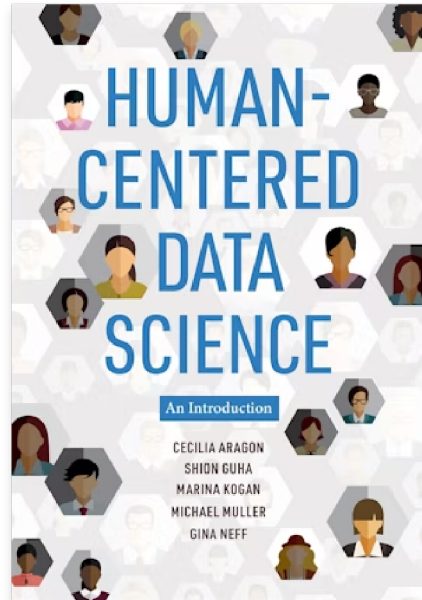
Applying the Degree of Urbanisation • 28 April 2021



See all publications 

出典: OECD Regional Development Studies

URL: https://www.oecd.org/en/publications/oecd-regional-development-studies_fa744789-en.html



[Request exam copy](#)

[View preview](#)

Human-Centered Data Science

An Introduction

By [Cecilia Aragon](#), [Shion Guha](#), [Marina Kogan](#), [Michael Muller](#)
and [Gina Neff](#)

Paperback

-

\$35.00

Paperback
ISBN: 9780262543217
Pub date: March 1, 2022
Publisher: The MIT Press
200 pp., 7 x 10 in, 24 b&w illus.

[MIT Press Bookstore](#)

[Penguin Random House](#)

[Amazon](#)

[Barnes and Noble](#)

[Bookshop.org](#)

[Indiebound](#)

[Indigo](#)

[Books a Million](#)

eBook

+



Description



Best practices for addressing the bias and inequality that may result from the automated collection, analysis, and distribution of large datasets.

Human-centered data science is a new interdisciplinary field that draws from human-computer interaction, social science, statistics, and computational techniques. This book, written by founders of the field, introduces best practices for addressing the bias and inequality that may result from the automated collection, analysis, and distribution of very large datasets. It offers a brief and accessible overview of many common statistical and algorithmic data science techniques, explains human-centered approaches to data science problems, and presents practical guidelines and real-world case studies to help readers apply these methods.

The authors explain how data scientists' choices are involved at every stage of the data science workflow—and show how a human-centered approach can enhance each one, by making the process more transparent, asking questions, and considering the social context of the data. They describe how tools from social science might be incorporated into data science practices, discuss different types of collaboration, and consider data storytelling through visualization. The book shows that data science practitioners can build rigorous and ethical algorithms and design projects that use cutting-edge computational tools *and* address social concerns.

Author(s)



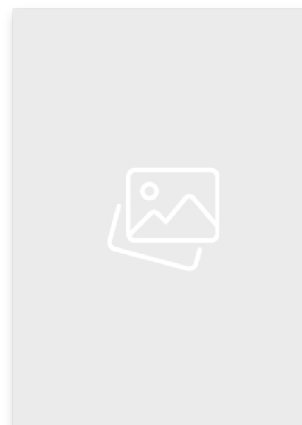
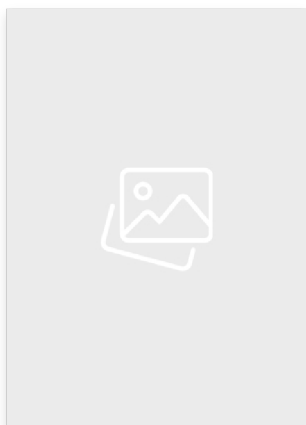
Praise

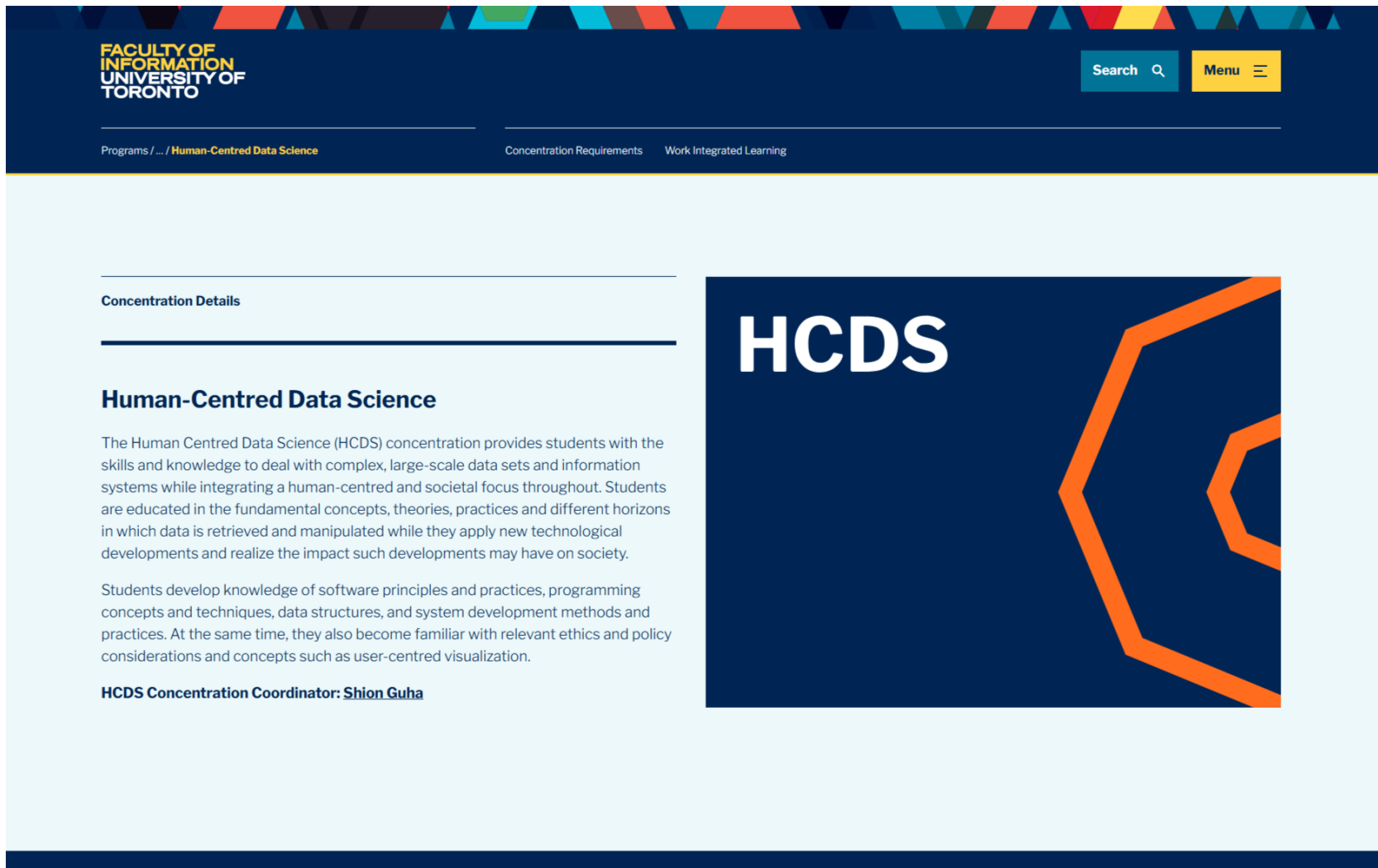


Resources





Related Books





The screenshot shows the top navigation bar of the University of Toronto Faculty of Information website. The header includes the university logo, a search bar, and a menu button. Below the header, the breadcrumb trail reads "Programs / ... / Human-Centred Data Science". The main content area is divided into two columns. The left column contains the section title "Human-Centred Data Science" and two paragraphs of text describing the concentration. The right column features a large graphic with the text "HCDS" and a stylized orange geometric shape. The footer of the page is a solid dark blue bar.

**FACULTY OF INFORMATION
UNIVERSITY OF TORONTO**

Search  Menu 

Programs / ... / **Human-Centred Data Science** Concentration Requirements Work Integrated Learning


Concentration Details

Human-Centred Data Science

The Human Centred Data Science (HCDS) concentration provides students with the skills and knowledge to deal with complex, large-scale data sets and information systems while integrating a human-centred and societal focus throughout. Students are educated in the fundamental concepts, theories, practices and different horizons in which data is retrieved and manipulated while they apply new technological developments and realize the impact such developments may have on society.

Students develop knowledge of software principles and practices, programming concepts and techniques, data structures, and system development methods and practices. At the same time, they also become familiar with relevant ethics and policy considerations and concepts such as user-centred visualization.

HCDS Concentration Coordinator: [Shion Guha](#)



出典：University of Toronto, Faculty of Information
URL：https://ischool.utoronto.ca/master-of-information/human-centred-data-science/

報告

大学教育の分野別質保証のための
教育課程編成上の参照基準
情報学分野



平成28年（2016年）3月23日

日本学術会議

情報学委員会

情報科学技術教育分科会

1 作成の背景

日本学術会議は、文部科学省高等教育局長からの依頼を受け、2010年（平成22年）7月に回答「大学教育の分野別質保証の在り方について」を取りまとめ、同年8月に文部科学省に手交した。同回答においては、大学（学士）専門課程の分野別質保証のための手法として、分野別の教育課程編成上の参照基準を策定することを提案している。日本学術会議では、回答の手交後、引き続きいくつかの分野に関して参照基準の策定を進めてきたが、今般、情報学の参照基準が取りまとめられたことから、同分野に関連する教育課程を開設している大学をはじめとして各方面で利用していただけるよう、ここに公表するものである。

2 報告の概要

(1) はじめに

情報技術による社会変動を背景に、情報分野の専門性を涵養する教育への要求は日に日に高まっている中、情報学分野における参照基準の策定は喫緊の課題であった。

(2) 情報学の定義

情報学は、情報によって世界に意味と秩序をもたらすとともに社会的価値を創造することを目的とし、情報の生成・探索・表現・蓄積・管理・認識・分析・変換・伝達に関わる原理と技術を探求する学問である。情報学を構成する諸分野は、単に情報を扱うというだけではなく、情報と対象、情報と情報の関連を調べることにより、情報がもたらす意味や秩序を探求している。さらに、情報によって価値、特に社会的価値を創造することを目指している。

情報学は、諸科学との境界において新たな応用分野を恒常的に生み出しているが、以上の定義に従えば、これらの応用分野も情報学に含まれるだろう。しかし、ひとまず現時点においては、情報学の専門家となるためには、情報学の最も基本的な中核部分を体系的に学ぶことがきわめて重要である。なぜなら、計算理論から社会情報学に至る学問分野の流れは、決して一つ一つが独立ではなく、互いに密接に関連しているからである。よって本参照基準では、社会情報学までを含む最も基本的な中核部分に焦点をしばって情報学を記述することにする。すなわち、本参照基準が定義する情報学は、応用分野までも含む広義の情報学ではなく、情報学の中核部分である。

(3) 情報学固有の特性

中核部分に限っても情報学は多くの分野から成り、特に文系と理系に広がっている。情報社会を探求し、よりよい情報社会を築くためには、コンピュータ上で処理される情報と社会におけるコミュニケーションで用いられる情報を、共通に理解し統御するための普遍的な原理が必要である。したがって、それら学問分野の上層に情報一般の原理を

位置づけ、情報学の中核部分を定義することが妥当である。本参照基準では、下記5つの分類(ア～オ)に従って情報学の中核部分を体系化する。ア 情報一般の原理、イ コンピュータで処理される情報の原理、ウ 情報を扱う機械および機構を設計し実現するための技術、エ 情報を扱う人間社会に関する理解、オ 社会において情報を扱うシステムを構築し活用するための技術・制度・組織

情報学とその応用(応用情報学)についての一つの見方として、情報学の中核部分が諸科学に対する「メタサイエンス」であるという考えがある。メタサイエンスとは諸科学全体を覆うサイエンスを意味している。

(4) 情報学を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養

情報学を学ぶものが獲得すべき基本的な知識を上記のア～オの分類に従い詳述する。

情報学に固有の能力を、情報処理・計算・データ分析、システム化、情報倫理・情報社会の観点からまとめる。また、情報学の学修を通して獲得されるジェネリックスキルを、創造性、論理的思考・計算論的思考、課題発見・問題解決、コミュニケーション、チームワーク・リーダーシップ・チャンス活用、分野開拓・自己啓発の観点からまとめる。

(5) 学修方法および評価方法に関する基本的な考え方

情報学の学修方法としては、プログラミング演習に加えて、他の諸科学と同様、講義、実験・演習・実習・ゼミナール、プロジェクト学習などがある。各種の演習の中でも、プログラミングに関連する演習は、情報学の学習の中心に位置づけられ、情報学を学ぶものは必ず体験すべきである。

(6) 専門性と市民性を兼備するための教養教育

情報学を専門に学ぶものが身に付けるべき教養について述べる。情報学が諸科学との境界において新たな応用情報学を生み出し続けるとするならば、情報学を学ぶものは、応用情報学の場に臆さずに出て行くためにも、諸科学に関する幅広い教養を有している必要がある。周辺諸科学の教養は情報学を学ぶものが良き市民として民主的な社会の形成に貢献するためにも重要である。

(7) 専門基礎教育および教養教育としての情報教育

情報学以外の専門課程における基礎教育、さらに、初等中等教育から大学の教養教育に至る教育課程における情報教育について述べている。情報学はメタサイエンスとして、すべての諸科学の基盤の一つと考えられる。したがって、情報学は、情報学を専門に学ぶものに限らず、広く市民が持つべき教養の一部ともなっている。また、情報技術の進歩から新たに生じる諸問題を解決し情報社会を発展させるためには、市民の一人一人が情報技術に関する知識を背景として、情報社会の制度や情報倫理に関する見識を有していなければならない。

ヒューマン・データサイエンス学部

「卒業研究におけるテーマ設定及びデータサイエンスの活用に関する審査実施要領」(案)

1. 目的

ヒューマン・データサイエンス学部（以下「本学部」）における卒業研究は、学部において体系的に修得した「データサイエンス科目」「ヒューマン・ドメイン科目」「プロジェクトマネジメント科目」等の知識・技能を統合し、データサイエンスおよび AI の活用を通じて社会課題の解決に取り組む実践的教育の集大成として位置づけられる。

本要領に基づく審査（以下「本審査」）は、卒業研究の研究テーマおよび研究計画におけるデータサイエンスの応用の妥当性を事前に確認するとともに、必要に応じて使用手法等に関する助言・指導を行うことで、学修成果の適切な発露と質保証を図ることを目的とする。

本審査は、本学部に設置される情報教育委員会（以下「本委員会」）が実施・運営を担う。

2. 本委員会の構成

本委員会は、以下の構成とする。

- ・教授会により任命された、工学または理学の学位を有する本学部の基幹教員
- ・学習支援本郷グループ マネジャー
- ・本学部教務グループ所属職員
- ・その他、委員長が必要と認めた者

※必要に応じて、専門的知見を有する学内外の教員・研究者を臨時に招聘することができる。

3. 本委員会の役割

本委員会は、卒業研究における研究テーマおよび研究計画（以下「研究テーマ等」）について、以下の事項を担う。

- ・研究テーマ等が、データサイエンスの応用による課題解決型の内容であることを確認する。
- ・適切なデータ解析手法が選定・適用されているかを審査し、不十分な場合は改善指導を行う。
- ・指導教員または本委員会の判断により専門的支援が必要とされる場合、当該分野の知見を有する教員を指定し、支援体制を構築する。
- ・研究テーマ等の適否を判断し、適切と認められる場合には承認を行う。
- ・卒業研究の進捗確認および成果物の内容について適宜確認を行い、必要に応じて修正・助言を行う。

4. 指導教員の役割

卒業研究の指導教員は、以下の事項を担う。

- ・データサイエンスの応用により課題解決を図る内容の研究テーマ等を設定し、学生に対する継続的な研究指導を行うこと。
- ・本委員会と連携し、学生の研究活動が適切に進行するよう支援すること。
- ・教育上の問題が生じた場合には、本委員会と連携し、必要な対応を講じること。

5. 審査および進捗管理の実施方法

(1) 研究テーマ等の事前審査

- ・指導教員は、当該年度の4月中に、卒業研究の研究テーマ等を本委員会に申請する。
- ・本委員会は、必要に応じて審査担当者を指名し、申請内容の審査を行う。
- ・審査の過程において、内容に不明瞭または不適切な点が認められる場合、申請教員への意見聴取を実施する。
- ・データサイエンスの応用が不十分である、または解析手法に妥当性を欠く場合は、具体的な改善提案を添えて再申請を求める。
- ・審査の結果、適切と認められた研究テーマ等については、本委員会により正式に承認する。

(2) 研究進捗の確認および支援

- ・承認済みの研究テーマ等に基づく研究の進捗状況について、7月から9月を目途に指導教員から報告を受け、本委員会にて進捗の妥当性を確認する。
- ・必要に応じて、指導教員の申請または本委員会の判断に基づき、専門的支援を行う教員を指名する。
- ・研究成果物について、1月を目安に内容確認を行い、学部の定める基準を満たす場合は、本委員会において卒業研究としての承認を行う。

(3) 卒業研究の審査体制

- ・最終成果物に対する評価は、指導教員による学修成果の確認に加え、必要に応じて本委員会が指名する教員による確認を行う。
- ・成果物の評価において重大な疑義が生じた場合は、本委員会にて協議のうえ、最終判断を行う。
- ・本委員会の承認をもって、卒業研究として正式に認定する。

6. 振り返りおよび改善

- ・当該年度末(3月)に、本審査全体の実施内容を総括し、次年度以降に向けた改善点の抽出および制度改善案の検討を行う。
- ・「ドメインとデータ解析演習A～G」で行われる学生による振り返り内容を指導教員に共有し、今後の研究テーマ設定・研究計画指導に活用することを促す。

7. 守秘義務および情報管理

審査の実施にあたっては、学内の関連規程・規則を遵守し、個人情報および研究内容に関する情報の適切な管理を徹底する。不利益な取り扱いを防止するとともに、関係者には守秘義務を遵守させるものとする。

8. 庶務

本実施要領に関する庶務業務は、ヒューマン・データサイエンス学部教務グループが所掌する。

以上

附 則

本実施要領は 令和 8 年 4 月 1 日より実施する。

履修モデル（ヘルスケアドメイン） 黒：必修 紫：選択 数字：単位数

1年次（44単位）			2年次（44単位）		3年次（22単位）		4年次（14単位）									
大学特別科目	人間共生論	2														
教養科目	情報リテラシーⅠ	1	情報リテラシーⅡ	1												
	英語Ⅰ	1	英語Ⅱ	1												
	フィットネス科学	2			フィットネス科学演習Ⅰ	2	フィットネス科学演習Ⅱ	2								
キャリア・インターンシップ科目	キャリアデザインⅠ	2	キャリアデザインⅡ	2												
学科基礎科目	初年次演習Ⅰ	2	初年次演習Ⅱ	2												
	データサイエンスへのいざない	2														
データサイエンス科目	プログラミングⅠ	4	プログラミングⅡ	2	プログラミングⅢ	2	自然言語解析概論	2	データマイニング概論	2	画像解析概論	2				
	ドメインとデータサイエンス	2	データベースシステム概論	2	ヒューマンデータ可視化法	2	IoTとヒューマンデータ	2	トピックモデル概論	2						
	ヒューマンデータエンジニアリング演習Ⅰ	2	ヒューマンデータエンジニアリング演習Ⅱ	2	システム設計論	2										
			機械学習入門	2	機械学習応用	2										
			基礎統計学	2	統計処理演習	2	ベイズ推定とデータサイエンス	2	ベイズ推定と意思決定	2			人工知能(AI)応用Ⅰ	2	人工知能(AI)応用Ⅱ	2
					データサイエンスと線形代数	2	データサイエンスと微積分	2								
ヒューマン・ドメイン科目			生活・健康理解入門	2	心理学概論	2	心身測定学	2	生化学と栄養	2	生体検査学	2				
			地域・環境理解入門	2	ヘルスプロモーション	2	リハビリテーション論	2								
			ビジネス・文化理解入門	2	教育社会学概論	2	比較教育学	2								
					共生まちづくり論	2	ジェンダーと開発研究	2								
プロジェクトマネジメント科目	未来体験プログラム	2			経営学入門	2	プロジェクトマネジメント概論	2	プロジェクトマネジメント演習	2						
実践科目									ドメインとデータ解析演習F	2	ドメインとデータ解析演習D	2	ドメインとデータ解析演習B	2		
									ゼミナールⅠ	2	ゼミナールⅡ	2	卒業研究Ⅰ	4	卒業研究Ⅱ	4

- 卒業要件
- 必修科目は70単位
 - 選択必修科目は38単位（教養科目から4単位、データサイエンス科目から10単位、ドメイン科目から20単位、実践科目から4単位）
 - 自由選択科目は20単位
 - データサイエンス科目から10単位のうち、「データサイエンス」区分より4単位修得すること（但し「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は対象外）
 - ドメイン科目から20単位のうち、各ドメイン領域より最低4単位ずつ修得すること

履修モデル（地域づくりドメイン） 黒：必修 紫：選択 数字：単位数

	1年次（44単位）		2年次（44単位）		3年次（26単位）		4年次（10単位）	
大学特別科目	人間共生論	2						
教養科目	情報リテラシーⅠ	1	情報リテラシーⅡ	1				
	英語Ⅰ	1	英語Ⅱ	1				
	社会調査法Ⅰ	2	社会調査法Ⅱ	2	社会統計学Ⅰ	2	社会統計学Ⅱ	2
キャリア・インターンシップ科目	キャリアデザインⅠ	2	キャリアデザインⅡ	2				
学科基礎科目	初年次演習Ⅰ	2	初年次演習Ⅱ	2				
	データサイエンスへのいざない	2						
データサイエンス科目	プログラミングⅠ	4	プログラミングⅡ	2	データマイニング概論	2	自然言語解析概論	2
	ドメインとデータサイエンス	2	データベースシステム概論	2	シミュレーション論	2	トピックモデル概論	2
	データサイエンス特講Ⅰ	2	機械学習入門	2	システム設計論	2		
			基礎統計学	2	IoTとGIS	2		
					機械学習応用	2		
					統計処理演習	2		
ヒューマン・ドメイン科目			生活・健康理解入門	2	データサイエンスと線形代数	2	データサイエンスと微積分	2
			地域・環境理解入門	2	心理学概論	2	心身測定学	2
			ビジネス・文化理解入門	2	家族生活論	2	国際協力論	2
					都市論	2	地域政策論	2
プロジェクトマネジメント科目	未来体験プログラム	2	経営学入門	2	事業戦略論	2	マーケティング概論	2
			プロジェクトマネジメント概論	2				
実践科目					プロジェクトマネジメント演習	2		
					ドメインとデータ解析演習E	2	ドメインとデータ解析演習G	2
					ゼミナールⅠ	2	ゼミナールⅡ	2
							卒業研究Ⅰ	4
							卒業研究Ⅱ	4

卒業要件
1) 必修科目は70単位
2) 選択必修科目は38単位（教養科目から4単位、データサイエンス科目から10単位、ドメイン科目から20単位、実践科目から4単位）
3) 自由選択科目は20単位
3) データサイエンス科目から10単位のうち、「データサイエンス」区分より4単位修得すること（但し「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は対象外）
4) ドメイン科目から20単位のうち、各ドメイン領域より最低4単位ずつ修得すること

履修モデル（異文化間コミュニケーションドメイン） 黒：必修 紫：選択 数字：単位数

	1年次（42単位）		2年次（42単位）		3年次（26単位）		4年次（14単位）	
大学特別科目	人間共生論	2						
教養科目	情報リテラシーⅠ	1	情報リテラシーⅡ	1	ジェンダー・イノベーションと地域社会	2	パーソナルファイナンス	2
	英語Ⅰ	1	英語Ⅱ	1				
	ジェンダー論	2						
	日本国憲法	2						
キャリア・インターンシップ科目	キャリアデザインⅠ	2	キャリアデザインⅡ	2	キャリア特講Ⅰ	2	キャリア特講Ⅱ	2
学科基礎科目	初年次演習Ⅰ	2	初年次演習Ⅱ	2				
	データサイエンスへのいざない	2						
データサイエンス科目	プログラミングⅠ	4	プログラミングⅡ	2	プログラミングⅢ	2	音声解析概論	2
	ドメインとデータサイエンス	2	データベースシステム概論	2	システム設計論	2	自然言語解析概論	2
			機械学習入門	2	機械学習応用	2		
			基礎統計学	2	統計処理演習	2	データマイニング概論	2
					データサイエンスと線形代数	2	画像解析概論	2
ヒューマン・ドメイン科目			生活・健康理解入門	2	生化学と栄養	2	生体検査学	2
			地域・環境理解入門	2	自然環境保護論	2	環境ビジネス論	2
			ビジネス・文化理解入門	2	異文化間コミュニケーション	2	ソーシャルメディア論	2
					メディア概論	2	メディアリテラシー	2
							教育社会学概論	2
プロジェクト マネジメント科目	未来体験プログラム	2	経営学入門	2	プロジェクトマネジメント概論	2	比較教育学	2
実践科目					プロジェクトマネジメント演習	2	ドメインとデータ解析演習C	2
							ドメインとデータ解析演習A	2
					ゼミナールⅠ	2	ゼミナールⅡ	2
							卒業研究Ⅰ	4
							卒業研究Ⅱ	4

卒業要件
1) 必修科目は70単位
2) 選択必修科目は38単位（教養科目から4単位、データサイエンス科目から10単位、ドメイン科目から20単位、実践科目から4単位）
3) 自由選択科目は20単位
3) データサイエンス科目から10単位のうち、「データサイエンス」区分より4単位修得すること（但し「データサイエンス特講Ⅰ・Ⅱ」は対象外）
4) ドメイン科目から20単位のうち、各ドメイン領域より最低4単位ずつ修得すること

ヒューマン・データサイエンス学部 ドメインとデータ解析演習 A～G 実施要領（案）

1. 授業の目的

本学部では、実践科目の選択必修科目として「ドメインとデータ解析演習 A～G」（以下、本科目区分。）を配置しており、学生はドメインごとに必要とされるデータ解析手法を修得させる（表1）。

具体的には、トピックモデル、画像解析、音声解析、LLM（大規模言語モデル）、GIS（地理情報システム）、IoT とヘルスケア、IoT とまちづくりについて、親和性の高いドメインの具体的な事例を用いながらデータ解析を行う演習形式の授業を行う。2 年次または 3 年次までに「ヒューマン・ドメイン科目」で身につけた社会課題を理解・把握する力を基に（表2）、実社会においてデータを収集し解析した上で、それを根拠に課題解決案を作成するための手法を身につけさせる。

本科目区分は、他の「データサイエンス科目」「ヒューマン・ドメイン科目」「プロジェクトマネジメント科目」と合わせ、「卒業研究」に必要とされる知識・技能修得につながるよう編成している。

表 1 ドメインとデータ解析演習科目と履修条件

科目名	データ解析手法	履修条件 (記載の科目を単位修得すること)
ドメインとデータ解析演習 A	トピックモデル	トピックモデル概論
ドメインとデータ解析演習 B	画像解析	画像解析概論
ドメインとデータ解析演習 C	音声解析	音声解析概論
ドメインとデータ解析演習 D	LLM（大規模言語モデル）	自然言語解析概論
ドメインとデータ解析演習 E	GIS（地理情報システム）	時空間データ分析
ドメインとデータ解析演習 F	IoT とヘルスケア	IoT とヒューマンデータ
ドメインとデータ解析演習 G	IoT とまちづくり	IoT と GIS

表 2 ドメイン別に適合するデータサイエンス科目・実践科目

ドメイン	対応する ドメインとデータ解析演習科目
ヘルスケア	「ドメインとデータ解析演習 A」（トピックモデル） 「ドメインとデータ解析演習 B」（画像解析） 「ドメインとデータ解析演習 C」（音声解析） 「ドメインとデータ解析演習 D」（LLM） 「ドメインとデータ解析演習 F」（IoT とヘルスケア）
地域づくり	「ドメインとデータ解析演習 E」（GIS） 「ドメインとデータ解析演習 D」（LLM） 「ドメインとデータ解析演習 G」（IoT とまちづくり）
異文化間 コミュニケーション	「ドメインとデータ解析演習 A（トピックモデル）」 「ドメインとデータ解析演習 C（音声解析）」

2. 授業運営体制

本科目区分は、「具体的な事例を用いながらデータ解析を行う演習形式の授業」であり、「実務経験から得られる具体的な事例」を重視している科目であることから、実務でのデータ分析の経験を持つ基幹教員以外の教員を配置する。その為、情報教育委員会（以下、本委員会。）にて適切な授業運営がなされるよう指揮・指導を行い、組織的な管理・運営を行う。

3. 本委員会の構成 および 本科目区分に対する役割

本委員会は下記にて構成を行う。

- ・教授会により任命された、工学または理学の学位を有する本学部の基幹教員
- ・学習支援本郷グループ マネジャー
- ・本学部教務グループ所属職員
- ・その他、委員長が必要と認めた者

※ 本科目区分を担当する「基幹教員以外の教員」は、審議の内容に応じて委員会に招集する。

※必要に応じて、専門的知見を有する学内外の教員・研究者を臨時に招聘することができる。

本委員会では本科目区分に対し、下記の役割を担う。

- ・各担当教員に対し、本科目のカリキュラム全体における役割の周知
- ・具体的な事例、使用するサンプルデータ、解析手法の確認、および調整
- ・成果物の評価に関する評価ルーブリックの作成、および配布
- ・授業運営上のフォロー体制の整備、および発生した問題に対する対応の検討
- ・受講学生の学修支援及び、情報の共有
- ・授業運営に対する振り返りの実施

4. 本委員会の科目区分への対応

■ 各授業期間開始前の対応（3月 / 9月）

各期の授業期間開始前に、各担当教員に対し授業実施計画についてヒアリングを行う。実施計画が本授業の目的に一致するかについて確認を行い、必要に応じて変更等を指示する。本科目区分は、卒業研究で用いるデータサイエンスの知識を修得させる科目である点について重点的に確認する。

また、取り上げる具体的な事例、使用するサンプルデータ、解析手法を確認し、科目区分内の他の授業とのバランス、卒業研究で用いられているデータサイエンスとの整合性について検討し、必要に応じて変更との指示、サンプルデータの作成支援を実施する。

■ 各授業期間中の対応（4月～7月 / 10月～1月）

各授業担当教員は授業運営上の問題が発生した場合、本委員会に申告し指示を仰ぐ。本委員会は申告の都度開催し、必要な対応を行う。また、期中に少なくとも1回以上、各科目担当教員より授業進捗状況の確認を行う。進捗確認の結果は各授業担当教員に共有し、必要に応じて是正指示を行う。

本期間中、情報教育委員会において、各学生の「卒業研究におけるテーマ設定、データサイエンスの活用」についての審査を行い、データサイエンスを用いた各ドメインに対するアプローチについ

での指導を行う。本科目区分は卒業研究で用いるデータサイエンスの知識を修得させる科目であることから、これらの審査の結果を踏まえ、科目担当教員には情報をフィードバックし、適切な授業内容となる様に対応する。

また成果物の評価に関しても、本委員会が評価ルーブリックを作成・配布し、適正な評価が行われる様に対応する。

■ 各授業期間終了後の対応（８月 / ２月）

授業期間終了後に、各担当教員より授業状況を確認し振り返りを行う。

振り返りについては各授業担当教員にも共有する。また、ゼミナールⅠ、Ⅱ、卒業研究Ⅰ、Ⅱを担当する教員に対しても共有を行い、各ドメインとデータサイエンスを掛け合わせた研究実施に活用する。

5. 教員の役割

本科目区分を担当する教員は、本委員会からの指示・指導に従い授業運営を行う。

授業運営上の問題が発生した場合は、速やかに本委員会に報告し指示を受けなければならない。

6. 守秘義務と安全管理

本実施要領の実施においては、学内の規則・規程に従い、不利益のない取り扱いを徹底する。

また、本業務にて知りえた情報についての守秘義務が徹底されるよう、適切に取り扱う。

7. 庶務

本実施要領に係る事務処理は、ヒューマン・データサイエンス学部教務グループで担う。

以上

附 則

本実施要領は 令和８年４月１日より実施する。